

オラリオに最悪の呪詛師がいるのは間違っているだろうか？

五月雨@ノン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

乙骨優太と折本里香に夏油傑は敗北し、嘗ての親友五条悟の手によって人生の幕を閉じた。だが、本来地獄に逝く筈の彼の魂は地獄に逝くことはなかった

「一体ここは……?」

何の因果か彼はオラリオにその身を降ろした

自分が住んでいた場所とは常識すらも違う世界で最悪の呪詛したる彼はどう生きるのか

これは本来関わることはない者達が奏でる物語

# 目次

正義の使徒✓	
正義の女神	1
闇堕ち✓	
絶対悪	11
想定外	17
原作開始前	
見知らぬ世界	25
竈の女神	35
夏油傑の叫び	43
決別	53
格差	62
誓約	68

ステイタス	76
捕捉	85
対峙	94
衝突	102
決闘 【前編】	114
決闘 【後編】	131
禁句	152
追憶	170
月下の凶狼	197
月狼	211
決着	228
閑話 美の女神の優雅な一日	249
邂逅	256

契約

表裏一体

冒険者

原作開始

開幕

270

282

298

306

# 正義の使徒√

## 正義の女神

正義とは、大義とは一体何なんだろうか？

嘗ての私ならば考える意味も無い、そんな思考

私にとっての正義<sup>大義</sup>とは呪術師の未来と共に在った

非術師<sup>痕</sup>の負の感情から生まれ続ける呪霊との血を血で洗うような終幕を知ることのない戦い。

自分達よりも高位である呪術師を貶め、甚振り、排除しようと騒ぎ立て、呪霊を生み出し続ける非術師<sup>痕</sup>は私達にとって害悪でしか無かった

私が求めた理想は非術師<sup>痕</sup>など存在しない世界にあった

けれど、そんな理想は乙骨優太と特級過呪怨霊である折本里香。そして、片割れであつた悟によつて碎かれた

しかし、そんな私の理想は、目の前にある

迷宮都市オラリオ、古代に神が未知を、娯楽を求めて降り落ちた大地であり、エルフや小人などの元の世界では存在などしない幻想が多く住まうこの大地に私の身体は在った。非術師など存在しない世界、それと同時に私の求める同胞もこの世界には存在しなかった。

私は、生きる理由を見失った

この身体は未だに後悔の念に焼かれ、怠惰に生きることなど私自身が赦す筈も無かった。

ただ歩き続けた。同胞が、大義が見つかるとそんな有りもしない希望を抱きながらも。当然、幾ら歩けども、探せども見つかる訳も無く、私はその身を細らせていくのみだった

(もう、いつそのことを死んでしまおうか)

仄暗い路地裏、ポケットに忍ばせているナイフに手を滑らせ、首筋へと添える。万が一、死に損なうことなどないように、ナイフに呪力を流し込んで斬れ味を増させる

「結局私如きでは、何も為せないようだね」

そう嗤って、首へとナイフを突き立て――

「何しているの!？」

そんな路地裏に響く女性の声に、私は手を止めた

私は、ナイフを手に持ったまま声のした背後へと振り向いた。そこには、サラサラとまるで絹糸のように艶やか茶髪、まるで透き通る空のような青い目を持つ美しい女性  
がいた。彼女の名前は

「女神、アストレア」

オラリオの民に心優しき女神と慕われる正義の女神 アストレアがそこにいた  
「何してるの貴方!?!早く、そのナイフから手を離して!」

女神である彼女がこんな薄汚れた路地裏にいることに驚くが、行動力があるとも聞いた  
事があつたので「成程、こういうことか」とまるで他人事のようにそんな感想を抱いた

「別に、君にとって私など取るに足らない存在だろう?それに、君に私が死ぬことを止める  
正当な権限があると言っても言うのかい」

「別に権限なんて物はないわ。だけど、目の前で人が死ぬところを黙って見ているなんて

真似を私はしたくないの！」

アストレアの目には決して譲れぬと言わんばかりの信念がそこに浮かび上がっていた。これに夏油は幼稚だと言わんばかりに、鼻で嗤う

「ハッ。例えば、君にとってそれが善の行いであつても、それが他人にとって必ずしも善に成り得るなんてことは有り得ないんだよ。それは君の傲慢の押し付けだ。それを私に強要するな」

すると、アストレアはじゃああと口を開いた

「じゃあ、どうしてナイフを握っている貴方の手は震えているの？」

「!？」

夏油はそう指摘され、ナイフを握っている自らの手を目の前へと掲げる。そこには微かに震えている自らの手がそこにあった

（そんな馬鹿な!?!私が死を恐れているとでも!?!こんな世界に未練など何も——

「ねえ、貴方はどうして死のうとしているの?」

パツと手を取られ、優しい熱が夏油の手を包み込んだ

夏油にとって全ての神とは嫌悪の対象であり、自らの大切な後輩の命を奪った憎き相手だった。けれど、この手は、この温かさがこの神が夏油の知っている醜悪な神とは全



く違う存在だと主張しているような気がした。

これまでの疲労感も相まって、夏油はアストレアの問い掛けに対して口を開いた

「私は多くの人を殺した」

「！」

夏油のその言葉にアストレアは目を見開いた

「当初は、弱き人間は守るべきだと、守られるべきだとそう漠然と思っていた。それを為せる力が自分にあると過信していた」

「だが、本当に生きるべき人を、彼女を守ることは出来なかった。ただ、地面に這い蹲ることしか出来なかった。憎かった、自分の無力さが。悔しかった、ただ自らの片割れを見上げることしか出来ないのが。悲しかった、彼女という優しい人の死が。彼女は多くの人々に愛されるべき人だった」

「だが、非術師<sup>猿速</sup>は彼女の死に対して、拍手で、笑顔で出迎えた」

「そこから、私は疑問を持ち始めた。『非術師に我々が守る価値はあるのか？』と」

「ッ」

自分が想像していたものよりも、悲惨な夏油の人生にアストレアは思わず息を呑ん

だ。まるでそういう運命だと定められたか如く、夏油の人生的一幕にアストレアは同情を禁じ得なかつたが、それは夏油に対しての侮辱だとその感情を消した

「そんな時だ、私の後輩が。人間の信仰を失つたが故に墮ちた神に殺されたのは」

「私達が…」

アストレアは何となく、夏油が自分達とは違う所から来たということのを薄々察しながらも、神が直接人間を殺めたということに心を痛めた

「私は打ち拉がれたさ。〃また何も出来なかつた」と。私では、彼楯のようには成れないと」

「そんな時だった。ある人からこんな話をされた、敵呪霊は非術師の負の感情からでしか生じないと。その時、私は思った〃じゃあ、非術師猿を皆殺しにすれば良いんじゃないかと」

「それは…」

アストレアは言葉を詰まらせる

「勿論、その時は直ぐ様に何を考えているんだと自分の考えを否定したさ。けれど、敵呪霊と戦う度に頭に何度も、何度も、何度もそのことが過ぎつつた」

「そんなことが何日も続いた日だった。同胞呪術師である子供が理不尽に罪を押し付けられ、村の非術師共に虐げられているのを見たのは。腸が煮え滾るようなあの光景は、今も尚この目に焼き付いて離れない……！」

「気が付けば、私はその子供以外の村人を皆殺しにしていた」

「彼女達の手を握り締めながら、私はある大義正義を抱いた。それは呪術師のみの世界を作り上げること」

「その為には、どんな困難も、辛酸も舐めてきた。それが私の同胞達が手を取り合って笑い合える未来の為だと、そう思えば、そんな辛抱も乗り越えた」

「だが、私の大義正義は叶うことなく、私はこの大地に何時の間にか立っていた」

(やっぱり、貴方は……)

夏油の言葉にアストレアは夏油が自分達とは違う所から此処オラリオへと来たことを確信した

「此処オラリオには非術師共などが存在しない素晴らしい世界だ。モンスターという存在はあれど、呪霊は確認出来ない。形は違えど、此処は確かに私の理想だった」

「だが、私の同胞は存在しなかった。大義を、生きる理由を私は失った」

「教えてくれないか、正義の女神アストレア。私はこの同胞呪術師無き世界で、何を為せば良いのか、大義正義無き私は生きていて良いのか……私には、分からない」

ハリリと夏油の瞳から雫が零れ落ちた瞬間、アストレアは夏油のことを抱き締めていた

「生きてて良いのよ……！ 貴方は確かに、悪いことをした。それは未来永劫赦されることなんてないわ」

「けれど、私は貴方を悪人なんて思わない！」

「だって、貴方はこんなにも苦しみ、辛い思いを経験していても、貴方は人の為に動ける人なのだから！」

「正義だって人それぞれ、貴方がそうしたいと思ったこそが正義なの！ だから、お願い！ 死ぬなんて、悲しいことは辞めて……！」

まるで砂糖を煮詰めたかのような甘い、甘すぎるアストレアのその言葉に夏油は笑った

「まるで子供のような意見だね」

「それでも構わない！ 私は、貴方に生きていて欲しい！ 幸せになって欲しい、笑っていて

欲しいと感じたの！」

「そうか」

アストレアの心からの叫びに、夏油は嬉しそうに笑った

「私は生きていて良いのか」

肯定したのがアストレア以外ならば納得しなかつただろう。アストレアだからこそ、夏油は納得した。彼女の裏表の無い言葉が。正義を掲げる女神である彼女が、このオラリオに住まう民に慕われて止まない彼女だからこそ夏油はその言葉を受け入れた

「ありがとう。女神アストレア、君という存在に多大なる感謝を」

「大丈夫。私はただ、貴方に生きていて欲しかっただけだから」

そう笑うアストレアに夏油は口を開いた

「更に求めるようで悪いけど良いかな？」

「？何か用があるの？」

「君のファミリアに入団させてくれないかい？」

「私のファミリアに……それは一体どうして？」

「君のもとで私の正義を探してみたいとそう感じたからだ」

「…… 分かったわ！貴方が私の初めての眷属として歓迎するわ！」

暫く、考え込んだ後に彼女は夏油を初めての眷属として迎え入れることに決定した。

その答えに夏油は更に頬を緩ませ、口を開いた

「ありがとう。君と共に在れることを心から嬉しく思うよ」

そう夏油が言うのアストレアは少し顔を赤くするが、コホンと気を取り直すように咳払いをする

「改めて、私は女神アストレア！貴方の名前を教えて下頂戴！」

「私の名前は夏油傑。君の初めての眷属さ」

「では、これからよろしくお願ひします、傑！」

「此方こそだよ、アストレア」

そう言い、二人は握手を交わすと、そんな二人を祝福するように月光が照らした

（一から始めよう。此処で、彼女のもとで）

目の前にいる優しき女性を瞳に映しながら、今度こそ零れ落とさないように護つてみせると夏油は心に誓った

## 闇堕ち√

## 絶対悪

「呪術師が存在しない世界だと……？」

私は陽の光が差し込まない路地裏で憤怒に震えていた  
過去に一度だけミミとナナに聞かれたことがあった

“もし、呪術師がいない世界に行ったら、夏油様はどうするの？”と。そんな有り得ざることを

その問い掛けに、私は声を大にして“そんな世界を私は認めない。あるのならば滅ぼす”と答えた。正しい人の形、上位者として存在するのは我等である呪術師のみである  
それ以外の存在は皆等しく猿であり、赦されざる者達だ。そんな存在のみが蔓延る世界など滅びた方が健全であるとそう考えた

夏油は、呪術師が存在しない世界に価値を見出さない

だが、そんな夏油の目には悪夢が映っていた

「そんなものあつてたまるか……！」

夏油が激情の赴くままに石壁を殴りつけると、夏油の拳が突き刺さり、それを中心にミシリとヒビが入り、ガラガラと崩れ落ちる。それに夏油は目を向けず、左手の爪を噛み、目が充血する程に開いた

「神という醜悪な存在如きが絶対者として降臨しているだと……！そんなこと、呪術師である私が許す訳が無いだろう！」

夏油は意図的に封じ込めていた呪力が激情のあまりに僅かに漏れ出し、夏油の体を薄く覆ったがそれを気が付かない程に夏油は怒り狂っていた

「赦す訳が無いだろう!!お前達という存在を!!価値を!!お前達にあらゆる物を奪われてきたこの私自身がツ!!」

夏油がこの世の不条理に憎悪し、世界に抗うように大きく吼えた。そんな夏油に忍び寄る影が五つ、レベル1である下級冒険者の薄汚れた装いをしている者達、ソーマ・ファミリアの冒険者達が夏油へと近づく

「お、いー！」

「あ、？！」

夏油が振り返った瞬間に、一人の男が自らが握っている剣を夏油へと振りかざしていた。空気を切り裂く音と共に、夏油の脳天へと剣が振り下ろされる



「死ねッ!!」

神酒に溺れた哀れな男は、脳内に脳髓を撒き散らしながら、地面を紅く染める夏油の姿を夢想した。だが、それはあくまで夏油が恩恵を持たない一般人であった場合であり、夏油は恩恵こそ持たないが、それでも尚、レベル1程度など歯牙にもかからない程の実力者であった

「は」

剣は夏油の素手によって難なく受け止められており、男は大きく目を見開いた。だが、次の瞬間には、男の顔は体から切り離されていた。

切り離された、男の首からはまるで噴水のように血液を吹き出し、路地裏を赤く、紅く染めていく

「へ」

男の後ろにいた者達が間拔けな声を口から漏らすと共に、ゾクリと悪寒が背筋を駆け巡った。その瞬間、その者達は理解した、自分達が踏んではいけない尾を踏んだのだと  
男達が逃げようとするよりも速く、夏油は行動を移した

「死ねよ、猿共」

そんな無慈悲な声と共に冒険者達の周りに、異形が姿を現した。それは人の形をしているものや魚だったり、またキメラのように様々な生き物を合体させたようなものまでいた。

ただ、それは冒険者達が今までに見てきたどんな生き物にも合致せず、見るだけで発狂をしてみまいそうな程のおぞましい異形だった

「ば、化けもツ」

一人の冒険者が異形により頭から噛み砕かれ、地面へと脳髓を垂れ流しながら地面へと倒れ込んだ。その瞬間、徒党の中の一人であった女が悲鳴を上げる。だが、次の瞬間には、女は地面から現れた呪霊によって下半身を切断され、即死する

「ヒ、ヒィ!!」

「し、死にたくねえよおー!」

「誰か、たすけ」

夏油は呪霊達に指示を出し、一人残らずと冒険者達の命を、何の感慨も無く、ただ冷淡に奪い取っていく

残ったのは、至る所に血と臓物がへばりつく惨状のみであった。だが、夏油は自身の装いを気にすることなく、ただ何事も無く歩みを進める

もし、これがソーマ・ファミリア以外の冒険者以外ならば夏油を襲うことも無く、また夏油も手を出すことは無かつただろう。ただ、タイミングが悪かった

彼の心は、もう既に定まってしまった

「ああ、やはりお前達猿は愚かでなんと野蛮なのだろうか。私は赦せない、その飾りでしかない頭で、自分達こそが正常者だと根拠もなく確信し、我等を異常だと奇妙だと排除しようとするその傲慢さが!!弱者という面目を振り立て、平和を享受しようとするその貪が!!!」

夏油はバツと両手を広げ、月の光を存分に浴びる。その姿は、血に塗れながらもまるで物語の序章を描く出されているが如く、神聖な雰囲気醸し出していた。

だが、それと同時にドス黒い絶望を纏っていた

「ああ、やはり間違っている、狂っている、粛清されるべきであるツ!!神が我が物顔で闊歩するこの世界を、それを受け入れる愚かな猿も、全て壊そう。唯一の呪術師であるこの私が!!」

夏油は嗤った

「さあ、押し進めよう。この狂った世界の粛清を」

その日、誰にも知られることなく絶対悪が誕生した

## 想定外

「ふむ、先ずは来たるべく時の為の準備を進めなくてはな」

夏油は冒険者から奪い取ったマントを頭から被り、自らの服装や顔を晒さないようにする。夏油の現在の服装は相も変わらずに袈裟服であった

仏教が存在をしないこの世界では簡単には忘れられないような奇抜な格好であり、夏油が美形ということも相まり、一度見れば嫌でも夏油という存在を忘れることの方が不可能であった

そのことを夏油も正しく理解しているが故に、夏油は顔を隠し、まるで成り立ての冒険者の力量に自らの実力を調整することによつて違和感を消している

コソコソと動くことはあまり好きではないが、元の世界でもやってきた事である為、印象に残らないコツやバレないように行動することに慣れていた

（正直、世界の中心と言つても良い此処オラリオさえ潰してしまえばあとはどうにでもなる。だが、逆を言えば此処オラリオを潰せなければ全てを引つ繰り返される）

故に、夏油は緻密に情報を集める。ベテランや実力者ではなく下級冒険者を装い、自分が知らない情報やこの世界での常識を違和感無く、より確実に収集する為だ。

「ありがとうございます」

夏油はじゃが丸と言うネーミングセンスの欠片も感じさせない売店で働いていたチヨロそうなツインテールの女性にオラリオについて聞いたが、どうやら最近下界に降りてきたばかりの女神らしく、オラリオについては詳しく知らないようだった。

だが、それでも常識については知ることが出来ることは出来た

目の前の女性が女神ということに思わず殺意が漏れ出しそうになるが、鉄の如き理性でそれを無理矢理に封じ込める。

神は人の嘘を見抜く

もし、少しでも疑問を抱かれ、問い掛けられればそれだけで私の計画を見抜かれ、頓挫する可能性すらある。それだけは避けなければいけないことだ

「では、これで」

「また、会おうねえ!!」

目の前でニコニコと笑い、大きく手を振る女神も化けの皮を剥がせば私が知っている醜悪な存在だと知っていても、その面の皮の厚さにはある意味私も脱帽する

（取り敢えず、ダンジョンに潜るとしよう。それで、此処オラリオの戦力について多少は測れる筈だ）

私は天すら穿たんと聳え立つバベルの塔を一瞬だけ睨みつけ、ダンジョンの入り口へと気配を消しながら歩き出した

「第七階層でこれか……」

（この程度で新米殺しと言われる程なのか……これならば下級冒険者ならば幾ら数がかかるうが全て三級又は四級の呪霊でも対処可能と考えるのも良いだろう）

夏油はキラアアントが落とした魔石を拾い、興味深そうに眺める。そこからは呪力にも似た力である魔力が凝縮されているように感じられた

だが、夏油はそこに注視などしていない。夏油が目を向けているのは、その中心部分

の魔力に浸透している人間に対しての殺意という負の感情。

冒険者ならば感知出来ることのないそれは、負の感情に誰よりも触れて来た夏油だからこそそれを正確に見抜くことが出来た

(これは、もしかすると…)

夏油は呪力を魔石に流し込み、呪力を浸透させる

十秒程経てば、魔石の中にある余分な魔力は炎に炙られ、蒸発される水のように弾き飛ばされ、残るのは殺意が浸透していた魔力だった部分のみ。

人間への殺意というある意味純粹な負の感情という下地があつたことにより魔力は呪力へと形を変え、残されたそれは夏油にとって忘れられる筈も無い呪力を帯びた黒い玉がその手に存在していた

「ククク。これは思わぬサプライズだね」

(魔石を売り、金を得ている冒険者が、よりにもよってその魔石に襲われるなどなんと愉快の事だ)

夏油はそれを呑み込むと、確かに自分の呪霊のストックの数が増加したことを感じ取った



「出ている」

そう言うと、夏油の足元に黒い影が現れる。それは、キラーアントの形をしているが大きさは先程よりも多少ばかり小さくなっており、何よりまるで影そのものかのような影を纏っていた

それに夏油は大きく満足した。その理由は主に二つであった

一つは、普通のそれとは違うキラーアントの姿により錯乱を狙えるということ

もう一つは、キラーアントの丈夫な殻と呪霊と化したことにより得た呪力が相まり、呪力を扱うことの出来ない冒険者にとって手強いものに成ったということ

「戦力調達はダンジョンのみで事足りるかもしれないな……後は、私自身の装備、強化が問題だな」

（装備は、ダンジョンの奥深くで採れるという素材や鉱石で解決する。私自身の強化は……どうするべきか）

思考をしながらも、今まで取った魔石を収納しつつ、取り敢えず今日はこの辺でダンジョンから地上へと戻ろうとし、自分が歩いて来た道に戻って行く

（私自身の強化、どうするべきか……）

どれだけ考えてもその明確な答えは何時まで経っても出てこないことを察し、夏油

は自身の強化について一旦、考えることを止める

それと同時に、夏油はあることに気が付く

(人通りが無さすぎる。時間帶的にも人通りはある筈…… それなのに、何故こうも人が居ない?)

「ねえ」

「ッ！」

その艶やかな女性の声が夏油の耳に入った瞬間、ゾクリと言いたいようなもない悪寒が夏油の背筋に走り、夏油はその場から飛び上がり、後方へと下がることにより退避をする。

着地した瞬間に、夏油の視界の先には数メートル程離れ、フードを被った女性とガタイの良い獣人がそこに立っていた

その二人を目に映した瞬間、夏油の体は重圧なプレッシャーによつて悲鳴を上げた

数多の人を殺してきたその手は、まるで北極の雪原を歩いているが如く震え、鍛えられた両足はまるで地震でも起きているかのように大きく震えている

「、誰なんだお前達は」

「あら？このローブ越しとはいえ、この私分からないなんて随分と浅いのね。良いわ、特別に見せて上げる」

女がそう言うのと、ローブを脱ぐ。ローブを投げ捨てた女性の姿に夏油は大きく目を見開き、目の前の女性が女神だと察した

「私はフレイヤ」

「ッ！」

（フレイヤだと!?なら、その隣にいる男はッ）

「オツタルだ」

美の女神フレイヤとその眷属であり、現オラリオ最強の猛者オツタルが夏油の目の前に立ちはだかった

（あまりにも、想定外ッ。接触するには今の私では速すぎる……！）

夏油に絶望が告げられた

## 原作開始前

## 見知らぬ世界

「そうくるか！女誑しめ!!」

「失礼だな……純愛だよ」

特級過呪怨霊である里香に口に出鱈目な量の膨大な呪力が集まっていく、そのあまりの量に風は台風のように渦巻き、地面が罅割れ、亀裂が広範囲に広がる。

夏油はその様子を見て改めて里香の規格外の呪力量にど肝を抜きながらも、里香を手に入れればこの間違った世界を完全に革新することが出来ると

「ならばこちらは大義だ」

夏油傑の全力の一撃と文字通り命を懸けた乙骨と里香の一撃がぶつかり合い、ズドンと大きな衝撃が辺りに走り、凄まじい轟音が響き渡る。

そのぶつかり合いに辺りの建物はまるで豆腐のようにいとも簡単に崩落し、瓦礫へと姿を変える

（なんて威力……！）

「ツ・まさか、ここまでは——」

夏油傑の真正正銘の全身全霊は乙骨と里香の一撃によって打ち消される。

それだけでは二人の一撃は止まることなく、夏油の右腕が激しい熱に包まれ、根元から右腕が抉られる。その衝撃の余波に夏油の体は激しい風に攫われ、その体躯を大きく吹き飛ばした

こうして、最悪の呪詛師と特級被呪者の激しい戦闘は幕を下ろした。夏油傑の敗北を以て

「フッフ、素晴らしい。本当に素晴らしいよ、正に世界を変える力だ」

ズルズルと夏油傑は血液不足で重い体をなんとか動かし、建物の裏道を歩いていった。

乙骨に正面から挑み、敗北したにも関わらずその顔からは悲壯感はなく、寧ろ寧猛な笑みすら浮かべている。

彼の頭にあるのは自身が敗北したという絶望感ではなく、里香さえ手に入れば世界を革新出来るという確かな確信と希望だった

「里香さえあれば、せこせこ呪いを集める必要もない」

まと一步また一步と確かに歩みを進めていく

「次だ、次こそ手に入れる!!」

興奮と感動で声を震わせる夏油には重症を負っているという事実が霞む程のおどろおどろしい雰囲気があり、並の呪術師では近付くことすら出来ないだろう。

だが、そんな夏油に向かって近付いて来る男の影が一つあった

その男は両目に六眼を持ち、無下限呪術を完璧に操ることのでき、現代最強と唄われた男

その名前は——

「遅かったじゃないか、悟」

現代最強の男 五条悟



「まさか君で詰むとはな。家族達は無事かい？」

へタリと夏油は地面へと座り込み、五条悟へとそう問い掛ける

五条悟は溜め息を吐いた

「揃いも揃って逃げ果たせたよ。京都の方もオマエの指示だろ」

「まあね、君と違って私は優しいんだ。あの二人を私にやられる前提で乙骨の起爆剤として送りこんだな」

夏油はジトリした目で五条悟の方を見ながらそう言う

「そこは信用した。オマエの様な主義の人間は若い術師を理由もなく殺さない」と

五条悟がそう言うのと夏油は大きく目を見開いた後に、皮肉めいた笑いを思わず溢した

「クッククック、信用か。まだ私にそんなものを残していたのか」

夏油の脳内に嘗ての親友と過ごした日々が流れる

(ああ、懐かしいな)

夏油は少し感傷に浸った後に、胸元からあるものを取り出し、それを五条悟へと投げつける。

五条は突然投げられたそれに動揺することも無く、しっかりと受け止める

「コレを、返しといってくれ」

「!」

五条悟は夏油に投げつけられた物を見てみるとそれは乙骨優太の学生証だった（確か、優太は小学校のどこかで落としたりして言ったな……ということは、）  
「小学校もオマエの仕業だったのか!!」

「まあね」

「呆れた奴だ……」

五条悟が胸ポケットに乙骨優太の学生証を入れ、三回程深呼吸をした後、五条悟は問う

「何か言い残すことはあるか」

「……誰がなんと言おうと非術師さるともは嫌いだ。でも別に高専の連中まで憎かったわけじゃない」

夏油が一呼吸空ける

「ただこの世界では、私は心の底から笑えなかった」

それは夏油傑の本心だった

彼の心は呪霊を呑み込む度に蝕まれ、仲間を傷つけられていく度に磨り減っていった。

ある日、彼は特級呪術師九十九由基の話聞き、ある真実を知った。〃呪霊は非術師からしか生まれでない〃ということだった

その事を知った時真つ先に頭に浮かんだのは『じゃあ、非術師さるどもがいなくなれば呪術師私達は傷つかなくてすむのではないか？』という考えだった

それでも彼は非術師は守るべき者だと自分に言い聞かせてきた

しかし、そんな彼を嘲笑うかの様に運命は追い打ちをかけた。それは彼のことを慕っていた後輩の死、そして非術師による呪力を持つ双子の迫害。

そして、自身の片割れである五条悟との埋まることの無い圧倒的な迄の実力の差

彼の心はもう限界だった。彼はその場で迫害をした非術師達を皆殺しにし、双子と共にその場から逃亡した

その後、彼はひたすら呪霊を呑み込み続けた。全ては非術師を皆殺しにし、呪術師達仲間達が傷つくことなく、笑い合い暮らせるように、樂園を築けるように

そんな彼の仲間を思う優しさを知っている五条悟はフツと優しい笑みを浮かべる

「お前は今でも俺の唯一の親友だよ」

夏油傑は一瞬ポカンと口を半開きにした後、まるで初めて星を見た子供のように無邪気に笑った

「はっ、最期くらい呪いの言葉を吐けよ」

バシユと音を立て、夏油傑の心臓が五条悟によって撃ち抜かれる。

視界が流転し、暗転する中で今までの人生を振り返る

(ああ、碌でもない人生だったけど……悪くはなかった)

「ごめんねミミ、ナナ、それに私の家族達。先に逝かせてもらおうよ」

そうして夏油傑はこの世を去った

夏油傑は数多の非術師を騙し、そして殺した。そんな彼は紛れもなく悪人であり、赦されざるべき人間だろう

故に彼の行く末は地獄への一本道の筈だった

だが、何の因果か彼の運命は歪み、想定外の結果を生み出した。それは本来有り得ざる禁忌、常人では耐えきれぬそれに耐え切れずにたましいそのものが消滅するだろうが、最悪の呪詛師である夏油は決してそんな常識に囚われる男などではなかった

パチリと夏油が目を覚めますがあまりの眩しさに顔を顰め、目を守るように手で覆う  
「ツ！眩しいな……」

何回か瞬きをするとやがて目が慣れ始める

「私は乙骨優太に負けて、悟に殺された筈……」

しかし、彼の体には傷一つなく、失った筈の右腕もそこには確かに存在していた  
「これは一体どういうことだ……？」

夏油はそのまま座り込んでいる訳にもいかず、路地裏から出ようと足を進める。

辺りを見回すと周りの建物は夏油が今まで目にしてきたものとは掛け離れていた

（見たことがない建物だな…… 何者かによって何処かに移動でもさせられたのか）

スタスタと歩き続けていると、やがて出口が見える

「やっと出口か」

夏油はそこから出ると目を大きく開かせた

「は」

一時代前だと彷彿とさせるような建物と天まで届くのではないかと思わせる程に巨大な塔、そして獣人やエルフなどの様々な人々が賑わう様子が夏油の目に映った。

夏油はポカンと口を開き、呆然とする

「一体何処なんだここは……」

その都市の名は迷宮都市オラリオ

様々な神が下界に未知を求め、集まった場所だった

## 竈の女神

「一体何処なんだここは……？」

夏油傑は目の前の光景に自らの目を疑った

（こんな所、見たことも聞いたことも無い……それに獣人やエルフだと？そんな空想状態の生物が存在しているなんて信じ難い。ということとは呪術師の術式又は呪物によるものなのか？いや、それこそあり得ない。あの場には私と悟しかいなかった。もし、いたとしても悟なら絶対に気付く筈だ…… 兎も角）

「情報が足りなすぎる……情報を取り敢えず集めなければいけないな」

チラリと自分の服装を覗き見る。いつも通り修行僧の様な袈裟服を身に纏っている夏油は客観的に見て完全に危ない人そのものであった

それに自分が袈裟服を着用していることを少し恨みつつ、どう行動するか思考する

（この服装で情報を収集するのは流石に怪しすぎる……何か別の服でもあれば良いのだが）

夏油は取り敢えず何かないと周りの廃墟らしき所を何軒か漁り回っていく。

その姿は着用している服や夏油から滲み出る胡散臭さ

を含め、今の夏油は間違ひなく関わってはいけない危険人物そのものだった

夏油が小さめの小屋の扉に手を掛け、中へ入ると夏油の瞳にある物が映り、夏油は息を飲んだ

「これは……」

真っ黒の制服と白いシャツ、そしてボンタンよのような形をした黒いズボン。

呪術高専の制服がそこにあつた

「何故、こんな所に……」

周囲を警戒し、当たりを見回してみるが、呪力の残穢は勿論、人の気配一つすら感じることには無かつた。

夏油は警戒体勢を取り敢えず解き、何故こんな所に嘗ての制服があるのか頭を回す

(偶然……？いや、それにしてもこんな所に綺麗なままで置いてあるのは不自然すぎる。だが、これしか見たところ無さそうだ)

「背に腹は変えられないか……」

夏油は再度廃墟の中に入り、胡散臭い袈裟服から全身真っ黒である呪術高専の制服へ



と着替える

「これをまた着ることになんてね」

慣れた手つきで制服へと着替えていく

『制服つてダルくね?』

『確かにそうだが……ルールはルールだから仕方ないさ』

パサリ

『うえゝ制服にアイス溢しちまった』

『あ、そんなに乱暴に拭いてはシミになってしまいかもしれないからやめなさい』  
『お前は俺の母ちゃんか??』

シュルシュル

『硝子も一緒にスイーツ食べ放題に行かね?』

『お前等クズと一緒にいくと周りがるさいから却下』

『私もパス』

『お前!裏切ったな!』

『裏切るものにも元々行くなんて一言も言っていないじゃないか』

シユル

『お前と俺二人で最強だ!!』

『ああ、私達二人で最強だ』

「フツ、私が感傷に浸るなんてな……私らしくないな、もうそろそろ歳かな？」

私は今上手く笑えているだろうか？ いや、きつと見るに堪えない歪な笑みを浮かべている違いない。

忌々しいと侮蔑するには眩しすぎたその記憶を、手を伸ばすには余りにも遠すぎたその星<sup>星</sup>を

「自らの手で、捨てた筈なのにな」

パチンとその感傷を吹き飛ばすように両頬を叩く

「感傷に浸るのは終いだ。情報収集をしよう」

私は先程見た大都市へと向けてもう一度足を進めた



「成る程、ありがとうございます」

私はニコリと愛想笑いを浮かべる。そうすると犬耳を生やした若い女性は顔を赤くし、別に大丈夫だという旨を夏油に伝える。

「ごもごと何か言いたげに口を動かしチラチラと此方の様子を伺っている女性の様子に少し嫌な予感を感じた夏油はこの場から離れることを選ぶ

「では失礼します」

夏油は面倒なことになる前にその女性の下を去った

（大抵のことは分かった……先ず俄に信じ難いことだかここは私の住んでいた世界とは別物のようだ。ここの名前は迷宮都市オラリオで様々な神が未知を求めて多く集まった都市。そして、この世界には魔法やらステータスなる物が存在すること。更にこの世界には呪霊が存在しないということ、変わりにモンスターという怪物がダンジョンに潜むということ）

夏油は余りの情報量の多さにズキズキと頭が痛み始めるが、優秀なその頭脳をフル回転させ、凄まじい速さで情報の処理を進める

十分程経った後に、夏油は情報の処理を終える

「それしても呪霊が存在しないとは、ね」

夏油が目指した世界と同じ世界が目の前に存在する。普通ならこんなに嬉しいことは無い筈なのだが、夏油の心は虚無で満たされていた

この世界には呪術師は夏油一人しか存在せず、いたとしてもそれは夏油が元々住んでいた世界の呪術師とは全くの別物だろう

そんな確信が夏油には確かにあった

（私は呪術師に幸せであつて欲しかつただけなんだ……だが、この世界に私の守るべきものは無い。こんなのにいくら世界自体が良くても意味が無いじゃないか）

夏油は路地裏の壁に寄りかかり、頭を抱える

（私は一体どうすれば良いんだ……呪術師がいない世界で私は何を成せば良い……？）

もういつそのこと自害でもしてしまおうか？そんな考えが頭に浮かび上がった次の瞬間

「ハイ！その君！！何か困っているなら助けてあげようかい？」

女性の声が響いた

夏油はその声が出た方向に顔を向けるとそこにはウェイトレスの服を着た黒髪のツ

インテールの小さい女の子がこちらを見ていた。

背丈は子供のそれであり、声も何処か幼さを感じる

だが、気配は決して子供など生易しいものでは無かった

(この気配は……)

「君は……」

「僕の名前はヘステイア！これでも一応神様なんだぜ！」

世界に絶望した夏油の目の前にヘス電の女神テイアがその存在を激しく主張していた

## 夏油傑の叫び

「僕の名前はヘステイアー！これでも一応神様なんだぜ！！」

ウエイトレスを着用した黒髪の麗しいツインテールの少女がそう名乗った

夏油はその名前に既視感を覚える。脳は突然の事態でも高速度で回り、その答えを導き出した

(ヘステイア、ギリシア神話の処女神……)

夏油は何時でも戦えるように体勢を相手に気付かれない程度に構え、ヘステイアを観察する

その体軀は余りにも戦いに向いておらず、強者特有の覇気を纏っていない。如何にも戦ったことがないとその体が暗にそう伝えていた

だが、夏油は何事にも例外という存在があることに気が付いている。

それこそ、嘗ての親友のように

故に夏油は警戒する

「へえ、そうだったのかい。それで、その神が私に何か用かい？」

「最初に言っただろ？ 何か困ったことがあるなら助けになる」って」

ヘステイアがニコニコと人畜無害な笑みを浮かべて、こちらへと近付いてくる。

その様子は小さい幼子のようなのであるが、夏油は神の悪辣さを身を以って知っている

（ふ、助けになるか……心にもないことを）

夏油傑は神が嫌いだ。いや、正しく言うなら嫌いになつたの方が正しいだろう

夏油傑は幾つもの呪霊と対峙してきた。中には人々の信仰が失われ堕ちた神や、罰せられて当然とも言えるべき行為をし、堕ちた神もいた。

そして、そんな神と対峙していく度にその醜悪さと冷酷さを見せつけられ、夏油の心に神という生物がどれだけ愚かで醜悪な生き物なのかということに刻んでいった

そして、堕ちた神は夏油を敬愛している一つ下の可愛い後輩を無惨にも殺した

それがトドメとなり夏油傑は神を嫌いになつた

（だが、丁度良い……情報はいくらあつて困るものではないからね）

「それは助かるよ……じゃあ、ちよつと質問をさせてもらつても良いかい？」

「もちろんだともー！」

ペアとまるで子供のようになつて笑う姿に何故か既視感を覚え、騙していることへの罪悪感



で心の奥がチクリと針を刺されたかのように傷んだ

それに夏油は違和感を覚えた

(何故私は神如きに罪悪感を感じているんだ……?)

夏油は自らの心の臓部分に異常がないか、手で確認するが、何も異常は感じられなかった。

夏油が気のせいだと自らを納得させていると、目の前にヘステイアが心配そうに立っていた

「?大丈夫かい?胸が痛むのかい?」

ヘステイアは心臓部を抑える夏油の手をそつと、優しく握る。夏油はその手の温もりと目の前のヘステイアの顔に又もや既視感を覚え、その温もりに心の奥のドロドロとし、絡まり合ったナニかが解けていくような感覚に安堵を覚える

だが相手はあの忌々しい神であることを思い出し、咄嗟に手を払った

「ツッ! 触るな!」

「わっ!」

ペタンと神がヘステイア地面へと尻餅を着き、痛みの声を漏らすが夏油にはそれを気にする程の余裕を全く無かった

夏油の顔に冷や汗が流れ、顔は悲痛に染められる

(私は今何を感じた？神を相手に安堵だと……？)

頭はズキズキと痛む

(私は一体どうしてしまったんだ……何故、何故こんなにも神相手に心が乱されるんだ)

目の前が真っ暗になるような感覚と共に、自分が立っているのか、崩れ落ちているのかも分からなくなっていく

段々と意識が、闇に吞まれ——

「イタタタ」

ハッと夏油の意識が急上昇する

「す、すまない」

(私は何をしているんだ……)

夏油はペタンと尻餅を着いたハスティアの手を引つ張ることで立ち上がらせる。

所々が土埃で汚れていたの、手でそれを取っ払う

「大丈夫だよ！それよりも君は大丈夫なのかい……？」

じつところちらを心配そうに見つめる

「ああ、大丈夫だよ……」

夏油はニコリと作り笑いをなんとか浮かべる

「嘘、だよね」

「ツ！何を根拠に……」

「分かるのさ、神に人の嘘は通用しないからね……」

「なツ!？」

ジリツと無意識に後退する

（人の嘘が通じないだと……!?なんてデタラメだ……!）

「それに君の気配……普通の人じゃないよね？」

一歩とまた一歩と目の前の神がこちらへと近付く

夏油はそれに恐怖するように一歩、また一歩と後退する

（不味い……!このままでは私の正体がバレるのも時間の問題だ……!）

夏油はなんとか回らない脳をグルグルと動かし、この場での最適解を探し出そうとす

るが、遂に壁へと遮られ、後退する選択肢は消え去った

どうすれば良いのか焦る脳を必死に回し続けるが、右手から伝わってきた温もりによって遮られた

「な、にを」

「君は自分が今どういう顔をしているのか分かってないみたいだね……」

目の前の神がスツと私の顔に触れる

「まるで迷子になった子供のような顔さ……」

そう言い、目の前の女神はクスリと笑みを浮かべる

（やめろ……）

「僕は君のことを何も知らない」

スルリと私の顔を撫でる

（やめろ）

「けどね、僕は君の助けになりたいんだ」

（やめろ……！）

「だから、君のことを僕に教えてくれないかい？」

我慢の限界だった

「やめろッ!!」

激情の赴くままにヘステイアの白く細い首を絞める

「うぐッ!!」

「そんな目で私を見るな！これ以上私の心を乱すな!!」

神の分際で、神のような醜悪の存在のくせに私を助けるだと？ふざけたお題目も大概にしろ!!私を知っているお前達の本性を！その根源に潜む醜悪さを!!」

夏油の情緒は最早グチャグチャで言っていることも激情に支配されている今、言っていることは全て滅茶苦茶であり、支離滅裂だった。

けれど今はそれでも良かった。胸の内にある神への嫌悪感が決壊したダムのように流れ込み、次々にそれが口から溢れ出す

「散々、私達を傷付けたくせに!!私の後輩を殺したくせに!!何故そんな出任せを吐くことが出来る!?!」

ギリギリと手の力が強まっていく

“やめろこのままでは死んでしまうぞ”と私の冷静な部分が警鐘を鳴らす

「ツ、で、まかせ、なんかじゃない、よ」

「戯れ言を……！」

ギリギリで更に力を強めていく

「やめろと言っている!!何故、こんなことをしている私にそんなことが言える!？」

「あぐツ、や、やめな、いさ」

ニコリと目の前の神が歪な笑みを浮かべる

（やめろ、やめろ!そんな目で私を見るな!!神のくせに、醜悪な存在のくせに!!その瞳に暖かな慈愛の情を浮かべ、母の様なその温もりで私に寄り添おうとするな!!）

「死ね」

ミシリと骨が軋む音が聞こえ、ヘスティアの命が危ないことを知らせる警報のように聞こえたが、それでも夏油は首を絞めるのを止めない

「死ね!死んでしまえ!!お前なんて、お前なんて……!」

ポロリと目から生暖かい液体が流れる。それはポタリポタリと重力に従い、地面へと落ちていく

（あ、れ。私は何故、泣いて——）

目元をヒタリ撫でる温もりを感じた

「泣か、ないでほしい、なあ」

首を絞められているヘスティアが腕をプルプルと震わせながら夏油の目元を優しく撫でていた

「ッ！」

夏油は思わず手を放すと、ドサリとヘスティアは重力に従い、地面へと崩れ落ちた

「ゲホッ！ゴホッ！」

「ッ！」

夏油はその場から走り出した。ただ我武者羅に、親に叱られ、泣き去る子供のように、ただひたすら、この胸に灯った温かさ掻き消えるようにと

（私は、神が嫌いだ!!）

あの神のニコリとした暖かい笑みが脳裏へと過る

（私は神が嫌いだ!!!）

あの神の温もりが顔を伝わったような気がした

（私、は）

あの慈愛の情を浮かばせた瞳を思い出す

(わた、し、は)

『僕は君の助けになりたいんだ』

「神が、嫌いな、筈なんだ。」

その眩きは街の喧騒によつて掻き消され、誰にも届くことはなかった



## 決別

夏油は廃墟の床へと崩れ落ちるように座り込んでいた

「私は、私は……」

脳がまるで自分の物ではないかのように考えが纏まらず、グルグルと同じ思考を何度も繰り返す

それでもと思考をし続けるが、自分が納得出来る答えなんて一つも出てきてはくれなかった

「私は、私は……！」

私は神が嫌いだ

その人をまるで家畜のように見下すその傲慢さが、自らの思い通りにならないと怒り狂うその幼稚さが、人を弄びそれ嘲笑う醜悪さが、何より呪術師私達を傷付けるその罪深さが嫌いだ

(なのに、私は何故あの神を嫌いになれない!?)

「何故、何故だ……」

いくら自分に問い掛けても答えは返ってこない

「クソツ……！」

ドゴン！と床を殴る。ミシミシと木製の床は軋み、夏油が殴った部分はポツカリと穴が空いていたが、そんなことを気にする余裕など今の夏油には無かった

ひたすらに答えが出ない思考を飽きもせずし続け、唸る夏油の姿は普段の飄々とした姿は似ても似つかなかった。今の夏油の姿は知っている者からすれば信じられない程に焦燥に染まっていた

あの神から伝わる温もりが何故こんなにも安堵させるのか、あの神を見ていとうとうして天内理子を思い出してしまうのか

(違う、理子ちゃんは神のような醜悪な存在じゃない……！)

ガシガシと頭を掻く

（一度、気分を落ち着かせよう）

辺りが暗くなっていることに気がつき、夏油はチラリと外を見る

「夜、か」

外は夜の帳が落ちかけており、所々暗くなっていた

「一応、食料は調達しておいた方がいいか……」

私はその場から立ち上がり、ギシリと床軋ませながら扉へと近づいていく  
キィと虚しい音を立て扉を開き、私は外へと出た

「成果、無しか……」

ハアと溜め息をつく

「金を稼ごうにも、な」

（私にはこの世界での経歴が無い…… そんなが私が働くことはほぼ不可能と言っても  
過言ではない）

「もし、このまま食料手に入らなければ……」

（最悪の場合、盗みをしなければならぬ……）

「は、離してくれよ！」

あの女神の声が聞こえた

「何処だ……？」

キヨロキヨロ辺りを見回すと、あの女神が複数人の男達に路地裏へと連れてかれていた

（何か、トラブルでも起こしたのか……？）

「……行ってみるか」

ソツと足音を殺しながら、男達が入っていった路地裏へと近づく

「離して、離してくれよ！」

「暴れるな！」

言い争う声が段々と聞こえてくる

（……か……）

氣配を殺し、その路地裏を覗き込んでみる

(なっ!?)

そこには男達に手足を拘束され、服をビリビリ破かれたヘステイアがそこにいた。

先程まで夏油相手に見せていた神としての氣丈な姿はそこにはなく、ただ非力な女性としてのヘステイアがそこにいた

「やめて! やめてくれよ。」

「へへへ、泣いたって誰も助けに来ねえよ」

「兄貴そろそろヤっちゃいましょうよ?」

「おう、そうだなあ」

そう言うのと、男達は神がヘステイア身に着けているスカートへと手を伸ばす

「お願いだから、やめてくれよお。」

ヘステイアが泣きながらそう懇願するが、男達がその要望を聞いてくれる訳もなく、男達はそれを一蹴し、スカートへと手を掛けて一気にガバツとそれをずり下ろした

その瞬間、ヘステイアが悲痛な叫びを反射的に上げようとするが、男達はそれを予想していたのか、手で口を抑え、それを阻止する

「ツ！ムウウウ!!」

「色気のない下着ですね、兄貴」

「まあ、それでも良いさ。下着より中身が大切なんだからなあ」

「確かに！」

ハハハと男達の下衆な笑い声が路地裏に響いた

「さて、そろそろ御開帳といきますかあ」

そう言い、男の仲間達がヘスティアの体を更に抑える

「ンーン!?ムウウ!!」

ヘスティアが身を振ろうとするが、体を抑えられていた為、それは失敗に終わる

男がヘスティアの下着へと手を伸ばす

「ムー!?ンムウー!!」

ヘスティアの目が更に見開かれ、その顔は恐怖に塗り潰される

(…… 私には関係の無いことだ)

夏油はその場から立ち去ろうとするが、まるで体と脳が切り離されたように地面に足は貼り付けられ、その場から一步も動き出すことはなかった

(私には、関係の無い、ことなんだ…… だから、動け、動けよ!)

それでも体は動かない

(クソツ！何なんだこれは！何故私は動こうとしないんだ!?)

夏油は再度へスティアの方を見ると、男の手はへスティアの下着へと手を掛けていた。ズキリとした痛みが胸に広がった

(何なんだこの痛みは!?!何なんだこの気持ちは!!相手は神だぞ!?)

視界がグニヤリと捻じ曲がり、まるで押さえ付けられているかのように、息は荒くなる

(私は一体何がしたいんだ!?)

『傑はさ、色々考えすぎなんだよ』

ふと、脳内に柔らかな声が響いた

『時には自分の気持ちに素直になっても良いんじゃないの?』

(さと、る)

それは夏油の唯一の親友にて、嘗ての片割れ五条悟の声であった

『傑は傑のやりたいことをやっても良いんだよ』

(私は、私は……!)

ニコリと笑う彼女の顔が、天内理子と重なったような気がした

(私は彼女を助けたい……！)

『なに行けよ、傑』

先程よりも声は弾み、ニツコリと優しげに笑う五条悟の姿を幻想した

(ああ、行つてくるよ悟)

「随分、盛っているようだね。まるで発情期の犬のようだ」

背に月光を背負い、男達を嘲笑する男がいた

「誰だテメエ！」

男達がその男を激しく睨み付けると、クツクツと男は

堪らないとばかりに嗤った

「さあ、誰だろうね」



そこにはニヒルな笑みを浮かべてる、誰しもが知っている真正正銘の『夏油傑』がそこに立っていた

## 格差

「さあ、誰だろうね」

夏油は薄ら笑いを浮かべ、穏やかな口調で目の前の暴漢達暴共に話しかける。

しかし、その笑みには言いようがない不気味な圧が籠こもっている

だが、一刻でも早く目の前の女を犯そうとしか考えてない男達には夏油は脅威ではなく、考えもなしに正義感で目の前の女を助けようとした愚か者にしか映ることはなかった

「ナメてんのか？」

「おや？ てつきり犬のように吠えると思っていたけど、何だちゃんと喋れるのか」

これは失礼したね

夏油が男達を見下すように、嘲笑うようにそう告げた瞬間に男の堪忍袋は切れた

(ブツ殺す)

「テメエら！ 身の程知らずの正義面した糞に現実を見せてやれ!!」

男がそう告げると周りにいた下っ端の一人が愚か者夏油に殴りかかる。それ以外の冒険

者は夏油の周りを囲む。その数は五人

しかもその全員がLⅤⅠではあるが冒険者であり、ステータスを持たない一般人である夏油では太刀打ちする処か、まともに戦闘することすら出来ないだろう

それを周りの男達もそれを理解しているのか目の前の男をサンドバッグにしてやろう、身ぐるみを剥いでやろうなどの考えしか頭にはなかった。何故なら自分達は「<sup>強</sup>冒険者」なのだからと

「死——

いち早く夏油へと殴り掛かったその男の言葉は最後まで続くことはなく、その代わりにバギヤという鈍い音が路地裏に響いた

「は」

夏油の周りを囲んでいた内の一人が吐息と共にそんな意味のない言葉を漏らした。ヘスティアさえも目の前で起きたことが信じられないと言わんばかりに目を大きく見開いていた

可笑しい、何故冒険者でもない男がステータスを持つ相手の攻撃を難なく躲し、しかも一撃で沈めた

それは本来ならあり得ないことだ。それ程までにもスティアスを持つ者と持たない

者では人間としての強さのステージが違うのだ

しかし、目の前の男はそんな常識をいとも簡単にひっくり返した。ゾクリと男達に嫌な悪寒が走った。自分達は、恐ろしいナニかの逆鱗に触れてしまったのではないのかと「おや、随分と鈍重な攻撃だね？ 欠伸が出るほどだよ、その程度で威張り散らすなんて君たちは随分と頭が緩いように見える」

「ツ！殺せ！全員で一斉に袋叩きにして殺せ！！」

夏油の言葉に気を取り直した男が部下達に命令を下す。その声に正気に戻った男達は夏油へと一斉に襲いかかる

まぐれだ、まぐれに決まってる！リーダー格の男はまるで願うようにそう自分に言い聞かせるが、現実とはそう上手くいくほど、甘くは無かった

男達の攻撃が届くよりも更に速く、夏油は拳を振り抜いた。その拳は夜の帳に包まれ、冷えた空気を切り裂き、目の前で夏油へと襲い掛かっていた男の鳩尾に突き刺さる。それと同時に夏油は自分の後頭部に拳を放った男の顔へと裏拳を放ち、男が痛みに悶えて数歩後ろに下がった瞬間に回し蹴りをし、また一人地面へと沈めた

「なんだよ、なんなんだよこれ！」

リーダー格の男は声を荒げる

いつものように手頃な良きそうな女を捕らえ、そして犯す。たまにそれを見つけて立ち向かつて馬鹿共はいたが、全員拳で黙らせてきた。俺達は強者、だから何をしてても許される。何をしてても黙らせることが出来る。そんな全能感に浸っていた

だが、目の前の光景はなんだ！何故俺の部下が地面に沈んでいる！何故目の前の男は冒険者でもないのにあれほど強いんだ！どうして、どうして、どうして、どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして、どうして、どうして、どうして、どうして、どうしてッ！！

「さて、終わりのようだね」

夏油は地面に沈んでいる男達にチラリと視線を少し向けた後にリーダー格の男のもとへと何事もなかったかのように歩いていく。夏油が一步進む度に、男は一步後退する

一步、また一步——

コツンと男の踵が壁へと当たり、男はヒュツと息を呑んだ。もう男に逃げ道はなかった

「もう、鬼(ご)っこは御仕舞いかい？」

なら、終わらせようか

夏油が冷ややかな笑みを浮かべ、男へと近付く。その度に男の理性が消え失せ、男の

頭は真つ白になつていく

「なんなんだよ、なんなんだよお前はああああ!!」

男は目の前にいる夏油バケモノへと拳を振るう

だが、その拳は夏油に届く前に男の鳩尾へと夏油の拳が深く刺さり、肺の中にある空気が一斉に吐き出した。ガクリと膝を着き、地面へと倒れる

「なんなんだ、か」

夏油は少しの間、瞳を閉じて思い出す

呪術高専で馬鹿をやつて笑いあつた日々。呪術師の命だけがゴミのように消費されるこの世の不条理に抗うために呪詛師になつた日。そして――

『俺達は二人で最強だ!』

『ああ、私達は二人で最強さ』

二人で最強を夢想した日を

「私は夏油傑。呪霊操術の使い手で最悪の呪詛師。そして――」

自らの手で壊したしまったあの日々を、裏切つてしまった親友とも、そして手放してし

まった夢最強

その罪が赦されるなんて思つてもいない、けど今だけは名乗られずにはいられない。

嘗て手放してしまったそのその名を

「最五条悟強の元片割れさ」

た  
輝く月光の下で夏油はニコリと穏やかに、そしてどこか寂しそうに笑い、そう名乗つ

## 誓約

「五条悟の元片割れさ」

そう言い、夏油は穏やかにそしてどこか寂しそうに笑った

もう二度とこれを名乗ることは、いや名乗る権利は無いと思っていた夏油。だが、いざそれを名乗ってみると暖かい感情と寂しい感情が胸の中を満たした

それは嘗ての青春の証であり、夏油が理想郷を創造する為に手放してしまった夢

(ああ、懐かしいなこれは……そして

なんて悲しい

これは夏油が夏油たる数ある内の要素の一つであり、自らが捨てたもの。置かれて。禪院甚爾と



の戦いで無様に叩きのめされ、面倒臭いという理由で生き延びた夏油

致命傷を受けたにも関わらず自らの力で死の瀬戸際から復活し、進化を遂げた後に禪院甚爾を圧倒的な力で押し潰した五条悟

夏油の劣等感を取り返し、のつかない程に膨れ上がっていた。もう、五条悟の片割れなんて口にするこゝとさえ出来なくなっていた。

それ程までも呪術師として立っているステージが違くなっていた。現代最強の呪術師の五条悟と只の特級呪術師である夏油傑では肩を並べる所か、影すらも踏めることすら出来なかった

もう誰も夏油を五条悟のパートナーとは言わなくなっていた

(けれど、もし、まだチャンスがあるとすれば、私は目指すにはいけない) 五条悟が裏切ってしまった自分を最期までたった一人の親友と言ってくれた親友に報いたいと思ってしまったから。あの時の目は変わらず夏油を相棒として瞳に映していたから。

だから、名乗る五条悟の片割れを、そしてここで誓う男に辿り着いてみせると。それは嵐の吹き荒れる果てしない道を地図も持たずに突き進むような無謀

それでも止まることは出来ない。何故なら夏油傑は五条悟のたった一人の親友なの

だから

(私は、もう逃げない悟最強から)

『早く此隣処まで来いよ、傑』

耳元で親友の声が聞こえた。オラ此リオには五条悟はいない、だが夏油はその声が只の幻聴ではないことを根拠は無いが確信していた

(直ぐにでも追い付いて、いや、追い抜いてやるさ)

その為には力を付けなければいけない。闘争が、経験があまりにも五条最悟強に追い付くにはあまりにも少なすぎる。傑は腰が抜けているのかペタリと腰を着いているヘスティアの元へと向き変え、コツコツと近付いて行く

するとヘスティアはわたわたと忙しい様子で慌て出すがそれを無視して夏油はズンズンと足を進め、遂にヘスティアの前まで着き、片膝を着いて視線を合わせる

「突然ですまないが、私をファミリアに入れてはくれないか？」

するとヘスティアは大きく目を見開いた後に下へと俯いた

「虫が良い話だと自分でも自覚している、けれど私にはどうしても力が必要なんだ。だから」

——頼む

そう言うのとペコリと夏油は頭を下げた

夏油はプライドが高く、頭を下げるという自分が下だと受け入れるような行為をすることはなかった。

だが、夏油はヘステイアに頭を下げた、しかも相手は夏油が嫌っている神である

もし、これがヘステイア以外の神ならば夏油は謝ることなどなくファミリアにも入らずにダンジョンに無断で入っていただろう。だが、ヘステイアという純粹で人を氣遣い、無邪気に笑う姿は夏油の知っている神という存在から大きく外れていた

むしろ、その姿は嘗て自分が守ることが出来なかった天内理子という善人を彷彿とさせた。だから、夏油は頭を下げる

守られるべき人を傷付けてしまったから

「名前教えてくれないかな」

「夏油、傑」

ヘステイアが夏油の顔を見る。その目には先程の弱々しい様子はなく、神としてのヘステイアがいた

「君は僕のファミリアに入って、何を成したい？」

そうと問い掛けたヘステイアの顔には嘘偽りなく話して欲しいという心の声が聞こえてきそうな程に真剣だった

「私は、果たしたい約束がある」

「私は取り返しのつかない裏切りをして彼を一人にした。自分勝手に傷付けてしまった、苦しめてしまった、悲しませてしまった。そして、二人で誓った約束を破ってしまった」

「だけど、彼は裏切り者の私をたった一人の親友と言ってくれた。信用してくれていた、前と変わらずにずっと信じていてくれた」

「だから、私は果たしたい。嘗て自分で捨ててしまった約束を」

「自分勝手なのは、自分が良く分かっている。だけど、私はその約束を果たしたいんだ」

「どうして?」

ジツと此方を見つめながらヘステイアが問い掛ける

「簡単なことさ」

「私のたった一人の親友だからさ」

夏油は笑った。憑き物が落ちたように、子供のように、柔らかく微笑んだ

「そっか」

ヘステイアも笑った。目の前の青年の憑き物が落ちたことが嬉しくて、夏油と同じ位に柔らかく微笑んだ

「僕のファミリアの団員は一人もいない」

「お金だつて全然ない」

「ホームはボロボロの教会さ」

ヘステイアの目に涙が溜まっていく

「それでも、僕の家族になつてくれる？」

夏油は愚問だとばかりにまた笑った

「ああ、君じゃなきや駄目なんだ。君以外有り得ない」

「そっか、そっか……！」

ヘステイアが涙を拭う。目端は赤く、目も少しだけ赤く、声は鼻声で泣いたことが容易に察せた。だが、ヘステイアは言葉口を開く

「夏油君！」

「君を、ヘステイア・ファミリアの団員に任命する！」

「僕はこう見えて独占力が強いんだ！もう離してやらないぞ！」

そう言ってヘステイアは笑った。その笑顔は一枚の完成された芸術品のよう美しくかった

「ああ、離れるつもりなんて毛頭ないさ」

ヘステイアは嬉しそうにまた笑って夏油と手を繋ぎ、ファミリアへと足を進めた。夏油は少し驚いた顔をした後に、ヘステイアの隣へと並んだ

夏油は繋がれた小さい手を見て微笑んだ。ここから全てが始まるのだと。どんなに辛いことがあるうともこの手が引き裂けることは無いだろうと、そんな根拠のない確信を抱いて

「今日のご馳走にしようか！」

「お金は大丈夫なのかい？」

「任せておきなよ！」

ヘステイア・ファミリアの物語がここで始まりを告げた

それを祝福するように月光は光を強め、二人の笑顔をより一層明るく照らした

## ステイタス

「さて！夏油君の歓迎会も終わったところだし、神ファアルナの恩恵を刻もう！」  
 「神ファアルナの恩恵、か」

夏油はあまり気が進まなかった。何故なら神ファアルナの恩恵を刻むということはその神の眷属となること。即ち、神に下ることを意味していたから

夏油は誰かの下に下るといふ選択肢は持っていない。彼の中には最強の元片割れとしてのプライドが残っているから

それに自分の性分では誰かの指示に従うのは合わない

(普通なら私は拒むだろうね)

けれど今の夏油は一刻も早く最最五条悟曲へと辿り着かなければいけない。夏油は遠回りをしていく余裕など持っていないのだ

(それに、彼女ヘステイアは眷族ではなく家族として対等に接してくれる筈だ)

グツと勇気を振り絞るように拳を握り締める。覚悟はもう出来ている。夏油には五条悟に勝る感性、センス、そして戦闘経験がない。なら、迷う必要なんてない



「宜しく頼むよ」

「まつかせろい！じや、ちよつと服を脱いで、はだけさせてくれないかな？」

夏油はボタンを外し、スルリと服を脱いだ。夏油の背中へと回つたヘステイアは感嘆の息を呑んだ

（なんて、鍛えられた肉体なんだ…… 無駄なところが全くとしてない。正に完璧という他ない程だよ）

「？まだかい？」

「ご、ごめん！さ、今から刻むよー」

ヘステイアは気を取り直して、夏油の背中へと指を滑らせて神の恩恵ファールナを刻んだ。それと同時に夏油の背中に夏油の世界では解読不可能な文字が浮かび上がった

（わ、凄い量のスキルだ…… 普通ならこんな量は有り得ないよ。君はどんな人生を送ってきたんだい……？夏油君）

スキルとはその人物の人生を表していると言っても過言ではない。もし、農業を得意とする人物なら農業に関連するスキル、剣が得意なら剣に関連するスキルを

だが、夏油は一般的とは程遠いスキルの量が多かった。それは夏油の人生が並大抵ではないことを物語っている

（感傷は……までにしよう、今は夏油君のステイタス方が先だ）

ヘステイアは夏油のステイタスを読み取る

夏油傑

L v. 6

力：G 2 4 4

耐久：A 8 4 9

器用：S 9 0 7

敏捷：C 6 0 1

魔力：0

呪力：S S 1 1 7 4

耐異常：G

格闘：C

《魔法術式》

【呪霊操術】

- ・ 自らが有する呪霊を思いのままに操ることが可能。
- ・ 呪霊は魔石を喰らうことによつて力を増す。
- ・ 魔力の代わりに呪力を消費することによつて発動可能。

## 《スキル》

## 【格闘】

- ・ 特定の技術を使用可能になる。
- ・ 力のステータスが上がり難くなる。

## 【呪力変換】

- ・ 魔力を含む物を口から摂取する時にのみ発動。
- ・ 魔力を呪力へと変換する。
- ・ 魔法などには適応されない。

## 【最強の片割れ】

- ・ 魔法などに適応されない。
- ・ 最強の領域へと近づく度に効果が上昇する。

- ・ 五条悟以外の敵と相対する時に、実力に応じたステータスが上がる。

## 【最強一途】

- ・ 早熟する。
- ・ 最強を目指し続けるかぎり、効果持続。
- ・ 壁にぶつかった際に、効果向上。

## 【我が大義の為に】

- ・ 呪術師が誰も傷つけない世界を作ろうとするかぎり、ステータスが上昇。

・最強片割れを捨てた時のみ、発動可能。

## 【呪力】

・魔力を宿せない代わりに使用可能。

・自らの身に纏うことによって、該当箇所の能力を一時的に上昇させる。

「れ、レベル6だつてえ!?!しかも、レアスキル複数持ちだなんて、君はどれだけ規格外なんだい!?!」

「規格外、か…!」

（あまり、実感が湧かないな… まあ、最強悟が身近にいた身としては、悟こそが本当の規格外なだけどね）

「レベル6とは、どれ程なんだい?」

「レベル6と言ったら、第一冒険者に含まれる超エリートで、オラリオ最強の一角に入るよー!」

（一角?最強ではなく、一角だと）

夏油は衝撃を受けた。前の世界では乙骨憂太に敗北した夏油だが、それでもこの世界では自分という存在は一番の存在だと信じて疑わなかった

だが、自分は最強の一角に過ぎなかった。こんなこと、夏油は認められる筈無かった（オラリオで最強の一角だと？ 駄目だ、そんなものでは本当の頂上最強なんて夢のまた夢じゃないか！）

「ヘステイア、オラリオで一番強い者、又は強かった者を教えてくれないかな？」

ガシリとヘステイアの肩を掴み、夏油はそう言った

「うえっ!?!いきなりだねえ……今のオラリオ最強はオツタルで言つてね、フレイヤファミリアのレベル7さ」

（オツタル……まず私が超えるべきなのは君か）

「他にも過去には、ゼウスファミリアでレベル8や、9の冒険者がいたと聞いてるよ」（な……オツタルの他にも私を超える者がいたのか!?!）

夏油が無意識に抱いていた、慢心とも言える余裕が無惨にポロポロと崩れ去っていく。自分がこの世界で負ける者などいる訳は無いという根拠のない自信が無くなっていく

あるのは自分がまだ、五条悟最強からはほど遠いという現実だけだった

けれど――

(どれだけ道が遠くても、私は最強の領域へと至ってみせるとも。それが今の私の成すべきことだ)

自らに刻むように、消えぬようにと血が流れる程に掌を握った

「しかしなあ、君のステータスは冒険者では無かつた身としては規格外も良いところだよ……これがバレたら面倒なことになるからバレないようにしておくよ……」

ヘステイアは少し憂鬱そうに溜息を吐いた

「……すまないね」

夏油はそんなヘステイアを見て、申し訳ない気持ちになり少し目を伏せ、謝罪を口にする

「い、いや！夏油君は別に悪くないよ！」

「そう言つて貰えると助かるよ」

クスリと夏油がそう言い笑うと、微妙な雰囲気が霧散し、先程と同じような明るい雰囲気へと戻つていく

「さて！神の恩恵も刻んだところだし、今日はもう暗いから寝よう！」

「そうだね、もう辺りも暗いね」

夏油が肯定したような言葉を零すと、ヘステイアは夏油の手を引つ張り、寝室へと案

内する

「此処が寢室さ！さ、夏油君は此処で寝るといいよ！」

「君はどうするんだい？」

寢室にはベットは一つしかなく、そのベットも夏油がギリギリ入る位だった

「僕はさっきのソファで眠るから大丈夫さ」

へステイアがそう言うのと夏油は顔を少し顰めた

「私は良いから、君がベットを使ってくれ」

「えー僕は良いよ！夏油君が使っておくれよ！」

へステイアの雰囲気から譲らないことを察知したのか夏油は眉を下げる

「へステイア、私は君が胸を張って自慢出来るような人になりたい。だから、ここは私の為だと思ってベットで眠ってくれないか？」

夏油の言いたいことを理解したのか、へステイアは少し顔を赤らめながら寢室の中へと足を進める

「夏油君は意地悪だね、そんなこと言われたら行かざるをえないじゃないか」

「おや、今更気付いたのかい？」

フツと二人は同時に笑みを浮かべた

「おやすみ、夏油君」

「ああ、いい夢をヘステイア」

ボタンとヘステイアが扉を閉めた後、夏油は一人になる

（ヘステイアには悪いが、少し試したいこともあるし、ダンジョンへと潜るとしようか）  
夏油は嘘を吐いたなら神であるヘステイアにバレていただろう。だが、夏油は一言も寝るだなんて口にはしていない

口にしたのはヘステイアの外は暗いという言葉に対しての肯定の言葉のみ

（全く、自分のことながら悪知恵が働くものだ）

夏油はそう思いながらも足音を立てないようにしながら、そつとホームから出ていく  
（魔石を与えることによって強化可能、そして呪力変換の定義もハッキリしておきたい）  
「はあ、<sup>最強</sup>頂点にはまだまだ遠いな」

しかし、夏油の心には曇りなどない。やるべきことはもう決まっているのだから

「さあ、ここから駆け上がりか<sup>最強</sup>頂点へと。それが私が<sup>夏油探 最強の片割れ</sup>私 所以たらしめる筈だから」

夏油は五条悟の瞳に似た、眩い星空を見上げながらそう眩き、ダンジョンへと足を進めた



## 捕捉

「ギイアア！」

夏油はダンジョンの一階で全身が緑色で醜悪な顔をしたモンスター、ゴブリンと対峙していた

「ゴブリンか、いるとは聞いていたけどまさか本当に漫画のような姿そのままだとは思わなかったよ」

（呪力、いや魔力量から見るに四級かそれ以下といったところか？）

「様子見も兼ねて四級の呪霊にしようか」

夏油は術式を発動させ、自ら取り込んだ呪霊の中で今この場に最も最適なものを選ぶ

「これかな？」

夏油が選んだ呪霊は、尻尾の先端に鉛筆程度の鋭さの針を持つ魚や虫にも見える呪霊だった

「ギ?！」

ゴブリンは突然の呪霊の登場に大きく目を見開き、驚きを隠せないでいる様子だ。夏油がその隙を見逃す筈もなく、夏油は呪霊を操ってゴブリンの心臓部分へと針をズブリと刺し込んだ

「オエ!? ギイヤアア!!」

汚いを悲鳴を上げ、ゴブリンは紫色の血を心臓部分から噴き出しながらサラサラと呪霊が消えていく時のように黒い灰となって消えていく。ゴブリンが消えた後にコロんと音と共に魔力を孕んだ石、魔石が地面に無造作に転がった

夏油は呪霊を一旦仕舞った後に地面に転がった魔石を興味深そうに見る

「ふむ、呪骸にある核に酷似しているね……? これを砕いたり、致命傷を与えれば消滅するということかな」

夏油は収納型の呪霊を取り出し、魔石をその呪霊の口の中に仕舞い込み、また戻そう

とするがそこで手を止めて夏油は呪霊にある武器を取り出すように指示する。呪霊は手馴れたように口からその武器を吐き出した

「ふむ、呪具も特に失ったということでもないな」

特級呪具である游雲を手に取り、少し手で弄びながらもそう呟いた。夏油は手馴れた游雲の固い感触を楽しみながらまた呪霊へと仕舞った。夏油はのんびり歩きながらも今分かった情報を整理し始めることにした

（ゴブリンは四級程度……なら一から五階までは四級程度のモンスターといったところか？そして、六階には新米殺しと言われているウォーシャドウやキラーアントは殺傷能力の高い三級に近い四級か三級の下の辺りか）

夏油の後ろからゴブリンが湧き出し、夏油の背後から殺さんとばかりに棍棒を振り上げる

ゴブリンは目の前の大柄の男が痛みに悶え倒れる姿を幻想し、ニタアと醜悪な笑みを浮かべたが次の瞬間にはゴブリンの頭はパン！と爆発し、ゴブリンがサラサラと黒い灰となって消えていく

コロリと転がる魔石を夏油は手に持ち、夏油は消えていく様を冷たい目で見下ろして

いた

「全く、その程度の奇襲で私がやられるとでも？滑稽だよ、まあもう聞こえてないか」  
夏油はまたゆったりとまるで自分の庭でも歩いているかのようにゆったりと優雅にダンジョンを歩き出した

（呪霊の能力も先程試した通り、呪力によって能力を多少上げることが出来る。そして、呪霊は出し続けると一定の呪力を使わなければいけない。四級や三級ではほぼそのデメリットは無いに等しいが、準一級から上に上がるとそのデメリットが段々と重なっていくといった感じかな？中々に面倒だ。自分より同等又は格上との戦いの場合では考えて呪霊を使わなければ私の呪力が底を尽きる可能性もある）

はあと夏油は溜息を吐いた

「呪霊操作の強みである複数体の使役には気を使わなければいけないな…… 本当に面倒だ」

（呪力が底を尽きそうになってもポーションと言ったアイテムを使用すれば呪力変換によつて呪力を回復出来るが、最悪の場合には魔石も摂取する羽目になるね……）

夏油はチラリと手にある魔石を見る。呪霊を取り込む際のあれには慣れたと言つても今自分の手にある魔石を進んで食べるかと言われれば勿論ノー

だが、必要とあればどんなに不味かろうが夏油はそれ食べるだろう。嘗ての自分がそうしてきたように

「まあ、命の危機にでも陥らない限りは大丈夫だろう」

夏油はまた魔石を収納型の呪霊に取り込ませた

「取り敢えず調べたいことも分かったことだし、地上に戻るとしようか」

夏油は自分の服に着いた少量の土を手で払い、スタスタと出口に向かって歩き始める。夜といえど、まだダンジョンに潜っている冒険者も何人かおり、冒険者とすれ違う度に夏油は自分の呪力を出来るだけ抑え、あたかもLv1の冒険者を装いながら地上へと歩く

(迷路のような作りになっている、道を覚えていなければ最悪の場合、迷うということも有り得そうだ)

「ヘスティアに、地図があるか聞いてみるか」

そんなこと言っている内に出口へと辿り着き、夏油は地上へと戻る。外はまだ暗く、魔石による街灯がオラリオの町を小さく照らしていた。夏油は少し暗い道をまるで普段から歩いているかのようにズンズンと歩いていく

今日来たばかりと言えど、夏油の優秀な頭は自分の拠点へと帰る道や何処に何かあるのかを大体把握していた。夏油が鍛冶屋を通り過ぎようとした時、夏油はピタリと足を止めた

「ふむ、武器か……」

（こちらの武器がどういう物なのかも知る必要がありそうだな……何かしらの情報や新しい武器が手に入るかもしれないしね）

夏油が飾つてある剣を硝子の上からソツと擦ろうと手を伸ばした瞬間、視線を感じた

まるで自分の体を掻き分け、自分の過去を、感情を、正体を見通すような視線。ソツと夏油の背筋を悪寒が走り、視線の元を辿るとそこは雲をも突き抜ける遙か高い塔、バベルの塔があつた

「神か……！」

夏油は直感だが、視線の主は神だということを理解したと同時に苛立ちを覚えた、まるで自分が上位者であると言わんばかりの傲慢なその視線に、自分の内を不躰に踏み荒らしたその不遜な行為に

（私を見下すだと？ 巫山戯るなよ、全てが自分通りになると思っている餓鬼のような存在の癖に上位者気取りか？ 腹立たしい、腸が煮えたぎるようだ）

だが、夏油は何となくだが理解していた。あちらの世界の神と此方の世界の神とは隔絶した実力差があること。そして、今の自分では忌々しい神には遠く及ばないことを（腹立たしい、その傲慢さが、その餓鬼のような感性が、腹立たしい、そんな存在の下にいる自分が！）

夏油は堪えるように口を噛む。こうでもしなければ自らの激情に体が支配されそうだったから。夏油の歯が唇の皮膚を切り裂き、一筋の紅い道を作った

「精々、たかが人間だと慢心してるがいい。泥水を啜つてでも、どんな苦難に襲われようとも貴様ら上位者を全て越え、孰れ私が頂点最に立つ」

夏油は激情からか少し、呪力が体から漏れ出しながらクルリ前へと向き直り、また足を進めた

「まるで人間の負の感情を煮詰めたような色ね」



「目障りだわ」

バベルの塔の最高階で美の女神は従者を侍らせながらそう呟いた

## 対峙

「さて、ここからが最初の死線か」  
ファーストライン

夏油は昨日と今日とでダンジョンに潜っていた。正式な冒険者登録をLvがバレないようにヘスティアと同伴し、登録することとなった

その際に、少し職員の獣人が首を傾げていたが、夏油が初めてのオラリオの訪問かつ少し常識に欠けているというヘスティアの言葉で職員は納得したようだ

ヘスティアに常識に欠けていると嘘でもそう言われた夏油は少し顔を顰めていた

ともかく、夏油は正式に冒険者登録をした後にダンジョンでの常識や生き残るコツなどを教わる講習を受け、テストを見事一発で合格した夏油は直ぐ様に十三階層へと足を進めた

「ここからは魔法に似た攻撃をして来るモンスターが出てくるらしいが、まあレベル2程度なら余裕だろう」

夏油は足を踏み入れると同時に三級の呪霊を複数取り出し、周りを監視させる

此方の方が強いと言えど、態々無体を晒し、敵から攻撃を受けるといのはあまりにも夏油にとつてはナンセンスだった。夏油が求めているのは完全なる勝利のみ、それこそ自分が求めている最強なのだから

「おや、早速お出ましか」

「グルルル!!」

夏油の隙を突くような悪意のある形でヘルハウンドは姿を現した。その大きさは子牛位あり、ハウンドと名付けられながらその凶体は犬から大きく掛け離れ、口からは大きく鋭い牙を見せ、炎が口の中を照らしていた

「さて、レベル2が何級に相当するのか見させてもらおうかな」

夏油の周りにいた呪霊達の各々が自らの武器を剥き出しにする。一体は大きく、鋭い爪を露わにし、もう一体は羽から刃を生やした

「ウオオオオン!!」

それに呼応するようにヘルハウンドの口から炎が吹き出された。ポオ!と炎の飛来する音がしたと同時に二体の呪霊はその炎を避け、夏油から出された命令を遂行する為に動き出した

鋭い爪を大きく振り上げ、ヘルハウンドへと近付くがヘルハウンドはそれをいち早く察知し、牽制の為に炎を吐こうとするがもう一体の呪霊がそれを許さなかった

炎を吐き出そうと動きが一瞬止まった瞬間に羽から生えていた刃をヘルハウンドへと飛ばす。それを少しだけ反応に遅れたヘルハウンドだが、炎を自らへと殺到する刃へと吐き出すことで攻撃を防ごうとする

ゴウ!と音と共に炎が吹き出された。鉄製の武器であろうと半端なものならば容易く燃やし尽くす炎が全ての刃を包んだ

「さて、どうなるかな?」

夏油は興味深そうに炎を見つめた

ヘルハウンドはニヤリと口角を上げた。それは相手の攻撃が自らの炎に勝てるわけがないという自信の表れだった。

さて、目の前の獲物をどう始末しようか――

そんな考えを消すようにグチャリと生々しい音がすると共にヘルハウンドは自らの腹部から鋭い痛みを感じた。まさか、有り得ないもそんなヘルハウンドの考えとは裏腹に先程呪霊が放った刃がヘルハウンドの腹部を穿っていた

「ギャオ!!」

ドバツと血が吹き出し、地面を紅く濡らした。ヘルハウンドは痛みと自らの炎が破られたという事実<sub>に</sub>未だ混乱していた。コツンと自らに近づいてくる死という終わりの

予感が頭によぎった

「ふむ、六割か……三級の下位といったところか」

夏油のそんな呟きも聞こえない程にヘルハウンドは自らに近づいてくる終わりにどうすれば良いかと足りない頭を回すが敵はその思考を待つ筈もなかった

「もう用済みだよ」

その言葉と共に再度ヘルハウンドに刃が殺到する

ヘルハウンドはそれを足をもたつかせながらも躲そうとするが次々へと刃は突き刺さるがそれでも致命傷に至るほどではなかった。炎で敵の目を眩ませ、逃げようとするヘルハウンドが振り返った瞬間に目に入ったのは、自らの首へと伸ばされた鋭い爪だった

ザシユと肉が切れる音と共にヘルハウンドの意識は闇に呑み込まれた。サラサラとヘルハウンドの死体が魔石を残して灰となった。夏油は魔石を拾い上げ、少し眺めた後に満足気に頷きながら仕舞った

（やはり、魔石に含まれる魔力の量が多くなっている。これなら三級程度の呪霊の強化に使えるだろう）

「そうと知ったなら、もっと沢山魔石が欲しいところだけど……」

夏油は少し驚いたような表情をした後にニンマリと笑みを浮かべた。目の前には

モンスターパーティー  
怪物の宴で発生したであろう、ヘルハウンドとアルミラージ合わせて二十体以上が目  
の前にいた

「これは、これは、鴨が葱を背負って来るとはこのことじゃないか」

夏油は二級の呪霊を二体と三級の呪霊を四体を追加で取り出す。それをヘルハウンド達は唸り声を上げながら警戒をしている

「さて、格付けも終わったことだ、一瞬で片付けてしまおうか」

その言葉と共に呪霊らは自らの武器を構え、ヘルハウンド達へと攻撃を始める。それヘルハウンド達も各々の武器で対応するが、六割の力でも対抗出来なかつた方に夏油の呪力の強化により、次々へと蹂躪されていき、三十秒もしない内に全て魔石へと姿を変えた

「うん、これ位あれば一先ずは充分かな」

夏油は呪霊に魔石を集ませた後に収納型の呪霊へと吸い込ませた後にクルリと右回りをする

「さて、ギルドではまだ私はレベル1ということになっているからね、取り敢えず上に――

ゾクリと悪寒が走ると同時に、自分の前の奥にある岩辺りから視線を感じた。夏油の

本能が警鐘を鳴らすが、それを無視して游雲を呪霊から取り出し、呪力を纏わせ戦闘態勢に入る

「そこにいるのは分かっている。出てこい」

「フッフ、残念。隠れんぼはもう終わりみたいね」

「!?」

まるで鈴の音のように美しい声が響いた。それと同時に夏油が予想していた通りに岩陰から二人が姿を現した。その二人はどちらともマントを被っており、顔は確認出来なかった

（おかしい、魔力が少しも感じられない……。あのマントの効果か、それともスキルか？）

「お前達は一体何者だ」

「何者……。フッフ、何者、ねえ？」

パサリと二人はマントを脱いだと同時に夏油は大きく目を見開いた。一人はまるで美という概念そのものが詰められたかのように美しい銀髪の女性、もう一人は見る者全てを威圧するような鋼の肉体を持つ凶体の大きな獣人だった

「何者と言ったかしら。なら答えてあげるわ、私の名前はフレイヤ、フレイヤファミリアの主人よ」

「…… オツタルだ」

そこには美の女神であるフレイヤとその従者である現オラリオ最強の冒険者オツタ



ルが夏油と対峙するような形で立っていた

## 衝突

「何者と言ったかしら。なら答えてあげるわ、私の名前はフレイヤ、フレイヤファミリアの主神よ」

「…… オツタル」

夏油の目の前に現れたのはオラリオ最大派閥であるフレイヤファミリアの主神であるフレイヤと猛者と呼ばれ、Lv7という現オラリオの中で一番の実力者であるオツタル。

夏油にとっては目の上のたんこぶとも言える二人が目の前に揃い、夏油は游雲に呪力を纏わせてしつかりと二人を睨むように見続けながら臨戦態勢へと入る

「あらあら、私たちはまだ何も言っていないのに」

「ダンジョンで態々人避けをして、猛者を連れてくる時点で大体察しはつくだろう」

夏油がそう言うのとフレイヤは話が早くて助かるわと笑みをこぼす。そう言うのと、フレイヤの後ろに控えていたオツタルが剣を抜き、まるで重力を操っているのではないかという程のプレッシャーを放つ

だが、夏油も様々な修羅場を掻い潜ってきた紛れもない強者であり、それに一切動揺することなどなく、変わらず臨戦体勢で構え続ける

「なら、敢えて言わせてもらおうわね」

「目障りなのよ貴方」

その瞬間、オツタルが背中に背負っていた最早鉄の塊と言っても良い程の大剣を抜刀し、夏油へと物凄いスピードで斬りかかる

しかし、それをただ見ている訳もなく、夏油は腕にも呪力を纏わせて、手首のスナツプを効かせて游雲で抗戦する

ガギン！という金属同士がぶつかり合う音と共に夏油達の周りの地面がひび割れ、陥落する

（なんて、馬鹿力だ。：！今の私じゃ、押し負けるッ）

夏油は游雲をぶつかり合う形から、少し横に傾けること衝撃を受け流す。ドゴン！という音と共にオツタルの大剣が地面へと突き刺さり、先程よりも地面の亀裂を大きく広げる

夏油は呪力を足へと纏わせて、オツタルのスカしたその横ヅラに蹴りを放つ。それをオツタルは片手で難なく受け止める

(ツ！なんて硬さだ、まるで分厚い鉄の壁を蹴ってるようだ)

「効かん」

鬱陶しいと言わんばかりに夏油の攻撃を受け止めていた腕を振り払う。夏油はクルリと回転することでその衝撃を限りなくゼロにし、地面へと着地する。夏油は目の前の敵から目を離さずにいる

だが、夏油は自らが圧倒的に不利だということをこの短い間で悟り、冷や汗を流す

「あら？意外とやるみたいね」

「ハハハ、そう言う君たちは些か拍子抜けだな」

「へえ」

フレイヤは此方を値踏みするかのように目を細め、冷たい笑みを浮かべる。それと同時にオツタルから感じるプレッシャーが更に増し、夏油は目を見開く

「なら、精々足掻くといいわ」

オツタルが先程よりも速いスピードで夏油へと斬りかかる。夏油は内心煽ったことを少し後悔しつつ、先程よりも呪力多く纏わせて游雲を振るう

游雲と大剣がぶつかり合い、その衝撃により激しい風が吹き、ダンジョンの壁の一部が崩壊する。一瞬の間、游雲と大剣は拮抗するが游雲が力で押し負け、夏油の脳髓をぶちまけようと凄まじい速さで振るわれる

しかし、そこは流石の元特級術師で夏油は体から余分な力を抜き、手で攻撃のベクトルを変えることでそれを回避する

オツタルはそれに目を見開き、それと同時に面白いと言わんばかりにニイと口角を吊り上げると同時に身に纏う覇気が更に洗練されたものになっていく

それを夏油はその様子を極めて冷静に観察しながらも夏油はオツタルと自身の身体能力の差に更に冷や汗をかきながら、この現状をどう打破すれば良いか頭を回す

（私の純粋な力では猛者オツタルに傷をつけることは不可能だろう。だが、先程殴った場所を見ると少しはダメージを負っていることが分かる。なら、先程よりも更に呪力を纏わせて殴る。それが手っ取り早い手段だ。だが、攻撃の隙を態々作るような相手でもない、呪霊を使って翻弄したいところだがその呪霊も数を減らされては呪霊が補充もしくは、再度使役出来るかも分からない今の現状ではそれは得策では無い。さて、どうしようか……仕方ないか、ここで負ければ私は死ぬ。なら、出し惜しみしてる場合では無いな）

「行くぞ」

夏油がオツタルへと肉迫する。それをオツタルは大剣での一振で応戦しようとする。

大気が唸る音と共に夏油の脳天へとその一撃が迫るが夏油がそれを避ける気配どころか、前傾姿勢のままオツタルへと突っ込む。

これにはオツタルも驚愕で目を大きく見開き、血迷ったのかと夏油へと落胆するがそれが間違っていたことは直ぐに理解した

オツタルの足元に少なくとも衝撃と共に、オツタルの体勢はグラリと傾いた

オツタルは咄嗟に自身の足元を見るとそこには、地面から顔を覗かせている異形がそこに存在していた。異形の存在を確認し、自身が敵の罠に引っかけたことを悟り、ギリりと歯を噛み締めた

それを見た夏油は自らの罠に相手が掛かったことに少し安堵しながらもオツタルへと更に接近する。

そう、夏油はオツタルにバレないように出来るだけ呪霊の呪力を覆い隠すように自らの体へと呪力を纏わせ、呪霊に地面に潜るように指示を出し、余分な呪力を使いながら接近することによって自らの策を相手にバレないようにしたのであった

呪霊は三級程度でしかないのだが、それでも地面を崩す程度ならば造作もなかった

「ッー」

オツタルが自らの足に絡み付く異形を素早く踏み抜き、夏油の攻撃へと対応しようと

するが夏油は既にオツタルの懐の内、安全圏に入ることです。オツタルの大剣での迎撃を未然に防いでいた

オツタルもそのことに一瞬で気が付き、片手で大剣を持ち、空いたもう片方の手で夏油の顔面へと拳を振るうが、夏油はオツタルの腕の横方向から肘を叩き付け、力のベクトルを無理矢理別の方向へと変える

オツタルは既に自分の迎撃では間に合わないことを察し、全身の筋肉へと力を入れ、防御に徹する

それはさながら小さく凝縮された鉄の塊のようで、それは例えレベル6の夏油の呪力で纏った拳ですら意に介さない程だった

だが、夏油が今から繰り出す攻撃には防護力の高さなどそんなことは関係なかった

「フツ！」

「ツ！」

夏油の掌底がオツタルの顎下を正確に撃ち抜き、防御力が出来ない脳へと衝撃を与え、オツタルに脳震盪起こさせる

クラリと意識が遠のき、全身から力が抜け、倒れようとするが、流石は現オラリオ最強。倒れようとする体を足でギリギリ持ちこたえ、また全身へと力を籠める。

だが、悲しいかな。夏油の今から繰り出すこの攻撃もそれは意味を成さなかった

「発勁」

その瞬間、オツタルの体内へと凄まじい衝撃が走り、その衝撃が破裂した

「オ」

衝撃によつて血管は破裂し、それは内蔵にも及んだ

ゴポリと口から紅い液体が溢れ、オツタルはそれが自らの血液であることを一瞬遅れて理解する

（何が、奴の攻撃は、俺には通らない、筈だ）

オツタルは頭を回すが、体内で未だに残っている衝撃と激しい痛みによつて頭は口クに働かず、何も理解出来ぬままオツタルの視界は段々と暗転していく

その中、自身の最愛の女神の声が頭に響いた





「さて、お前は どうする？」

夏油は自身の眷属が目の前で倒れながらも微笑む女神フレイヤを内心罵倒しながらそう言い放つ。するとフレイヤはフフフと心底面白いと言わんばかりに嗤う

「何がおかしい」

夏油は額に青筋を浮かべ、目の前の女神に対してのプレッシャーを更に増す。それでもフレイヤは嗤い続ける。まるで出来の悪い人形劇でも見るかのように

「だって、貴方があまりにも滑稽だったから」

「何だと？」

ビキビキと額に浮かぶ青筋はクツキリと形を剥き出しにし、脳がグツグツと沸騰したかのように熱くなる

夏油は神が嫌いだ。例外としてヘステイアは嫌いではないが、それ以外の神には嫌悪感を感じずにはいられなかった。その中でもフレイヤという神は正に夏油が嫌悪感を抱いていた神そのものに近く、夏油はそんな相手に罵倒されたことに激しい怒りを抱いた

「お前の下僕はもういない、私は此処でお前を殺すことも可能なんだぞ」

「今の貴方程度の実力じゃ無理よ。それに前提が間違っているもの」

「何を言っているかよく分からないな、それとも頭すら老化したのか年増？」

夏油のそんな言葉もフレイヤは受け流し、嗤う

「だって、オツタルを倒したと貴方は勘違いしてるんだもの。それがとても滑稽で仕方ないわ」

フレイヤのその言葉に夏油はハッと鼻で笑う

「見ていなかったのか？ 猛者は私の一撃で膝付き、倒れたじゃないか？」

「フッフ、それが間違いなのよ。オツタルは貴方程度の一撃で倒れる訳がない」

「だってオツタルはオラリオ最強だもの」

背後から荒れ狂う気配を感じた

(まさか、有り得ない)

夏油は後ろを振り返るとそこには

先程よりも大きい覇気を纏い、何事もなかったかのように堂々と立つオラリオ最強の姿があった

「言ったでしょう？ 間違ってるって」

「オオオオオオオ!!!」

それに呼応するかのようにオツタルが雄叫びを上げる。それはダンジョンを大きく揺らし、周りに湧いていたモンスターを一掃した

「もう一度言うわね、精々足掻きなさい」

フレイヤは冷ややかにそう呟いた

## 決闘 【前編】

視線の先には獣がいた

肉体に浮き出た筋肉は更に盛り上がり、血管はより力強さを現すかのようにビキビキと太い血管を浮かばせ、身に纏う覇気は最早先程よりも比べられない程に大きく膨れ上がり夏油の体にのしかかり、オツタルという存在を大きく主張している

ここからの戦いが本番、ということとは誰から見ても明白であった

夏油は相手の動向を何一つ見逃すことのないように目を鋭くさせ、オツタルの動向を伺う。

ピクリとオツタルの脚の筋肉が一瞬、動いたのを夏油は見逃さなかった。

来る——！

オツタルが動き出した瞬間、その一つ一つの細かな動向まで捉え、遊雲を強く握り締め、何時でも迎撃が出来るように構える。

オツタルが1歩を踏み出した瞬間

「は」

夏油の視界からオツタルが完全に消失した

(一体何処に——ッ！)

首元に悪寒が走り、第六感が警鐘を鳴らした

すると突如としてオツタルの気配が夏油の右方に現れた。それに目を見開き、動揺を隠せない夏油だったがオツタルはそんな夏油へと大剣を迷わず振るつた

オツタルの大剣が夏油の首を撥ねんと最早目視すら不可能なレベルの早さだった

「ッ」

夏油は自身の勘に従い、体を反ることなどでなんとかそれを回避する。黒曜石のように艶やかな髪がハラハラと数本斬られ、宙を舞った

それだけではオツタルの攻撃は終わる筈もなく、ギチギチという筋肉が引き締まる音と共に横薙ぎされた大剣を正眼へと構え、反った体勢の夏油に追い討ちを掛ける

「ッ、壁！」

夏油は自身が重宝している防御特化型の呪霊を自分とオツタルの間に呼び出し、オツタルの攻撃を防ぐ為の盾にする

激しい衝撃音と共に、呪霊と大剣はぶつかり合い、火花を散らす。オツタルの恐るべき力で振るわれた大剣は大きく風を巻き起こし、地盤を衝撃だけで崩れさせるが呪霊は

確かにその一撃を防いでいた

だが、その代償は大きかった

「ッ……！」

鋼鉄の如きその体軀にヒビが入り始め、そこから赤紫色の血が溢れ始める。

夏油は咄嗟に重要な手駒を壊されぬようにと呪霊を術式で仕舞い込み、呪霊がオツタル相手に作った一瞬の隙を一瞬の隙でバックステップをして大剣の一撃を回避する

地面に突き刺さった一撃は、クツキーを割るが如くに容易に亀裂が入り、床が崩落する

夏油はそれに一瞬間を擧めるが、直ぐ様に着地体制に入り、傷一つなく着地することに成功させる。オツタルはとうとうとフレイヤに柱に寄り掛かっていたフレイヤを抱き抱え、ドスンと重量感のある音を立てて着地する

「申し訳ございません、フレイヤ様。お召し物を汚してしまいました」

「気にする事はないのよ、オツタル。幾らでも代えなんてあるもの」

そんな日常会話の如き緩やかな会話を目の当たりにした夏油はピキリと額に青筋を浮かべ、舌打ちを漏らす

（随分とまあ、余裕だな）

グツグツと夏油の腸が煮え滾る。夏油は自身のすぐ傍にあった瓦礫を片手で掴み取



り、それをフレイヤの顔面へと呪力を纏わせ、プロ野球選手も飛び上がる程の速度で勢いの如くそれを投げる

フレイヤはそれをチラリと横目で見るが、どうでもいいと言わんばかりにまたオツタルの会話へと戻った

このまま何もしなければフレイヤの顔面へと着弾する瓦礫はフレイヤの傍にいたオツタルの拳の一振で木つ端微塵になった

オツタルはクルリと何事もなかったかのように夏油の方へと振り返る。それが却つて夏油の気に障った

その振る舞いが圧倒的強者のそれであり、それをして許されるのは最強である五条悟だけだと感じているが故に、そして自分が五条悟以外の相手に余裕を持たせているという現実には、夏油は腸が煮え滾った

怒りを抱くがそこは元特級呪術師と言うべきか、怒りを戦意へと変換し、自らのモチベーションを上げ、目の前の敵<sup>オツタル</sup>を見据える

先程のオツタルの攻撃を躲けたのは夏油がこれまで戦いの中で伸ばした勘が働き、回避することが出来た。だが、これは二度とは起きることは限りなく低いだろうし、何よりも勘が外れば夏油の命はオツタルの一撃によって落とすことになる

そんなほぼ運任せのものに頼る程、夏油は落ちぶれてはいないし、何よりまだ取れる

策も残っている。

夏油は無数の呪霊の内から、一体の羽虫の形をした呪霊を呼び出す。呪霊が呼び出された瞬間、呪霊を中心に霧のようなものが拡がった

オツタルが身構え、霧にどんな効果があるのか注意してみるが、特に自分の体に異常は見つからず、この霧は視界に遮る又は気配を消す類のものだと判断する

そのオツタルの推測は当たっていたようで先程までそこにあつた夏油の呪力はまるで元から何もいなかつたかのように無が広がっていた

オツタルは試しに大剣を大きく振り上げ、霧を掻き分けんと風が吹き荒れるようにと力強く大剣を振るう。

ゴオツ！という音と共に突風が吹き荒れる。それはさながら台風の中心部にいるが如く、猛々しい風だったが夏油の呪霊の霧は雲散することは一向になかつた

夏油が呼び出した呪霊は呪力で霧を作り出している為、これを退けるには呪力を使つた又は呪具を使用しての攻撃でなければ退けることは出来ない。

それに加えて、この呪霊の等級は一級に辺り、生半可な者では攻撃どころか呪力の圧によつてまともに動くことも出来ない

だが、オツタルはそれをものともしてない

(∴∴ 魔力が感知出来ない。随分と面倒な真似をしてくれる)

オツタルは呑気にそんなことを思いながらも、目を閉じ、自身の耳をへと神経を集中させる。

するとコツコツと地面を闊歩する音が鼓膜を揺らした

(これは、右……いや、背後ッ)

オツタル自身の右足を軸に背後へと大剣を勢いよく横に薙ぎ払った

だが、そこに夏油の姿は見えず、無が広がっていた

「……何？」

オツタルは口から疑問を漏らす、また大剣を構え直しては夏油がいつ、何処からでも来ていのように意識を研ぎすませる

だが、それを邪魔するかのようにまた足音が鳴った。

しかし、今度は背後ではなく全方向から同時に足音が鳴り始めた。これには流石のオツタルも動揺を隠せないでいた

(全方向だと、有り得ない…… 奴が使役していたモンスターを俺の周りに配置しているのか？ いや、奴はそんな無駄な手は使って来ない。なら、先程のモンスターと同じでなにか魔法を使ったのか…… ああ、全く本当に)

「面倒だ」

オツタルは再度目を閉じ、意識を集中させてこの空間を精確に読み取っていく。すると自分の周りを魔力に似た何かグルグルと駆け巡っており、それに触れた部分から足音が鳴っているのが分かる

だが、オツタルの目的はそれではない。更に意識を深く沈め込み、より緻密に、寄り広く気配を探っていく

「捕捉した」

全身の筋肉を駆使して地面を蹴り上げ、夏油のもとへと一直線に向かつて行く

それを夏油は距離が空いていたことからギリギリ感知し、迎撃の構えを取る

（くそ、気付くのが速い……だが、用意は整っている）

夏油との接敵まで残り4メートル程に差し掛かった瞬間、オツタルの目の前に壁が立ち塞がった。

その壁は夏油の使役している呪霊の術式で自分の一定範囲内の地面を操作するといふものだ

だが、操作をする際に複数操作することになると途端に精度が低くなる上に、操作する際に呪力が漏れるという点が欠点であった

そこで夏油は、呪力を隠蔽する術式を持つ呪霊を使い、呪力をカモフラージュをした上でオツタルの攻撃方向を一つに絞らせることでそれをカバーした

整えられた環境で、発動されたその術式は最早準一級の域を超え、一級の領域へと手に掛けていた。

だが、悲しいかな。猛者相手では役者不足だった

「無駄だ」

オツタルがシオルダータツクルの体勢で土の壁へと勢いよく突っ込んだ

壁とオツタルは拮抗し合う——

ことはなく、オツタルの鋼の肉体の前にまるでいとも容易くぶち破られ、オツタルはその勢いのまま夏油へと迫る

絶体絶命、このまま夏油が何もしなければ夏油はまるで柘榴のようなその中身弾けさせ、無惨にも殺されてしまうだろう

だが、夏油は壁を破られることも含めて備えていた

「いいや、無駄なんかじゃないさ」

夏油には壁とぶつかった瞬間のその一瞬の速さの緩みだけで事足りた。

突如、地面から鎖のようなものが飛び出し、オツタルの体へと巻きついた。だが、それだけでは即座に鎖を破壊されるだろう。そこで夏油はある手を加えたそれは

「やれ」

瞬間、オツタルの全身に電流が走った

「ツギイ、ガアッ！」

バチバチと突如自分に走った電流に驚きを隠せないが、電流はバチバチとオツタルの筋肉を揺らし、オツタルの体幹を崩す

痛みは感じないが、その分相手の行動を阻害するという方向に特化させたその電撃は如何に現オラリオ最強猛者オツタルですら足を止めざるを得なかった。

だが、そう長く足を止める程現オラリオ最強の名は軽くはない。

オツタルは未だ電流が流れる中、オツタルは自らの魔力を全身から発することで無理矢理電流を吹き飛ばした

「無駄だと言っているツ!!」

まだまだ微かに体に流れる電流をもともせずオツタルは雄叫びを上げ、夏油へともへと足を踏み出す。

だが、夏油の顔に焦りはなかった。むしろニヤリと厭らしい笑みを浮かべた  
「敢えてもう一度言おう、無駄じゃないさ」

ズシンと突如、凄まじい重力がオツタルのその身へと襲い掛かった。オツタルは体が未だ麻痺していることも含めて、膝を着いてしまう。

オツタルは忌々し気に夏油を睨み、自身が相手の罠にまんまと引つ掛かったことに腹を立てる。

「チエツクメイト」

オツタルの第六感が警鐘を鳴らした

「ッ、上！」

オツタルが上を見上げるとそこには自身の脳天を丁度穿つように配置された一本の短剣があつた。ゾクリとオツタルの背筋に悪寒が走り、自身の頭上にある短剣が自身に致命的な一撃を入れることを即座に理解した

一級呪具 疾毀鋼しつきこう

その呪具の能力は、加速時による威力の上昇

これは禪院甚爾が保持していた呪具の一つで、五条悟との戦いでは使われなかったものの、一級の中では破格の性能で甚爾が重宝している程だった

夏油は疾毀鋼の効果と、呪霊の呪力操作を組み合わせることによつて自らが振るうことなく、尚且つ最高の一撃を編み出すことに成功した

オツタルは自身へと迫り来る死に冷や汗が大量に流れ、如何にか回避しようとするが焦っていることも含めて全く解決策は見つけることは出来なかつた。

夏油の腕が振り下ろされる共にオツタルの脳天目掛けて刃が落とされる。その速さは最早、音速を超え、この一撃を喰らえばオツタルといえど絶命は免れないだろう

(死ぬ、俺が……?)

有り得ない、有り得ていい訳がない

(負けるのか俺は……?)

そんなものは認められない

(フレイヤ様の期待を裏切るのか……?)

否! 否! 否!

(俺は、フレイヤ様の忠実な下僕! 主人の期待を裏切るなど断じて許されない!!)

故に、越えろ己を! 越えろ限界を!!

「オオオオオオアアアア!!」

ギチギチと筋肉が悲鳴を上げるがオツタルは自身の大剣を拾い上げ死へと全身全霊で振るった。

「あの中で動けるだ?! 出鱈目だツ!! だが、疾毀鋼を止められる訳が無い!」

大剣と疾毀鋼がぶつかり合い、金切り音が階層全体に響き渡る。ギギギギという音共に火花がまるで火花のように激しく散る

最高速で振り下ろされた疾毀鋼を相手に重力という枷がありながらもオツタルは恐るべき身体能力と勘によって拮抗している



だが、重力というデイスアドバンテージはあまりにも大きすぎた

拮抗していた筈の衝突は徐々に徐々にと疾毀鋼の方へと天秤が傾いてゆく。オツタルは苦々しく顔を一瞬だけ顰めるが、ギチリと大剣を強く握り締める。

力を更に入れ、押し戻さんとするオツタルの耳にピシリという音が鼓膜を震わせた。

「ツー」

オツタルの大剣が衝撃に耐え切れず、亀裂が入っていた。これは不味いと出来る限りの力を再度入れ、退けようとするが一向に押し戻る気配はなかった。

ブチブチという筋繊維がちぎれ、オツタルの脳天へと疾毀鋼が近付いくが、オツタルは抗うことを、剣を振るうことを止めなかった

「何故、そこまでして抗う？」

そんな自分の声が脳内に響いた。これに、オツタルは決まってるだろうと言葉を漏らす

（我が女神に勝利を、我が女神の栄光を捧げる為だ!!）

「ウオオオオオオ!!」

思考すら出来ない程の全身全霊を振り絞り、大剣の勢いを加速させてゆく。ピシリピシリと更に亀裂が入るがオツタルに最早その音は聴こえていない

あるのは自分に迫っている死を退けるということのみ

オツタルの大剣が疾毀鋼を押し戻し始める。その代償に更に亀裂が入り、刀身の半分まで亀裂が走った。

それでもオツタルは止まらない

「そこを、退けエエエツ!!」

その圧倒的不利な状況から火事場の馬鹿力で振るわれた大剣は遂に、疾毀鋼を打ち破った

突風が吹き荒れ、その大剣の一撃は自身に課せられた重力でさえも断ち切った。これに夏油は驚きを隠せず、大きく目を見開き、動きを止めた

これを見逃す程、オツタルは甘くはない

一瞬で夏油の前まで移動をし、正眼へと構えた大剣を夏油の脳天目掛けて振り下ろした。

夏油の視界がまるでスローモーションの如く、遅くなり自身へと迫る大剣を見つめ、これをどう対処するかを焦る頭を駆使してなんとか見つけようとする

回避? いや、もう既に懐に入られている

呪霊？今から呼び出しても手遅れ

游雲による迎撃？威力が乗り切っていない状態での一撃など猛者相手には通用しな

い

詰み、夏油の優秀な頭が導き出した答えはそれだった

“なら諦めるのか？”

脳内に響く自問自答

“裏切るのか？誓いを”

(けれど、もう打つ手が……)

“勝ち目が無いのは、諦める理由にはなるのか？”

(それは……)

“それともまた諦めるのか俺最強を？”

声がいつの間にか夏油のものから変わっていた

幻聴にしては、精密で暖かみがある声は此方を発破する

“なあ、本当に打つ手はないの？”

(…回避は不可能、呪霊ももう遅い、游雲での迎撃では圧倒的に力が足りない。打つ手なんて、何処にも…)

“拳があるだろ、お前には”

(それは…)

“お前は難しく考えすぎなんだよ、どん詰まったら我武者羅にやるのだから手なんだぜ？”

“だからさ”

やって見せろよ、傑！

夏油は親友のその言葉に笑った。どれだけ己が罪を犯そうとも、どれだけ落ちぶれようとも己をただ一人の親友だと無垢な信頼を向け続ける男に

だから私もその信頼に報いよう、お前が信じた男として、お前が唯一認める親友として！

ああ、なんともなるはずだ!!

夏油は拳を強く握り締め、迫り来る大剣に向けて拳を振るった

(拳だど!? 血迷ったのか、あの男は)

オツタルは内心、驚愕も疑問で満たしていたがそれを気にせずに大剣を勢いよく振り下ろした

唸る剛腕から振り下ろされた大剣は突風を巻き起こし、階層全体を吹かせる。その威力はこれまでの戦いで裏付けされており、このままでは夏油の拳は切り裂かれ、夏油の脳天へと大剣が突き刺さるという結末でこの戦いは幕を下ろすだろう

オツタルはそうビジョンを描いた

実際はその通りだろう。普通ならば

だが、此処にいるのは最強と呼ばれた男の唯一の半身にて、最悪の呪詛師とも呼ばれた類稀なる男

そんな男が普通という檻に囚われる器などである訳がなかった

拳と大剣がぶつかり合う瞬間、夏油の拳に黒い閃光が走った

黒閃

さあ、  
覚醒の時だ

## 決闘 【後編】

黒閃

夏油の拳に黒い閃光が宿り、オツタルの恐るべき剛腕から振るわれた大剣とぶつかった。

バチバチと黒い閃光が大剣を蝕み、その一部を包み込んだその瞬間

「は」

オツタルの剣の刀身は夏油の拳によって破壊された

（俺の剣が、拳に負けただど!?）

オツタルの内心は驚愕に満ちているが、刀身が折れたその一瞬の体幹の軸のブレ、衝撃で振り上げられた腕、そしてそれによって出来た隙を夏油は決して見逃すことはなかった

素早く、懐へと潜り込み、発勁などを使用せずに呪力で強化した拳をオツタルの腹部へと叩き付けた。

先程では、決して決定打にならない程しか与えられなかった技術なしの拳での攻撃は黒閃という呪術師での一種の儀式を経て、猛者オツタルでさえ決定打に成りうる程に重く、鋭い攻撃へと昇華された

オツタルは口から体内の二酸化炭素を吐き出し、くの字に体を曲げ、ダンジョンの壁へと叩き付けられた。

「……………どういふこと」

フレイヤは目の前の出来事にまるで信じられないものを見るかのように目を大きく見開いた。

それは夏油の急激な進化のことも多少は含まれるが、フレイヤが驚愕しているのは夏油の魂だった

（魂が浄化されている……………!?!）

フレイヤから見た夏油の魂はまるで汚泥を煮詰めたかのようなおどろおどろしい人間の負の感情をかき集めたように穢れた物だった。

しかし、先程の黒閃を経て、黒茶色の中から純白の色を灯した。魂とはそう簡単に変えられるものではなく、その人の人格や人生を表したものだ



だが、夏油はその魂をこの短時間で純白を灯してみせた

(私の、見間違え? いや、確かにアレの魂は全て穢れていた筈。この短期間で改心? いや、隠れていた?)

どれだけ考えようともどれも答えとなる決定打にはなることがなかった。

フレイヤは思わず、口角を上げた

(ああ、分からない! まるで理解出来ない! この私が!)

だからこそ、面白い!

それは未知を求める神としての性か、それともフレイヤという神の傲慢さが表れたものなのか、それはフレイヤ自身でしか分かり得ぬこと

フレイヤは先程とは明らかに違う目付きでのこの戦いを見守る。結果の分かりきつた出来の悪い紙芝居から、結末は文字通り神ですら知り得ない演目へとその姿を変えたその戦いを

「さあ、見せて頂戴! 名も知らぬ貴方のその魂を! 未知を!」

フレイヤは興奮を隠しきれぬように妖艶に頬を紅く染め、更に口角を上げた

ダンジョンの崩落した瓦礫に身を沈めていたオツタルがガラガラと瓦礫を吹き飛ばし、その身を現した

口からはタラリと血が流れており、ポタリポタリとダンジョンの地面を紅く染めていた。決して少くないダメージを負っているのは誰から見ても明らかであるが、流石は現オラリオ最強と言ふべきか、体幹は全く崩れておらず、身に纏う覇気は未だに健在だった

オツタルは自身が握っている刀身を折られた剣を邪魔だと言わんばかりに投げ捨て、拳を構える。

普通であれば、自身の武器を破壊されれば圧倒的な不利に陥り、誰もが苦々しく顔を顰めるがオツタルには鍛え抜かれた鋼の肉体がある。そして、オツタルは歓喜していた。オツタルの一番の使命はフレイヤの従順なる僕であること。だが、そのオツタルにも人並みの感情は持ち合わせており、最近のオラリオでは自身を追い詰める敵など存在せず、オツタルは戦士として暇を余していた。

だが、そんな時に夏油が現れた

（ああ、何時ぶりだろうか。このピリつく緊張感、一瞬の油断が死へと繋がる命の取り合いを！）

オツタルは口角を僅かに上げ、その身に纏う覇気をより深く、より猛々しいものへと

変化させる

夏油はそのオツタルの様子を冷静に観察しながらも、黒閃を経験して自分が十二かの境界線を越えたのを感じていた

夏油は内心驚愕に満ちていた。まるで世界が広がったような錯覚に自身から溢れ出る程の全能感に

そして、チラリと一瞬だけ最強の背中が瞳に映ったことを

(お前はとつくの昔に此処を通っていたんだな)

追い付くにはあまりにも遠すぎるその星に手を伸ばす

誰もが無理だと手を伸ばすのを諦めてしまったそれを愚直に追い続ける夏油は見る人によっては愚かに見えるだろう

だが、夏油は諦めるつもりなんてサラサラない

(だから、これも私にとつての通過点だ。私が更なる跳躍をする為の踏み台。それ位でなければ最強には届かない)

夏油もオツタルに応えるように拳を構える。その存在感は先程までとは段違いで清廉ながらも相手を圧倒する恐ろしさをその身に秘めていた。

だが、オツタルは怯むことは無い。何故ならオツタルは現オラリオ最強なのだから

「往くぞ」

オツタルが一步を踏み出した。先程までなら見失っていたオツタルの姿を夏油はその目に映し込んでいた。

次の瞬間にはオツタルと夏油の拳がぶつかり合っていた。その余波にダンジョンの一部は崩落し、地面に亀裂が走った。技など存在しない純粹な殴り合い、だからこそそこで身体能力の差が表れる

「オオオオ!!」

「ッ」

（やはり、純粹な殴り合いとなれば此方が不利。だが、この程度を覆すことが出来ずに、最強を名乗れる訳がない!!）

拳がぶつかり合う度に響き渡る衝撃音と、巻き起こる突風。二人の拳の応酬のレベルの高さがそこに表れていた

だが、ぶつかり合う度に夏油の拳に響く衝撃は段々と蓄積していく。

段々と激しさを増していくこの応酬に夏油はどう突破口を開くか頭を回す

その時、ふと頭を過ぎったものは夏油の持ちうる中でも切り札に当たるうずまきだつた。

夏油は一旦、疾毀鋼と千切れた鎖を収納型の呪霊に吸わせつつ思考を続ける

(私は今までうずまきを呪霊からの呪力を抽出し、併合させる物だと思っていた。だが、術式を抽出することも可能なのでは無いか?…… 試す価値はある)

「極の番 うずまき」

「ッ!」

(威圧感が増した……!アレは一体)

オツタルはうずまきを警戒して、迂闊に近付けないでいる

(やるなら今か)

「抽出」

夏油は準一級の呪霊をうずまきで取り込み、呪力と術式の曖昧な境界線を正確に読み取り、術式を抽出させる。常人では放り投げ出す程に精密な作業を夏油は正確に、尚且つ恐るべき速さで進める

そして、作業を終えて手に残ったのは黒い玉だった

(作業は成功した。私の推測が正しければ、私は術式を複数使用することも可能になる)  
夏油はゴクリとその黒い玉を呑み込んだ。最早懐かしくもある吐瀉物を処理した雑巾のような味が口に広がる。慣れていなかった頃はその度に嘔吐き、涙を流していたが

最早それにももう馴れてしまった

(黒い玉を呑み込んだ? 一体何の——)

そんな考えを遮るように夏油から白い閃光が舞った

「ッ!?!」

次の瞬間には夏油の姿が消えていた

「一体何処に——」

オツタルの言葉は言い終わることなかった

突如、腹部に走る鈍い痛みにも口を止め、口から血を吐き出した

(馬鹿な、意識が少しズレたといつてもあの一瞬で俺の懐に入った、だど!?)

「ッ!ガアア!!」

オツタルは懐にいる夏油を退けようと剛腕を振った。オツタルの全力その一撃は最早人智の領域を超越しており、これを喰らえば幾ら覚醒状態の夏油といえど死ぬことはないだろうが戦闘不能に陥る程の傷は負うだろう

夏油の顔面へと拳が刺さろうとしたその直前に、夏油は白い閃光と共に姿を眩ました

オツタルの一撃が地面へと突き刺さり、階層全体を大きく揺らし、亀裂を走らせた。それにオツタルは躲されたことを即座に悟り、防御の構えを来るであろう夏油の攻撃に備え、防御の構えを取る

だが、夏油のスピードはそれを上回った

「鈍い」

夏油の蹴りがオツタルの脇腹に突き刺さり、オツタルはダンジョンの壁へと再度体を叩き付けられた。

自分が目で追うことすら出来ない超高速の移動からの芯の入った蹴りにオツタルは目を白黒させ、その鋼の如き体躯は再度ダンジョンの壁へと叩き付けられた。

夏油は叩き付けられた衝撃で崩れた瓦礫に吞まれたオツタルを警戒しつつ自分の現在の状態を確認する

（黒閃の副次効果なのか、異様に体が軽い。何より呪力の質が圧倒的に上がったのは此方としても有り難い。そして、うずまきは術式を抽出することが可能ということが分かった。しかし、これを使用すると呪霊を消費するようだ。だから無闇に使うものではない）

「だが、今回においてこの選択は間違っていないかった」

バチバチと夏油は指から眩い球体を作り出し、オツタルが埋まる壁へと放つ

高速で放たれたそれはオツタルがいるであろう場所へと着弾する直前に剛腕がそれを薙ぎ払った。

「全く、恐ろしいよ」

「貴様のそれはあの電撃を放ったモンスターの魔法か」

オツタルが瓦礫を吹き飛ばし、夏油へと問い掛ける。

夏油は内心、そのタフさに驚愕するがそれを心の内に塞き止め、オツタルの問い掛けに応える

「ああ、私の術式……いや、魔法であのモンスターの魔法を抽出して私が取り込んだ」

「……なるほどな。どうやら俺は未だにお前を無意識下で侮っていたようだ」

「だが、安心しろ。ここからは俺の全身全霊を賭けてお前を打倒することを誓おう」

オツタルから放たれる威圧感が明確な意志を持って、夏油へと牙を向いた。その威圧感を実際に質量があると錯覚させる程に重圧でその全ては標的である夏油へと向けられる

そんなプレッシャーの中、夏油は気遅れせずに笑ってみせた。まるで日常の一コマのように

「ほげげ、私にとってこの戦いオツタルは通過点に過ぎない。故に、退いてもらおうか元



オラリオ最強」

そう夏油が答えると、オツタルはクツクツと笑った

「退くのはお前だ、なんせ俺は現オラリオ最強なのだから」

瓦礫の一部が、落ちた瞬間に二人はほぼ同時に動き出した。ぶつかり合う超速度の拳のぶつかり合いはさながら台風の如く風を巻き起こしては、ダンジョンの壁や地面を抉る

スピードは夏油、パワーではオツタルが勝り、総合的に見れば二人はほぼ互角の状態。

故に、その二人の戦いは一瞬の油断が命取りだった

(もつと、もつと深く！術式の理解を！概念を！そして、想像を拡大させろ!!)

夏油は地面へと電磁波を放つ。ビリビリと地面へと電磁波が広がり、オツタルへと迫るがそれをオツタルはものともせず夏油へと肉薄する。

オツタルの拳が轟音を立て、凄まじい速さで夏油へと迫る。その威力は例え夏油でも防御をしなければ致命傷を負う程の威力。

それを夏油はただ見つめていた。

(コイツ、一体何を……？目に追えていな訳でもない。なら勝つことを諦めた……？いや、有り得ない。コイツの目は、何かを待って——)

空気を切り裂く音と共に、オツタルの腕に衝撃が走り、夏油へと放った拳が下へとブレる。

オツタルの目が驚愕で見開き、一瞬遅れた後に腕から激痛が走り、激痛が走った部分から温かい液体が流れ、紅い川を描く

（何が、起こって——）

自らの腕を貫いていたのは

（俺の剣、だと!?)

それはオツタルの剣。より正確に言うのなら夏油によって折られた刀身と言った方がより正確だろう。それがオツタルの拳が夏油へと当たりそうになるその瞬間に、寸分違わずに狙って下へ逸れるように腕を深く貫いていた

（どんな仕掛けが——）

「考える暇なんてあるのかな？」

夏油の拳がオツタルの鳩尾へと深く刺さり、その衝撃によりオツタルの巨体が地面から離れ、宙を浮く

「ア」

（不味い、流れに追いつけ——）

オツタルの巨体を柄が下へと叩き付け、強制的に思考を止められる。その叩き付けられた方向の先には夏油が既に拳を構えており、顔面へと振り抜かれる。

まるで顔の肉その物が抉られるようなその衝撃にオツタルは少なくともにダメージを受けるが、夏油の拳に対抗するように首に力を入れ、その衝撃で横へと吹き飛びそうな体を堪える。

夏油は完璧な隙を突いた自身の拳が受け切られたことに衝撃を受けながらも、攻撃する手を止める程、夏油は愚かではない。夏油はオツタルの顎を撃ち抜かんと足に呪力を纏い、蹴り上げる。

「舐めるなアアツ！」

オツタルは自身の背中に叩き付けられている柄を脅威の腕力で打ち払い、ハンマーを振り下ろす要領で両腕を夏油へと叩き付けた。

夏油は咄嗟に腕に呪力を集中させ、腕をクロスさせて防御をするがギシギシと骨が悲鳴を上げる。

（呪力を集中させての防御でもこれ程衝撃が来るのかッ、コイツの腕力は出鱈目過ぎるッ。体勢が崩れ——）

足を蹴り上げた状態から咄嗟の防御で体勢はお世辞にも整っておらず、夏油の足は限界を迎え、地面へと背中から倒れる。

背中に走る衝撃に夏油は口から空気と血液を吐き出し、ギシギシと背中の骨も悲鳴を上げた。

そんな夏油に追い打ちを掛けるように夏油の顔面へとオツタルは拳を振り抜く

「ッ！」

夏油はそれを体をローリングすることで回避し、その勢いで体制を立て直し、立ち上がる。

地面はオツタルの一撃を受け、その階層全体へとヒビを入れる。それに少し戦慄しながらも夏油は勝つ為の思考を回し続ける

（一進一退の戦いだ。だが、長引けば長引く程に不利な立場になるのは恐らく私だ。なら……）

オツタルも夏油へと目を向けながら思考を回す

（奴の対応力はハッキリ言つて異常だ。それに奴が使役するモンスターや魔法、それ等を含めば俺を封じ込める手立ては時間を経つ度に完成度が増す。なら……）

“一気に畳み掛ける！”

二人の思考が完全に合致し、ほぼ同時に両者は動き出した

（力の押し合いでは私の方がが悪い。なら、圧倒的に速さからの一撃で終わらせる！）

夏油は持ち前のセンスと黒閃により誘発されたゾーンという領域に入ったことにより極限まで研ぎ澄まされた集中力により、夏油は呪霊から抽出した術式を元々の持ち主以上に使いこなし、出力も呪霊のそれより限界値を大幅に上回り、範囲も広がっていた。夏油は体に纏っていた閃光を、恐るべき呪力操作で自らの足に集中させる。もし、少しでも操作を誤れば自らの足を潰すことになるがそんなことを毛ほども気にしない様な激みない操作でバチバチと輝く閃光をより圧縮させ、足へと纏う。

（足に光が集中している。奴も俺と同じ考えに至ったということだな……ということ  
は速攻か、ならば俺は……）

「往くぞ」

「ツ！来い！！正面から叩き潰してやる！！」

夏油が力強く一步を踏み出した瞬間に地面が罅割れ、その身から閃光が弾けたと思つたその瞬間に

夏油は既にオツタルの背後に移動していた

「ツ！」

（目で、追うことすら出来なかったツ！）

「終わりだ」

夏油が拳に呪力を纏わせ、オツタルの体にその拳を叩き付けた。その威力はこれまでの一連の流れによってオツタルにダメージを与えられることが分かっており、それに加えて呪力を拳に集中させたことからオツタルを吹き飛ばし、戦闘不能に陥らせることが出来るだろう

(拳が進まない)

だが、夏油の一撃はオツタルを戦闘不能する処かその身を吹き飛びすことすら無かった。

夏油の拳はその鋼の体に完全に受け止められ、ピクリとも拳は進むことは無かった(分かっていたとも、お前が俺を振り切る程のスピードを出せることなど。故に、態と俺は攻撃を受けた。俺自身の全てを防御に回して、な)

オツタルは夏油の足を踏むことよって夏油が自らの一撃を回避することを未然に防ぎ、夏油を確実に仕留める準備が整わせた

オツタルの拳が夏油の脳天へと振り下ろされた

(捕ったッ！)

オツタルが勝ちを確信すると夏油がオツタルを見上げる。自身の拳をけ止められ、逃げを防がれた夏油にもう打つ手はない

だが、その目は三日月を描いていて――

「ありがとうオツタル。予想通りに動いてくれて」

オツタルの腕に何かが這った、それは鎖

それが何重にも重なり、オツタルの攻撃を阻害するように腕に絡み付いた。

それは先程オツタルによって千切られた物であり、強度は変わらずとも、何重にも重なることで千切られることを未然に防いでちた

(馬鹿な、確かにコイツは鎖を仕舞って……ッ！まさか、コイツ!!)

「切ったのか、鎖を！俺を鎖を完全に仕舞ったと錯覚させる為に!!」

その証拠にその鎖は千切られたにも関わらず、刃物で切断されたような人為的な切れ目が付いていた

(クソッ！クソッ！クソッ!!この状況も全て、全てコイツの掌だったのか!)

「言っただろう、終わりだと」

夏油の拳に呪力と白い閃光が纏われていく、オツタルに出来ることはただ敗北を待つのみ

（次だ、次こそは——

「ありがとう。君のおかげで私は更なる高みへと至った」

夏油の一撃がオツタルの頬を突き刺し、オツタルは地面へと倒れ伏した後に夏油は戦闘態勢を解いた。

これにより決着はついた

「私の勝ちだ」

闘争の果てに立っていたのは嘗ての最強の片割れ、そして史上最悪の呪詛師、五条悟星に手を伸ばす愚者を

その名は——

夏油傑

これより星<sup>五条悟</sup>を追い続ける愚者の冒険譚は始まった。本来交わる筈の無い出会いがどのような変化を世界に下すのかそれは神にすら理解し得ぬこと。



だが、夏油は止まらない。例え、その身が太陽に近付きすぎたイカロスの翼が燃え尽きたように、星に手を伸ばしその身が焼け焦がれようとも夏油は足を止めない。

何故ならば――

(後戻りなんてしない。何故なら私は五条悟の唯一の親友にて、片割れなのだから。例え、どれだけ時が経とうとも、必ず至ってみせる)

「ここからだ、ここからが本当の始まりだ」

夏油は薄暗い地下から宇宙へと手を伸ばした

「それでどうするつもりだ？お前は」

「フフフ、何もしないわ。オツタルを回復させて、ホームへ帰るだけよ」

それだけ聞くと、夏油は上の層へ戻る為にフレイヤへと背を向けて歩き出す。念の為に呪霊を呼び出し、フレイヤを監視しながら。

フレイヤは呪霊を見て一瞬だけ顔を顰めた後に、夏油へと蕩けるような笑みを向ける  
「ねえ、貴方の名前を教えて欲しいの」

男であれば誰でも顔を赤くし、どんな無茶難題でも領いてしまいそうな程の甘い声で夏油へと問い掛ける。

夏油はその声にピタリと足を止め、フレイヤへと振り返る

その表情は能面のように冷たく、フレイヤを明らかに軽蔑していた

「誰が教えるか、若作り尻軽クソビッチ。さっさと腐り死ね」

中指を立て、ニッコリと嗤った後に夏油は来た道に戻って行った

「ふ、フフ、フフフフフ」

女であれば全て侮辱に当たるその暴言の嵐に、フレイヤは肩を震わせた。

普通の女性であれば怒りで顔を歪めるが、フレイヤは普通などでは決して無かった

「この私がこんなぞんざいに扱われるのなんて初めてよ。けど、不思議と悪い気はしないわ」

そこにあるのは未知に対する喜びの笑いとまるで好いた相手に向ける乙女のような

表情だった

「ああ、名も知らない貴方！貴方を私の手に収めた時、どれ程の未知が手に入るのかしら  
！ああ、本当に」

楽しみだわ

フレイヤは自身が思い描いた未来に、体をくねらせた

## 禁句

「今帰つたよへスティア」

そう言い、夏油がボロボロの木の扉を開くとギイイと聞く人を不安にさせる気の軋む音が鳴る。相も変わらぬ古び具合だが、脳内で微調整すればこの木の軋み具合もご愛嬌だと思えるように——はなれないけども、それでもへスティアという家族が待っているということだけで胸が満たされる。

ミミやナナ、そして他の家族との比較なんて出来る訳がないが、自分の大義や呪術師達に勘づかれぬように気を配る必要がないこの場所は夏油にとって心安らぐ場所であつた

「おかえり！夏油君！」

廊下の奥からトタトタと可愛らしい足音と共にこの教会の主人が姿を現す。背丈は平均的な女性の背丈のそれ以下であり、普段の言動や童顔であることも含め、年齢は夏油より圧倒的に上ながらもどこか世間知らずの幼子のように感じられる。

その神らしくないへスティアの在り方は夏油にとってとても好ましいものであつた。

故にそんな彼女が自分を待つてくれているこの教会は夏油にとって帰る場所になりつつあった

「お疲れ様！怪我はな——つて、どうしたのさ!?!その怪我!!」

「いやあ、ちよつとね……」

「ちよつとね……じゃないよ！レベル6の君が怪我を負うなんてどんなバケモノを相手してきたんだい!?!」

ヘステイアは一応の為に奥に保管していたハイポーションを取りに慌てて廊下を駆けていく。その姿に申し訳なさを感じるが、こんな自分でも心配してくれる人がいることに心の奥がほんのりと温かくなった。

元の世界では自分の実力や立場、その他諸々含め、自分は誰かに心配されるという経験は極端に少なく、それよりも誰かの為に行動を起こす経験の方が圧倒的に多かった。

両親でこそ、何回かは心配をされたことがあるが呪霊の存在を相談した際に、夏油を懐疑の目で見られたその瞬間から、夏油は大人になざるを得なかった。故にヘステイアの夏油に対する接し方は夏油にとってこそばゆくも嬉しいものだった

「ほら……このハイポーションを飲んで早く!」

「ああ、すまないね……」

夏油がそう言うのとヘステイアはピシッと人差し指を夏油へと勢いよく突き出した

「違うよー！こういう時は、ありがとうで良いんだ！」

ヘスティアがそう言うのと夏油は呆気を取られたように口をポカンと開き、目を見開いた後に、穏やかに、心底幸せそうに笑った

「そうだね。ありがとう、ヘスティア」

「うん！よろしい！」

夏油がゴクリとポーシオンを口に流し込む

子供の用に作られた薬のように甘く出来ている訳でもないハイポーシオンはお世辞にも好んで飲むとは言い難く、良く言えば独特な味、悪く言えば不味い。

けれども夏油は呪霊を取り込む度にこれより何十倍もの苦痛を受け続けてきた、それ故に夏油の舌は常人よりもエグ味や苦味等に強くなっていた。

実際、夏油はハイポーシオンを飲み込んで「案外いけるな」などイカれたことを考えていた

「これは凄いな」

夏油がハイポーシオンを飲み終えると服や肌に着いた血痕などはそのままだが、顔や腕などに開いた傷口は跡も残さずに綺麗に閉じられており、出血も止まっていた。

夏油は反転術式に似たような効果を持つハイポーシオンに驚きつつ、これは確かに高

い金銭を払う価値があるなど感服すると同時に、これをどうにか自力で作れるようにならないかと内心そう呟いた

「よし！傷は治ったところだし、何があったのか聞こうじゃないかあ？」

スチャリとありもしない眼鏡を弄るようなヘスティアの動作を微笑ましく思うと同時に真実を言うか言わないかの二択をどう答えるか思考する

（正直、オツタルとの闘いは内密にしておきたい。だが、ヘスティアも一応は神だ、私の嘘などお見通しだろう。騙せなくもないが、これをするのは私としても余り良い気分ではない……正直に答えるか）

「分かったよ。正直に答えるさ」

私はヘスティアに包み隠さずに全てを話した

オツタルと戦ったことも、命を落としそうになりながらもオツタルを打倒したことも、そして、女神<sup>クツァバズレ</sup>フレイヤに目をつけられたことも

「あのオラリオ最凶のオツタルを倒して、しかも、よりもよってあのフレイヤに目を付けられただつて!？」

「あ、うん。そうだね」

夏油がヘスティアのオーバナリアクションに少し驚きつつもそう言葉を返す

すると、ヘスティアがギリギリと歯を強く噛み、ワナワナと怒りで震えた。その一連の動作は夏油の脳内に噴火前の火山を過ぎらせた

「あの野郎っ、では無いか…… あの女郎！よくもボクの家族である夏油君を誘惑しやがってえ!!もう！許さないぞお！次会ったらケチヨンケチヨンにしてやる！」

うがあ!とまるで獣のように暴れ回るヘスティアに本当に幼子のようなだという感想を抱きつつ、いい加減宥めようかとヘスティアの肩に手を置く

「大丈夫だよヘスティア。私にとつて家族となり得る神など君ぐらいしか存在しないさ」

そう言うヘスティアはピタリと動きを止める

「…… 本当？」

「勿論だとも、私が見た中でも君は一番の神さ」

「…… えへへ、そうかなあ」

夏油の嘘偽りない褒め言葉に、ヘスティアは頬を緩める

「何より、私は女神フレイヤが嫌いだからね」

「そうなの!?!あの男なら誰でも好きにさせてしまおうあのフレイヤを!?!」



「ああ、嫌い……いや、大嫌いさ」

夏油がそう言うのと、ヘステイアは目を大きく見開いた後に、夏油の背中へと回り込みバシバシと背中を叩く

「さつすが夏油君！それでこそボクの家族さ！」

ヘステイアはニヤけた顔も隠しもせず、上機嫌に声を弾ませながらそう言う。

夏油はそれに追い打ちを掛けるように懐から巾着袋を取り出し、ヘステイアの眼前へと垂らす。

その中身は夏油が集めた魔石を換金させたヴァリスであり、パンパンと巾着袋をパンパンに膨らませていた

「こ、こんなには稼いだの!? 一日もしないで!」

「ああ、というかこれからはこれが普通。いや、これ以上稼いで来るよ」

「ほ、ほへえ…… やっぱり君は規格外だな夏油君」

ヘステイアが驚愕に満ちた表情を見せると夏油は一気に畳み掛ける

「だから、今日は豪華に外食でもしないかい?」

「!が、外食!なんて甘美な響きなんだ!」

ヘステイアにとつての今までの食事は自らが働いてる出店であるじゃが丸くんが余った物であり、外食など貧乏であるヘステイアにとつてそれは最早一種の伝説であつ

た。

しかし、それが今、この瞬間に叶えられようとしている。しかも、唯一の家族である夏油に誘われている。こんな素敵なシチュエーションをヘステイアが逃すわけがない

「何してるんだい夏油君！さあ、今すぐ用意して！美味しい料理店ならボクが知ってるから！」

余りの変わり身の速さに夏油はある種の感嘆をヘステイアへと抱くが、やはり幼子だな」と内心密かに呟いた

「はいはい、じゃあ私は着替えてくるから外で待っていてくれ」

「了解さー！」

勢いよく外へ駆け出したヘステイアを横目に、夏油はクローゼットに仕舞っていた濃藍のジャンパーと白色のシャツ、烏羽色のズボンを取り出し、現在着用している物から素早く着替える。

先程、ヘステイアのことを内心幼子のようだと言った夏油だが、夏油も夏油で年甲斐もなく心が浮き立っていた。元の世界での夏油の存在というのは指名手配中の凶悪殺人犯と同義であり、ミミヤナナの要望で何回か外食をしたことはあるが、呪術師に見つからぬようにと細心の注意を常に払っており、心休まる暇なんてものは無かった。

だが、この世界で夏油は殺人は勿論、犯罪等は何も起こしてもおらず、表向きはレベル1ということになってるので無名そのもの。

故に人目を気にする必要は一切無く、心置きなく食事を満喫することの出来るこの環境に歓喜していた。それを表情には出さないようにしているが、口角は上を向いていた「さあ、行こうか。案内よろしく頼めるかな?」

「うん!任せておいてよ!」

ヘスティアが夏油の手を引いて歩き出した、その二人の姿は血は繋がっていないがとも家族の形を成していたが、周囲の人からしては見た目麗しい女兒と顔が整っているが胡散臭さい笑みを浮かべている長身の男性という組み合わせに、仄かに犯罪臭を感じ取ったのかハラハラと見守っていた。

しかし、初めての家族との外食で周囲にまで気が回らない程に機嫌が良いヘスティアと知りもしない有象無象に興味など無い夏油にとっては些細なことだった

暫くし、ヘスティアがある店の前で足を止めたので夏油も足を止める。その店の前にあった看板には豊饒の女主人と綺麗な文字で大きく書かれており、その店の中からは芳ばしい肉の香りを始め、様々な料理の匂いが漂っ

ており、二人の胃袋を刺激する。

ゴクリとヘスティアが唾を飲み込み、扉に手をかけ、開いた

中は冒険者で賑わっており、ガヤガヤと騒がしくも、何処かアットホームな雰囲気を感じられるような騒がしきで、テーブルや椅子なども木で作られてるおり、暖かみの感じられる内装で、質素ではあるがとても魅力的な店だった

「いらつしやいませ。二名様でよろしいでしょうか？」

緑髪のエルフの麗人が、ヘスティアへと声を掛ける

「あ、う、うん！二名で合っているよ！」

ヘスティアは内装に呆気を取られていたが、声を掛けられ、正気に戻ったのか少し声を震わせて返答する

「此方へどうぞ」

言葉少なにそう返された後に、テーブルへと案内される

ヘスティアは上機嫌の様子から一転し、カチコチに緊張した様子でテーブルへと足を進める。その様子を夏油は少し楽しみながらも足を進める。

エルフの麗人に椅子を引かれ、ヘスティアはおずおずときこちない動作で着席し、それと同時に夏油も席へと座る

「メニュー表です。御注文がお決まりでしたら、お呼び下さい」

頭を浅く下げ、カツカツと厨房へと戻っていった。その様子を二人は見守り、ボタンと厨房への扉が閉じられた瞬間にヘスティアは息を吐き出した

「はあ、凄い緊張したよ…… なんだか雰囲気のある女の子だったね」

「…… そうだね」

(体の軸に全くブレが無かった、服の上から見えにくかったが体も鍛えられていた。実力は隠しているようだが、あの雰囲気…… 只者ではないことは確かだ。しかも、あのエルフ以外にも実力を隠している者が多数、そして、不思議な気配を持った者が一人) 夏油はメニュー表を覗きつつ、思考を続ける

(この店がただの料理店ではないことは何となく分かった。だが……)

チラリと灰色の髪を持つ、麗しき女性を横目で見る

(アレはなんだ…… ? 人であるのは確かな筈、だが神の気配も感知出来る。この気配、何処かで——)

「…… どう君、夏油君!」

「ツ! どうしたんだヘスティア?」

「どうしたってこつちの台詞だよ! いきなり喋らなくなつて…… ボクがいるんだから、よそ見厳禁だぞ!」

ヘスティアはプリンと怒りを露わにする

「すまないね…… そうだね今は君との食事を楽しもう」

「よろしい！さて、注文するのは決まったかな？」

「ああ、決まったとも。この茸とベーコンのソテーと鶏のグリルに私はしたよ」

ヘステイアが先程の店員を呼び、注文をしていく

店員は手元にある紙に注文した料理名を文字一つ間違はなく、完璧に書き写している。

ペンの動きには無駄な動作がなく、最低限の労力且つ完璧な仕事をこなすその動きは間違いなくプロそのものであり、夏油はそれを横目にヘステイアの注文する姿に小動物のような微笑ましさを感じていた

その店員の醸し出す、人を殺した者特有の雰囲気を見ながら

「間違いなどは御座いませんか」

「だ、大丈夫だよ」

「了解しました」

スタスタと再度、厨房へと戻っていく店員の後ろ姿にヘステイアはホツと安心から息を吐いた

「いやあ、悪い子ではないと思うんだけど……何だかボクを拒絶されてるみたいで緊張しちゃうなあ」

「馴ればいいき。これから、何度も此処に来ることになるんだからね」

夏油がそう言うのとヘスティアは目を大きく見開いた後に、ニコリと可憐な笑みを浮かべた

「そっか！楽しみだよ」

「ああ、そうだね」

二人の間に和やかな空気が流れる

だが、それを切り裂くようにドアが勢いよく開けられた

「邪魔するでえ！」

そんな快活な声と共に赭色の髪の女性が現れる

その女性の名は――

「なツ！お前はロキ」

終焉を告げる者、道化の神　ロキその人であつた

「ん？　なんやチビ？　お前も此処にいたんか」

「だあれえがチビだつてえ！　このまな板女！」

先程の和やかな雰囲気は夢のように崩れ去り、二人の女神の幼稚な喧嘩が始まる。

どちらも語彙力が小さい子供のそれであり、なんとも低レベルな喧嘩だった。巻き込まれたくない夏油はそのまま傍観をしようか止めるか迷っていると、そんな二人の肩に窘めるように手を置く存在が現れた

「ロキ、それと其方の女神も、此処は喧嘩をする場所じやなく、食事を取る場所だろう？ それに今のはロキが最初に喧嘩を売つたんじやないか」

ロキファミリアの団長であり、勇者の二つ名を持つ冒険者

「フィン!? 私は悪くないやん！全部このちんちくりんが悪いねん！」

フィン・デイルナレベル6の第一冒険者に名に恥じない程の実力者が、二人を宥めていた。

だが、ロキは納得いかないのか屁理屈のような言葉を幾つも並べるが、ロキの背後に凄まじい怒気を放つ、エメラルド色の麗しい女性が青筋を浮かべ、拳を振り上げ、拳を落とした

「いい加減にしないか！」

「ツテエ!? 何すんのリヴェリアおかん！」

九魔の姫の二つ名を持つ、レベル6の第一冒険者 リヴェリア・リヨス・アルーヴ



「誰がおかんだ！」

「ゴツン！」と再度、ロキの脳天に鉄拳が落ちた。音からして痛そうなその一撃にヘスティアを知っている人物なら目を見開き、驚愕する程の真顔になる。

ロキに拳を落とした女性は痛がる主神を無視し、ヘスティアへと頭を下げた

「申し訳ない。ロキによく言っておくからどうか落ち着いてはくれないだろうか」

「ア、ハイ」

ヘスティアは目の前で行われた惨劇に身を震わせ、カタコトになりつつも答える。望む返答に満足したのか、痛みで転げ回るロキを無視して奥のテーブルへと足を進める。

それを期に、次々と様々な人物が店内に入ってきて来るが、共通して彼等はロキファミリアのメンバーだった

地面へと未だに転げ回っているロキに一人の、女性が近寄ってくる

「大丈夫？」

その鈴の音のような可憐な声を聞いた途端にロキはピタリと動きを止め、その女性に勢いよく抱き着いた

「アイズたん！大丈夫！こう見えて頑丈やからな！でもまだ少し痛むからその胸揉ませくれんかあ!!」

劍姫の二つ名を持つ金髪の麗しき女性であるアイズ・ヴァレンシュタインがロキを心

配そうに覗き込んでいた。

それに反比例するようにロキはアイズの一声で痛みで転がり回るのをやめ、興奮したように早口で堂々とセクハラ行為を働こうとしていた

「駄目」

「ノオオオオオオ!!!」

当然の結果にロキは床に崩れ落ちた。それに夏油は侮蔑の目を向けていると、アイズ・ヴァレンシユタインが此方を見ていることに気が付く。

夏油は何か気に障ることもしたか?と内心呟くが、夏油はただ見ていただけであつても何も気に障る行為など出来る訳が無かった。夏油は少し様子を見てみると、アイズ・ヴァレンシユタインが此方へと近付いてくる

「ねえ」

「うん?どうかしたかい?」

「貴方、名前は?」

そんな在り来りな質問に夏油は拍子抜けする

「私の名前は夏油傑」

「ゲトースグル。私はアイズ・ヴァレンシユタイン。よろしく」

スツと手を差し出され、握手を求められる

「ああ、宜しく」

夏油も手を差し出し、握手を交わそうとした瞬間

パチンと夏油の手が誰かに叩き落とされる

「は？」

「雑魚が気安く触ろうとすんじゃねえ。アイズもだ、そんな奴に構おうとすんな」

夏油の手を落とした人物は凶<sup>ヴァナルガンド</sup>狼の二つ名を持つ銀色の髪を持つ獣人であり、レベル

5の第一冒険者であるベート・ローガだった

「……君、礼儀つてものを知らないのかい」

「ハッ！誰がテメエみたいな雑魚に礼儀なんて払わなきゃいけねえんだよ」

「おい！ベートツッ!!」

「うるせえよ、クソババア。俺はなーんも間違ったことなんぞ言っただけ。コイツが雑魚なのも礼儀を払う必要がないのも当然のことだろうが」

ビキリと夏油の額に青筋が盛り上がり、怒りを露わにする。それにいち早く気付いた

へスティアは夏油の怒りを鎮めようとする

「げ、夏油君！お、落ち着いて！」

「あ？なんだこのチンチクリンはよオ！眷属も眷属なら、神も神でこのザマとはア!! 雑魚すぎて逆に同情しちまうぜ!!」

ギヤハハハ！とベートは下品な笑い声を上げる

ビキリビキリと青筋が更に盛り上がり、夏油から僅かに重<sup>プレッシャー</sup>圧が漏れ出す

ベートのいきすぎた発言と夏油の怒気に気が付いたフィンは流石に止めに入ろうとするが、もう遅かった

「なあーなんとか言ってみろよ猿野郎!!」

夏油が最も憎むその忌々しいその名を、よりにもよって夏油相手にベートがその言葉を口にした瞬間、夏油から完全に表情が消え去った。

それと同時に、フィンの親指が激しく疼いた

夏油が常に浮かべていた胡散臭い笑みは鳴りを潜め、その整った顔が全面的に醸し出されているが、表情が消え去ったせいか、その整った顔は相手に恐怖を与えるものに変化した

「潰す」

夏油のドス黒い怒気の込もった眩きが店内に響き渡った

## 追憶

ベート・ローガにとってアイズ・ヴァレンシユタインという存在は、自らの理想そのものだった

ベートは平原の獣民族の長の息子としてその生を受けた

ベート・ローガの父であるその男は実力主義的な考えを持つ狼人の中でも、特にそれを重視する人物だった。

故に、ベート・ローガは幼い頃から父の教えである弱肉強食をよしとし、その教えの

通りに幼少期から鍛錬に明け暮れていた。

メキメキと実力を高めていくベートに大人達は流石族長の御子息だと褒め称え、ベートと同年代の子供達はベートのその強さに畏怖を示した。

大人達は勿論、子供達から畏怖を抱かれていたベートは孤独であり、それを無視するかのようにひたすらに鍛錬を積み重ねていく

だが、そんなベートを気に掛ける人物がいた

それは自分と同じ日に生まれた幼馴染だった

その幼馴染は元来の性格である落ち着いた性格やその優しき、顔が整っていることもあり、老若男女、誰からも好かれるような素晴らしい女性だった。

その幼馴染をベートは力で勝ち取り、守っていくことを誓った。

幼馴染が部族の中でも最も弱いということもあり、ベートの鍛錬はより一層激しくなっていく。

それを知っている幼馴染は鍛錬で疲れ果てたベートにタオルを渡したり、限界を超えてまでも鍛錬し続けようとするベートにストップを掛けたりなど、ベートに対して様々なことを施した

そんな幼馴染を、ベートは好ましく思っていた

ある日、鍛錬に熱中するベートにこれは流石にマズいと感じたのか、幼馴染である女性にはベートの手を引いて、部族の子供達が普段使用している、言わば公園に強制的に連行する

公園へと着き、ベートを集まっている子供達の輪の中へと引つ張る幼馴染にその思惑に気付いたベートは声を荒らげる。

そこで、ベートの存在に気付いた子供達はベートの顔を見た途端に、石像のように動きを止めた。その様子に“やっぱり、こうなるんじやねえか”と溜め息を吐きたくなったベートだが、表にはそれを出さない。

何故なら、自分の些細な行動一つで目の前の子供達は恐怖で身を震わせることを知っていたから

そんなベートの一種の諦めの感情を感じ取ったのか、幼馴染は子供達へニコリと笑い掛け、言葉を放つ

「ベートも、入れていい?」

「は?」

ベートは意味が分からないとばかりにそんな意味を成さない言葉を漏らした。

この男は、自分が居ることによって与える影響を正しく理解している。なのに、何故自分と子供達を関わらせようと行動するのか理解出来なかった



「ま、どうせ断るだろ」そんな思いが頭に浮かび、ベートは目の前の子供達の返答を待った。

だが、ベートそんな考えは裏切られることになった

「いい、いいですよ…。」

子供達の中の一人の小柄な男の子が恐る恐るとそう返答した。

それに同意するように周りの子供達もコクリと頷いた

「は!？」

驚きを隠せないベートをその隣でニコニコと笑う幼馴染がグイッと引っぱり、子供達の輪の中へと入れる。

普段ならば、抵抗されるそれも動揺で頭が回っていないベートならば容易にすることが可能だった

「じゃあ、鬼ごっこしよっか!」

「「「さんせー!」」」

「じゃあ、鬼はベート!二十秒数えてから鬼ごっこ開始ね」

よいい、スタート!という男の声と共に子供達は様々な方向に狼人特有のその俊敏さを活かしながらも、散っていく。それをベートは口をポカンと間抜けに開け、呆然としていたが、正気に戻ったのか頭をガシガシと乱暴に掻き、幼馴染の罠に嵌ったことを悟

る

「……やるしかねーか」

ベートは陰鬱そうにしながら、そんな言葉を吐き、秒数をカウントし始めた。

そんなベートの口は僅かに吊り上がり、確かにベートはこの時間を楽しみ始めていた

「18、19、20。さあて、行くか」

そんな声と共に、ベートは疾風の如く駆け出した

普段から鍛えているベートが遅れを取る訳でもなく、幼馴染を含めた子供達は全員、ベートに捕まえられる。

ベートの汗すらかかずに全員を捕まえるというその姿に子供達は憧れを覚えると同様に、悔しさも感じた

それを見て幼馴染が再戦開始の宣言を発表すれば、子供達は喜び、またベートから逃げ出し、それをベートがまた捕まえるという循環。

そうしている内に、夜の帳は落ちかけ、夕暮れになる

「じゃあ、もうそろそろ解散にしよう」

「「うん！」」

またねー！と元気な声と共に、子供達は去って行く

それを幼馴染は手を振り、優しくそんな笑みを浮かべながら見送った

「さて、ありがとね？ベート付き合ってくれて」

「暇だったから付き合っただけだ」

そんなベートに言い草に幼馴染は苦笑を浮かべる

「楽しかった？」

その問い掛けに、ベートは一瞬沈黙する

「……悪くはなかった」

「そう！それなら良かった」

そっぽ向くベートに向かって、幼馴染は先程の苦笑とは違い、本当に嬉しそうに笑った

そこからベートの日常は変わった

鍛錬に明け暮れる日々から、極彩色に彩られた日々へと

交流する度に他人と自分との間に広がっていた溝が埋まり、仲を深めていった。

相手はベートが優しい人物だと悟り、ベートはより一層親しまれていく

前の自分ならばくだらないと吐き捨てていたであろう日常を、今のベートは愛した

この日常に、何気ない幸福に笑い、思い出を積み重ねる毎日が一生続けば良いと思っ  
ていた

この当たり前の日常が続くと思っていたのだ

そうなる筈だったんだ

「なんだよ、なんなんだよコレ!」

狩りを終え、村に帰ってきたベートを迎えたのは、紅色に燃え盛る炎と鉄臭い匂い、そして跡形もなく崩壊した建造物だった。

辺りを見回せば、押し潰され、肉塊となった死体や、まるで貪り食われたかのように内臓を抉られた死体、首と四肢をもがれた死体などが転げ回っていた

そこには無惨な姿になった自らの両親の姿もあった

「ヴ、オ、エ、エ、エ、エ」

辺りに立ち込める鉄臭さもあり、ベートは思わず胃の中にある全ての物を吐き出した（なんで、どうして、なにが、おこつて、しんだ、おやじも、おふくろも、あいつらも、ぜんいん、しんだ）

纏まらない頭の中でふとあることに気が付く

「あ、いつは……?」

それは幼馴染の死体がないことだった

（あいつは、どこだ。あいつなら、きつと、いきて）

「さが、さねえと」

ベートは駆け出した

自分の服が紅く染まることも厭わずに、ただ救いを求めるように駆けた。

目に見えるのは転げ回る死体と、激しく燃える炎のみ

(どっぴり——)

自分以外の荒い息遣いが崩落した建物の隙間から聞こえた

「！」

ベートはその崩落した建物の隙間を覗き込むと、そこには頭から血を流しながらも、確かに生きている幼馴染がそこにいた

「ベー、と？」

「あ、ああ！おれだ！今すぐに助けてやる！」

ベートが幼馴染を引っ張り出すとするが、足が瓦礫に押し潰されている為、どれだけ引っ張ろうが結局のところ子供でしかないベートでは助けることは不可能だった。

それでも幼馴染を助けようとするベートだが、地面が地震が起きたように大きく揺れた

「な、なんだ？」

その揺れは段々とベート達に接近し、その正体を表した

「な、なんだよあれ……」

その正体は巨大な竜だった

その体躯は自身のそれより大きく上回っており、その皮膚はまるで岩石のようにな硬さを持ち、その鋭い目からは膨大な殺意を含んでいた。

口からチラチラと垣間見える炎が、その恐怖を煽り、ベートの足はガクガクと震え出した

「え、あ」

恐怖から動けないベートを龍は呑気に待つ訳でもなく、

踏み潰すかのようにその巨大な足を大きく上げた

「ベートー！」

「ッ！」

その声で正気に戻ったベートは危機一髪のところを避けるが、急な回避行動に加えて、体勢が整っていないかつたこともあり、地面に倒れ、その整った顔は土まみれになり、タラリと瞳子 $\square$ から頬にかけて紅い液体が流れた。

幸いにも顔から地面に倒れたことが幸をなしたのか足には一切の怪我を負うことは無かった

「グオオオオオオ!!」

竜が咆哮を上げ、ビリビリと空気を揺らす

それだけでベートは自らの負けを察した

圧倒的な格差、どう足掻こうとも全てが無に帰る程の絶望的な程の実力差

「にげて、逃げてベートッ！」

「ッ、けど！お前を見殺しにする訳には」

「いいからッ、はや——」

グチャリという粘着音と共に、目の前で紅が弾けた

「は」

幼馴染がいた場所には竜の巨大な足が存在しており、その竜の足の下からは赤い、紅い水溜りが出来ていた。

それは段々とベートの足元まで伸び——

「あ、ああああ」

「アアアアアアア!!」

ベートはその場から走り出した、ただひたすらに、目の前の怪物から逃げるように、涙



で顔を濡らし、自らの不甲斐なさで顔をグチャグチャにしながら、ただ走った

その姿は負け犬そのものだった

「畜生、チクシヨオオオオ!!」

自分の不甲斐なさを吐き出すように、絶叫するように、そんな言葉を吐き出した

その後、極度の疲労で倒れたベートだったが、偶然通り掛かった行商人に拾われ、ベートは一命を取り留めた

村に戻ると、嘗て自分が愛した村は見る影もなく、ただ焼け焦げた建築物と、血の匂いだけが残っていた

ベートは村の中を散策し、肉塊や骨になってしまった仲間達を土に埋め、簡素な墓を作り、埋葬した

「おれ、冒険者になる」

幼馴染の墓の前でそんな言葉を漏らした

墓の中には幼馴染の残骸は入っておらず、炎に全てを燃やされてしまっていた。

それでも、ベートは言葉を吐き続ける

「冒険者になれば、神からステイタスが与えられるってお前言ってたよな」

「誰かの下に付くなんて御免だが、強くなれるなら、そんなプライド捨ててやる」

「お前達みたいな奴が、もう二度と出てこない為に」

「もう、誰も哭かないように、強くなってやるツ！お前が！お前の死が、無駄じゃなかったって、お前が天国で誇れるようにツ」

「俺が、最強になってやる!!」

「だから！」

「どうか、どうか安らかに眠っていてくれ」

ベートは流れる涙を無視して、その村から去って行く

そんなベートを見送るように、暖かな風がベートを包んだ

数年後、彼はヴィーザル・ファミリアの団長となり、レベル3と二級冒険者への仲間入りを果たしていた

レベル3という領域へ至るまでどれだけの冒険者が無念に散ったことか、万年レベル1で終わる冒険者も少なくない中で、ベートはそれを嘲笑うかのように急スピードで成長していた。

それは才能だけではなく、元来のストイックな性格もあり、強くなる為にただひたむきにダンジョンに潜り、様々な死線を踏破してきた

そんなベートの姿は元々の目付きの鋭さや、整っているが何処か厳つさを感じさせるその風貌から人々から恐れられていた。

だが、ベートの性格の良さを知っているヴィーザル・ファミリアの団員達はとても慕っており、その中にはベートを好く者までいた

ベートに対し、アプローチを掛ける女性陣にベートが靡くことは無かった。

何故なら、ベートには既に好いていた存在がいた

それは、自らのファミリアの副団長だった

彼女はベートがファミリアに入ってから来た時から気に掛けていた人物であり、ベートに対し、ダンジョンで役立つ様々な知恵を教授した。

そんな彼女の施しに、ベートは深く感謝をし、それにつ報いるように急スピードで成長していった

いつの間にか守る存在から隣に立つ存在へ、そして守られる存在へと変わってしまった

た副団長だが、常人ならば嫉妬に駆られそうなその変化にも嫉妬なんて感情をそ少しも感じられない程にベートの成長を誰よりも喜んだ

そんな彼女を好きになるのは最早、当然のことだった

それと同時に、彼女もベートに好意を寄せていた

そんな二人は両思いではあるが付き合っただけではなく、二人でいる時は何処か余所余所しい雰囲気になったりと、とても初々しいその様子にベートを狙っていた女性陣もベートのことを諦め、どうやってくつつけようかと策を練り、男性陣はそんなベートを弄り倒していた

そんな騒がしくも、彩られた毎日にベートは頬を緩ませ、この愛おしい日常を今度こそ守ろうと決心した

そんなベートにある、情報が入った

それは……

「竜の谷付近の平原に竜が確認された、だと……？」

竜の谷とはベートの故郷の近くにある場所らしく、そこから出た竜がベートの故郷を

滅ぼしたのだ

「やつとだ、やつとアイツらの仇を……！」

ベートは自らの主神に事情を話し、了承を貰った後にオラリオから旅立つ準備を進めた

「オラリオ少しの間出ていくんだってね」

「ああ、遂に尻尾を捕まえた。このチャンスを逃す訳にはいかねえ」

「そっか、少し寂しくなるな」

彼女はそんな独り言にも近い小さな声で少し悲しそうにそう漏らした。

彼女には何時でも笑っていてほしいベートにとつてそんな哀しみを無くしたいと思うが、不器用な彼はそんな器用なことが出来る訳もなかった

「……俺は、強くなった」

「……うん」

「だから、信じる。俺の強さを他の誰でもない、お前自身が、俺がお前の強さを信じるよ  
うに」

「……うん、そうだね」

彼女が嬉しそうに笑う姿を横目にベートも頬を緩ませた

その日、ベートは旅立った。必ず生きて帰ってみせると心に誓って

竜との激闘の末に勝利をもぎ取ったベートを迎えたのは悲劇だった

「アイツが、死んだ…？」

ベートは目の前でその言葉を吐いた仲間の言葉を信じることは出来なかった、だが、目の前にいる仲間も満身創痍の怪我を負っており、周りにいる他の仲間も重症を負っていた。

故に、その言葉に確かな信憑性を増させていた

「副団長は、俺たちを逃がす為に……」

「そうか、そうか……」

「すみません団長！俺たちが、もっと、強ければ……」

「……外、出てくる」

ベートは現実から逃げるようにホームから出ていった

そこからベートとヴィーザル・ファミリアとの溝は広がっていった

現実から目を背けるようにダンジョンにソロで潜り、浴びるように酒を飲み、乱闘を起こすベートを団員達は何度も注意するが、それを無視され、また問題を起こす

そんな循環によって団員達はベートに愛想を尽かし、ベートは孤立した

何時ものように酒を飲み、冒険者を煽り、乱闘を起こした時に、それは起こった

「ち、くしよう」

「ハハッ、雑魚は雑魚らしく地面に這いつくばってろ」

ベートは倒れている冒険者の頭を踏みにしりながらそう嘲笑うようにニタニタと笑っている。その姿は正に悪役そのもので、周りの人間はそれを良く思わないが、ベートのその強さを知っているが故に、反抗はしなかった

「そこのお前！何か言ってみろよ、なア!!」

ベートはドカドカと髭を生やしたドワーフに近付き、肩に手を掛けたその瞬間

頬に凄まじい衝撃が走り、ベートはその体を吹き飛ばされる

「犬がキャンキャン騒がしいしわい。酒が不味くなる」

ドワーフの男が振り返ると、周りにいた冒険者達は息を呑んだ

「ガレス、ランドロック」

そこにはロキ・ファミアの幹部であるガレス・ランドロックが確かな覇気を纏わせ、そこに存在していた

「じゃ、じゃあそこにいる金髪小人族と緑髪のエルフはフィン・ディムナとリヴェリア・リヨス・アルーヴ!」

「おや？バれてしまったようだ」

「そのようだな」

フィンは少し楽しそうに笑いながら驚愕を隠せないでいる冒険者達の方へ振り返り、そんなフィンを見てリヴェリアは内心溜め息をついた



「ガレス、ランドロック、ロキ・ファミリアの幹部」

「む？本気ではなかったとはいえ、レベル3なあれを食らってまだ立ち上がるとは、根性はあるようだな」

ガレスの湧き上がる覇気にベートは笑った

「俺と戦えよ」

「お前さんと儂ではかなりレベル差がある。これでは戦いにならんと思うが」

「うるせえよ、そんなもん関係ねエ」

「フィン……」

ガレスがフィンへと目配せするとフィンは静かに頷いた

「フィン……」

リヴェリアが頭痛を訴えるかのように頭を抑えた

「大丈夫さ、少しお灸を添えるだけさ」

フィンはにこやかに笑って、そう返した

「相手してやるわい」

「ハハッ！そうこなくちやなア!!」

二人はほぼ同時に拳を構える

「掛かってこい」

「行くぜええ!!」

案の定、ベートは圧倒的にガレスにステイタスで負けており、戦闘経験でもガレスの方が圧倒的に上な為、ベートはボコボコにされていた。

だが、どれだけ倒れても、どれだけ殴られようともベートは何度も立ち上がった。

これにはリヴェリアが驚いており、フィンとガレスはベートへの評価を一段階上昇させた

「まだだ、まだおわつ、て、ねえ」

血を滲ませながらも立ち上がろうとするベートの目の前に、誰かがしやがみ込んだ

「アンタ、ウチのファミリアに入らん？」

それはロキ・ファミリアの主神であるロキだった

これには流石のフィンも予想していなかったのか、動揺したように口を開いていた  
「は？」

「だあーからあ、ウチのファミリアに来へんか誘つてるねん」

「…… お前のファミリアに入れば、俺は強くなれるか？」

「ああ、ウチのファミリア入れば、お前はもつと強くなれるで」

ロキがそう答えるとベートは笑い声を上げた

「良いぜ、入ってやるよロキ・ファミリアに。だが、馴れ合うつもりはねえ、お前達は俺の糧だ、何時かお前達を喰ら<sup>飼</sup>つて最強へと、成る。だから、精々その力、磨いておけ、よ」  
それだけ言うとベートは気絶した

「期待のルーキーだね？ロキ」

「せやな、フィン。コイツは強くなれる器を持つとる」

そんな言葉を交わす二人にガレスは豪快に笑い、リヴェリアは再度頭を抑えた

「ようこそロキ・ファミリアへ、今日から君も我々の家族<sup>仲間</sup>だベート・ローガ」

その日、ベート・ローガはヴィーザル・ファミリアのベート・ローガからロキ・ファミリアのベート・ローガへと変わった

時は戻り、ベートはその厳つい風貌で道行く人々をモーセの如く割っていると、ある人物を目にした

(あれは、オツタル……何して、なッ!?)

ベートが目にしたのはオツタルの得物である大剣の刀身が無惨にも真つ二つに折られ、それを抱えるオツタルの姿だった。

よく見ればオツタル自身の服も血で汚れており、土埃で汚れていた

「おい」

「む、凶狼か」

気が付けばベートはオツタルに話し掛けていた

「その劍、どうしたんだ」

「ああ、これか。これはある男との戦いの際で折られてしまったものでな」

（ある男だと？モンスターではなく、人だと？有り得んのか、コイツの大劍には貴重な鋳石が使われてる筈だ、それを真つ二つに折るだと……）

「その男は」

「さあ、名前すら知らない。だが、この借りは必ず返す……！」

そう言い、オツタルは口角を僅かに上げ、オラリオ最強の名に相応しい覇気をその身に纏いながら

「そうかよ」

ベートの口から舌打ちが漏れる、その場から早足で去っていった

（くそ、くそ、クソ、クソッ！）

ベートの口から舌打ちが漏れる

（今、俺はなんて感じたッ、勝てないだど？クソがッ!!何時から俺はそんな腑抜けになつた!!戦つてもねえのに、勝てねえだど？巫山戯んじやねえ!!）

オツタルの姿にただ呆然と自分では勝てる訳がないとそんな諦めの感情を一瞬だが、抱いたというその事実がベートこれ以上なく苛立たせた

（俺は、最強になる。なのに、勝てねえなんて弱気吐いてんじやねえよ!!）  
ギリリと自らの奥歯を強く噛み締めた

「クソツ、クソが！」

ベートは止まらない苛立ちを無視するように目的地へと足を早めた

時は現在に戻り、夏油とベートは相対していた

周りには民家一つない空き地であり、戦うにはもってこいの場所だった

（今回に関しては別にあの男ゲトには何の非もねえ、これは俺の醜い嫉妬とイラつきに対する八つ当たりだ）

それでもベートは決闘を止める気はない。何故なら、これはあの男ゲトの為でもあるのだから

（アイズが態々構うつてことは、それなりの才能かなんかがアイツにあるってことだ。だが、才能だけでやっていける程冒険者は甘くねえ。これで、折れるようもんなら、冒険者なんて辞めさせた方がいい）

第一冒険者が与える影響をベートは正しく理解している

例えば、フィンがある料理店を絶賛したのなら次の日には、その料理店には人で溢れかえるだろうし、リヴェリアが一つ批判を述べるだけで、店一つ潰すことだって可能なのだ

それを理解しているが故に、フィンやリヴェリアは迂闊な言葉を発さないのだ。それ程、第一冒険者が与える影響は大きいのだ

だが、アイズはそれを理解していない節がある

ある時、アイズが新人冒険者のとある男の才能を見抜き、褒め称えたことがある。

それにその男は酷く喜び、ダンジョンへと潜り込んだ

一ヶ月後、モンスターの大群に吞まれ、男は帰らぬ者になった

その時のアイズの悲しそうな顔はベートの瞳に強く、焼き付いていた

(もう、あんな顔はさせたくねえんだよ。あんな顔させるなら、俺が罪を被ってやる)  
ベートの横をフィンが通る

「気を付けた方が良い。彼にはナニカがある」

「ハッ、たかが新人に遅れを取る訳ねえだろ」

「そうか」

そうだ、俺がやることは何時だって一つだ

「強者としてのの、その使命を果たすことだ」

ベートは月光に照らされ、そう不敵に笑った



## 月下の凶狼

目の前で不敵に笑うベートを冷めた目で夏油は見つめる

ロキ・ファミリアの団長であるフィンがベートへと何かしら耳打ちをしていたが、そんな事は夏油にとってどうでも良いことだった

正面からその圧倒的な実力で目の前の愚者を叩き潰す。ただ、それを実行するだけが夏油の目的だった

「逃げてても良いんだぜ？」

「黙れ。お前程度の相手に逃げる要素など一つも無い、さっさと構えろ」

「ハッ！その威勢がどこまで続くか楽しみだなア、サンドバック!!」

「……黙れよ」

ベートの言動一つ一つが夏油の気分を大きく下降させる

ベートは自分が圧倒的強者という自負があるのか、口角を吊り上げて余裕の笑みを浮かべ、それに反比例するように夏油は表情を消し、額に青筋を盛り上がらせる

ベートはまるで獣のように体勢を低くし戦闘態勢へと入るが、夏油は堂々と構えすら必要無いとばかりに棒立ちだった

「おい、それがお前の構えか」

「そうだが」

「ハハッ！こりや傑作だ、なア！」

そんな言葉と同時に、ベートは自慢の足での蹴りを夏油の側頭部へと放つ。

ベートはレベル5である第一級冒険者であるため、そこいらに蔓延る一般人など容易に殺すことが可能だった。故に、加減されたその蹴りは、本来のベートの速度、威力、どれを取つても大きく下回っているが、レベル1の冒険者相手にとつては、目視すら出来ない程の速度であり、その威力も充分すぎるものだった

レ・ベ・ル・1・な・ら・ば

「!？」

ベートの蹴りは夏油の手によって受け止められ、ベートは驚愕に目を大きく見開かせ、周囲にいたロキ・ファミリアの幹部クラスの者達もこの結果に動揺を隠せずにざわめき、フィンには自分の勘が正しかったことを悟る

「やはり、間違いでは無かったみたいだね」

「フィン、アイツのことを知っていたのか？」

「いや、全く分からない。だけど親指が疼いた」

「!!まさか、奴は私達に匹敵する程の実力者なのか……!」  
「かもしれないね」

フィンは夏油をじっくりと観察する

佇まいや構えそのものはレベル1の冒険者そのものであり、その身から放たれている魔力も、同様にレベル1の冒険者の正に平均値そのものだった。

だが、少し違和感があるとすれば

(あまりにも冷静すぎる。魔力が、まるで意図的に行っているかのように、満遍なく全身へと。レベル1ならば戦闘中にそんなことは有り得ない)

「本当に只者では無いらしい」

余裕そうにニツコリとフィンは笑うが、その瞳は夏油という男を見極めんと鋭い視線を放っていた

「デメエ……!」

「いや、これが第一級冒険者の攻撃か。いやはや、速度といい、威力といい、本当に驚いたよ」

本来ならば、その言葉は第一級冒険者であるベートに対する賞賛の言葉だが、この状況においては皮肉の効いた言葉でしか無かった。

それを理解したベートはギリリと奥歯を噛み砕かんとばかりに噛み締め、青筋を浮かばせる

「ブツ潰してやるよ!!」

ベートの地雷を見事踏み抜いたそのあまりにも効きすぎた皮肉に、ベートの耳が弓を引き絞った如く逆立ち、瞳孔は残忍さが垣間見える狩人を彷彿とさせるような鋭く、獯猛な目付きへと変化する。

雰囲気も先程のような手を抜いた雰囲気から、ダンジョンへと潜っている最中のような猛々しい気配を纏っていた。それは、見る者全てに牙を剥き、力無き者ならそれだけで気絶してしまうような迫力を孕んでいた

だが、夏油にとってそれは牙になり得ない

「フツ、精々やってみせろよ犬」

「——ッ！調子に乗るんじゃないエ!!!」

ベートがまるで弾き出されたように夏油へと蹴りを放つ

その蹴りは先程のそれよりも威力も、速度も、殺意も、全てにおいて桁違いだった。

それは最早、人智の域を超え、音の世界にも届きうる程の疾速。それが、夏油へと明確な殺意を孕み、放たれた

(先程よりも疾い。故に、その威力も先程よりも桁違いに上昇している、私に害を与える

程に。だが、呪力で防御を固めればダメージは無に等しい)

だが、夏油は後手に回る気など元より無い

夏油の頭にあるのは目の前の凶狼ゴキを甚振り、徹底的辱め、そのビルのように高いプライドを完膚無きまでへし折り、冒険者として再起不能に陥らせること

(なら、話は簡単だ。得意分野で真正面から絶望的な程までに力の差を見せつけ、潰す)

夏油の側頭部に、月光に照らされ鈍く輝きを放つベートの白銀の一撃が突き刺さろうとしたその瞬間に、夏油から火花が弾けた

「迅雷」

その眩きの瞬間、夏油がベートの目の前から消失し、その蹴りは虚空を切り裂くのみ  
に留められる

「ッ！何処に「背後」ッ！」

耳元で囁かれる夏油の声に、ベートは腕を鞭のようにしならせ、迎撃しようとするが、先程のようにその腕は虚空を切った。

ベートの瞳に夏油は存在せず、映るのは弾ける閃光と、夏油の残影のみだった

「ッ！」

(速すぎて、目で追え切れないってのか!?)

ベートは目の前の無情な現実、まるで幻でも見ているかのような錯覚に陥るが、夏油の動きに合わせて吹く余風の熱が嫌という程に、現実絶望を与える

「巫山戯んな： 巫山戯んじゃ——「隙だらけだね」！」

影も踏めずにいた夏油が突如として、目の前に現れたことにベートは驚きから大きく目を見開き、動揺を隠せずにはいたが、ここは流石の第一級冒険者と言うべきか、自らの限界をも超え、反射的に夏油へと膝蹴りを放つ。

その一撃は例え、アイズのような第一級冒険者であっても躲すことはおろか、防ぐことすら不可能な程速く、フィンなどといった第一級冒険者の中でも、ベテランと呼ぶべき人物ですら防御することで精一杯であった。

だが、夏油はそれを嘲笑うかのよう超越する

自らに向かって放たれたベートの膝蹴りに対して、夏油が行ったのは肘打ちによる迎撃……のみに終わらず、それとほぼ同時に刈足をし、ベートの体勢を完全に崩した

「なッ!?!」

「まずは一発」

夏油の拳が深く、鋭く、ベートの鳩尾を穿いた

「——!」

声にならない、叫びが上がった

ベートの口から血が吐き出され、地面を濡らしていることが、夏油のその一撃が如何に重いのかが伺えた

「どういふことや、あれ……」

ロキの口から、自然とそう零れていた

そうなるのも当然だろう。何故なら、ベートは二つ名持ち且つ冒険者の中でも類稀なる才能と血が滲む程の努力を積み立てた者のみが辿り着ける領域、第一級冒険者なのに對し、夏油は二つ名などあらず、何よりオラリオに來たばかりの新参者、無名で冒険者の中でも底辺の下級冒険者が夏油だった。

下級冒険者など本来ならば、ベートの先制の一撃に為す術もなく沈むだけだが、夏油はそれを余裕で防ぎ、それだけでも留まらずにロキ達の常識を覆すようにベートに一撃を与えてみせた。

ロキは目の前の男の有り得ざる異常性を遅れながらも理解し、その主たるヘステイアへと視線を向ける

「チビ、アイツはなんや」

「?夏油君は夏油君だよ」

ヘステイアがそう答えると、ロキは溜め息を着く

「言い方変えるわ、アイツのレベル何や」

「それは…… ステータスの事に関しては、探らないのが、暗黙の了解だろ」

「別にレベル位構わへんやろ。それはスキルや魔法を看破されたりせえへん為に作られたもんや。レベル位なら別に知られても問題無いやろ？ ホンマにレベル1なら」

「ツ……！」

ヘスティアの反応に、ロキは夏油がレベル1では無いことを確信する

「他言はせえへん。アイツは一体レベル何なんや」

ロキの普段のおちゃらけた言動からは掛け離れたその真剣な目と言葉に、ヘスティアはこれ以上隠し通す事が出来ないことも相まって、真実を話すことにした

「本当に他言しないんだね？」

「勿論や。もし、ウチのファミリアの誰か一人でも洩らしたなら、お前の言うこと何でも聞いたる」

「…… 夏油君のレベルは6だよ」

その答えに、フィン以外のロキファミリアの面子が驚愕し、口を大きく開け、驚きに目を見開いた

「れ、レベル6、やと!?!嘘ついてないやろな!」

「嘘なんてつくもんか! 本当のことだよ!!」



「マジか：： 只者ではないと思つとつたけど、まさかレベル6とはな：：」

ロキがそう呟くと、ヘステイアは少し気まずそうにまた口を開く

「いや、多分だけどそれにも誤りがあると思う」

「?どうゆうことや」

ヘステイアが夏油の方へと視線を向けながら、言葉が続ける

「夏油君は、レベル7にランクアップ出来るかもしれない。オツタル君との戦い、そして勝利を経て」

「!まさか、噂は本当だったちゅーことか!?!」

これにはフィンも動揺し、夏油へと視線を向ける

(オツタルを倒しただど!?!君は一体何者だと言うんだ)

フィンは目の前で余裕綽々と歩いているアンノウ<sup>夏</sup>ウン<sup>油</sup>という存在を看破せんと前の

めり込む勢いで、夏油へと集中し、思考を開始した

「イレギ<sup>異</sup>ユラ<sup>分</sup>子：： アイツは一体、何しに此処に来たんや」

(都市外の神の仕業か? いや、それだと恩恵が最初から刻まれてる筈や：： それに、外でそんなにレベルが上がるとは考えにくい。アイツの狙いは、オラリオの崩壊? いや、一人で実行は限りなく不可能。なら複数人で：： いや、そんなことすれば確実に目立つ、それに神相手なら直ぐにバレてお終いや。じゃあ、恩恵無しで：： ? いや、それこ

そ無理な話やな)

「これは、直接聞くしかないんやな」

ロキはジツと戦いの行く末を見つめた

「ツガー・ハア、ハア」

ベートは地面に転がり、土埃で汚れた装備も気にすることもなく、ただ痛みを堪えるように息を吐く

そんなベートに夏油は見せつけるように歩いてベートへと徐々に近づいていく。

夏油の顔は残虐な笑みを顔に浮かばせており、体からは隠しようも無い程の重圧と気配を纏っており、その姿は正に弱者を蹂躪する強者の姿であった

「私はサンドバックじゃなかったのかい……このザマじゃ、どっちがサンドバックか分かったもんじやない。一撃でそれとは随分と脆い」

「ツ……うる、せえよ。調子に、乗るんじや、ねえ!!俺は第一級冒険者だ!こんな、攻撃、余裕なんだよ!!クソがアアア!!」

ベートは痛みで足を震わせながらも立ち上がり、吼えてみせる

その姿は土埃で汚れ、例え足がガタガタと震わせているとしても、確かにそこには第一級冒険者としての誇りを背に背負っていた

だが、夏油にとつてはベートの第一級冒険者の誇りなどどうでもいいものだった  
「吠えるな、耳障りだ」

夏油の蹴りがベートの脇腹を確かに捉え、ミシリと何かが軋む音がベートの鼓膜を揺らした。その瞬間、ベート体は吹き飛ばされ、勢いよく壁へと叩きつけられる。

「ガッ！」

ベートは大量の血を吐き出し、顔から地面へと倒れる

ベートの血は地面を紅く彩った後に、紅い池を作った

「第一級冒険者？だから、どうした。この結末はもう既に決まっていたことだ。そう、お前が私に！よりもにもよってその忌々しい名でこの私を呼んだその瞬間から！」

夏油の抑えつけられていた呪力が解放され、夏油という存在が世界に、オラリオに刻み付ける

「死ねよ」

夏油の足が振り上げられ、ベートの頭を踏み潰さんと呪力を込めた

その威力は、鉄をも簡単に踏み砕き、第二級冒険者であつても即死は逃れられない。

負傷しているベートではこの一撃を防ぐことは不可能であり、運が良ければ重症。悪ければ死ぬ可能性すらある

夏油の無慈悲な一撃が、ベートへと振り下ろされた

「風よ」

ガキン！夏油の足を何かが遮る

夏油は目の前に現れた存在へと舌打ちを漏らす

「劍姫」

「もう、決着は着いてます」

夏油が飛び退き、体勢を立て直す

「そこを退け」

「嫌、です」

「……ならば、強行突破するま——」

夏油は迫る来る槍の穂を感じし、呪力で拳を強化して迎撃する

ぶつかり合う拳と穂の衝撃に風が吹く

夏油が拳を払うと槍の持ち主は体勢を崩さないようにその場から飛躍し、地面へと着地する

「勇者」  
「フレイバー」

夏油は目の前の小人族を睨み付けた

「もし、このまま続けるといふのならば——」

夏油の周囲に人影が降り立った

ロキ・ファミリア  
「僕達を倒してからにするといふ」

そう言い、フィンが笑った。だが、その目は笑っておらず、レベル6として、ロキ・ファ  
ミリアの団長として申し分のない重圧を放っていた

雲から顔を覗かせた月の光が、両者を照らした

「邪魔をするというのなら、お前達も潰すまでだ」

「さて、やれるのかな？君に」

夏油の呪力が炎のように渦巻き、フィンが月光に照らされ、光を灯した

## 月狼

「複数人であれば、私に勝てる。お前は、お前達はそう思っているのか」

夏油は禍々しい重圧を纏いながら、そう呟くように言葉を吐いた

「さあ、どうだろうね？」

フィンはおちやらかしたように、そう夏油を煽るように態と首を傾げてみせた

「だけど、例えば君に個で負けるとしても、僕達はロキ・ファミリア家族だ。群としてなら、僕達は勝つてみせるよ」

フィンはそう信じて疑わないように、そう答えた

実際、フィン達は個としては勝てない相手であろうとも、ファミリアとしてその壁をいくつも打ち破ってきた経験が幾つも存在し、その数多の経験の故に、個では勝てない可能性のある夏油に対し、ファミリアとして立ち向かった。

自分達の勝利という結果を疑わずに。それが夏油の苛立ちを更に助長させ、夏油から放たれる重圧が更に増長し、ロキ・ファミリアの幹部達へと明確な敵意を孕み、のしか

かるが、彼等が退くことはない

「実際、この人数差では幾ら君といえどもキツいんじゃないかな？」

そのフィンの言葉に、夏油は啞う

「テメエ！何が可笑しいんだ！」

テイオネが夏油に噛み付くように、そう怒鳴る

「どうやら、君達は無知のようだ」

「無知だと？」

フィンが顔を顰める

「君達は極点という存在を知らない。だから、そんな腑抜けた戯言を吐ける。心底同情するよ、その愚かさと同様に」

「……君が言う極点とは、一体何のことだい？」

フィンが首を傾げる

「私の知る極点とはあらゆる困難、絶望、不可能ら、運命すらも打破する存在」



「それが君だと？」

「まさか、私などまだそれには程遠い。だが、私はそれを知覚している、見ている。焦がれている、夢想する」

「故に、君達如きに負けている暇なんて無いんだよ」

夏油がにっこりと笑った

「……最後の勧告だ。今すぐに、ここから立ち去ってくれないか」

「退くのはお前達だ、ロキ・ファミリア」

フィンが手をスツと頭上へと上げると、周りの幹部達は各々の武器を握った。

それに合わせて、夏油も游雲を構える

「やれ」

その瞬間、ティオネが待つてましたと言わんばかりに飛び出しては夏油へとナイフを振るい、その逆方向にアイズが回り込み、その剣を同時に振るった。

敵へと回避を許さない二人の高速度の挟み撃ちが、夏油へと迫るが、游雲を使ってそれを同時に捌く。それにティオネは夏油が油断ならない敵だと舌打ちを漏らし、アイズはその淀みのない動作に、心の中で感嘆の言葉を漏らした

だが、それだけで彼等の連携が終わる訳もなく、正面からフィンが夏油を穿たんと、音速の槍の一撃を放つ

「ハッ！」

夏油の腹へと放たれる一撃が当たる直前、夏油の体から閃光が弾け、フィンの背後へと回り込み、游雲の一撃が脳天へと放たれる。

フィンが背後へと目を向けるが既に遅く、もう防御は間に合わず、その一撃を待つのみだった

だが、それはフィン一人の場合のみであった

ガキン！と金属同士がぶつかり合うような音と共に、夏油の一撃がフィンの脳天へと直撃する直前からまるで壁に阻まれたかのように進まない。

それを見逃す程に第一級冒険者は甘くなく、フィンが背後へと腕を振り、夏油の顔へと槍を放つがそれを胴体を反らすことによって躲し、その勢いを利用して距離を置く

「チツ、魔法か」

「助かったよ、リヴェリア」

「気を付けろ、奴の速さは尋常では無い。一人で対処するのは困難に近い、故に私が援護

する。お前達は連携して奴を倒せ」

「了解」

【集え、大地の息吹——我が名はアルーヴ】

リヴェリアの魔法の詠唱が終わると同時に、フィン達は同時に動き出した。フィンはその体躯の小ささを生かした夏油を翻弄する動き、アイズは自らの風を推進力へと変化させた力強い速さで夏油へと接敵する。

夏油は游雲を構え、二人を迎撃しようとするが、自らの真上から気配を察知し、バツクステップで回避行動を取る

「私も交せてよっ！」

可憐な声と天真爛漫な笑顔とは裏腹に、第一級冒険者の力強い拳が地面へと突き刺さり、地震でも起きたかのような罅が地面へと広がる。グラリと傾く地面に夏油は顔を少し歪め、フィンは自らの仲間のその一撃に思はず苦笑を漏らした

「間違っても街に被害を出さないように調整を頼むよティオネ」

「分かっているって！」

ティオネと呼ばれたアマゾネスの少女がそう返答し、夏油へと向き直り、闘志を滾らせた。夏油はもう一人の第一級冒険者の登場に面倒だなと感想を漏らしたが、決して負けることなどは考えていなかった。

チラリと周りを見ると髭を生やし、好戦的な笑みを浮かべるドワーフと少し気の弱そうなエルフが杖を握り此方を見ていた。それに夏油は溜め息を吐いた

「しょうがない、出すか」

そんな夏油の呟きと共に、異形が解き放たれ、リヴェリアともう一人のエルフへと襲い掛かった。

突然の異形の登場にフィン達は動揺を隠せないが、流星はロキ・ファミリアの団長と  
言うべきか、直ぐ様に正気へと戻り、指示を出す

「テイオネはレフィーヤを守れ！リヴェリアは一人でも大丈夫そうかい？」  
「問題無い。こういう手には慣れてる」

それと同時に、リヴェリアが杖で呪霊を叩いた。だが、レベル6のリヴェリアの力を  
持つてしても、呪霊は消えることは無かった。それにリヴェリアは厄介だと言葉を漏  
らし、夏油は野蛮だなど心の中で呟いた。

「テイマーか。その身体能力でそれとは驚かされるよ」

「たかだか調教師モドキと同一視するな」

夏油とフィンの互いの得物がぶつかり合い火花を散らした。その背後にアイズがデ  
スペレードを、夏油の右方からテイオナが拳を振るった。

その瞬間、夏油の体から閃光が弾け、リヴェリアの魔法を突き破り、テイオネの脇腹

へと游雲を振るい、その体を壁へと吹っ飛ばした

「テメエ！私の妹に何——」

「ティオネ！下だッ！」

顔を憤怒に染めたティオネにフィンがそう叫ぶが、頭に血が昇っていたティオネでは何時ものように直ぐ様行動に移すことは出来ず、隙を晒した。

ティオネが立っている地面が崩れ、ティオネの視界がグラリと傾いた

「なっ!？」

「二人目」

夏油の電撃がティオネへと迫る

直撃する寸前に、ティオネと電撃との間に光の壁が突如として姿を現し、その電撃を防いだ。

夏油はそれに舌打ちを漏らし、ティオネの背後へと身を隠していたレフィーヤが詠唱を終えたのか風の刃を造り出し、夏油へと凄まじい勢いで迫る。だが、それを夏油は蠅を叩き落とすが如く、手で払い落とした

「ッ！」

(私よりも強いのは分かった。けど、まさか手で払い落とされるなんて……私がそん

な相手役に立てるの?)

レフィーヤは夏油の強さに恐怖を抱き、自らが役に立てるのかと自信を無くすが、ポンとテイオネが肩に手を置いた

「アイツは強い。けど、私達ロキ・ファミリアなら勝てる。アンタもロキ・ファミリアの一員。なら、私達の役に立ってみせなさい」

「ツ!はいい!」

「アンタもそろそろ起きて来なさい!こんな簡単にやられる女じゃないでしょう!アンタは!!」

そう言うのと瓦礫が吹き飛び、少し土埃で汚れたテイオナが姿を現した。口元は血で汚れ、地面には血を吐いたであろう痕が存在していた

「いたたた、やっぱり強いね君!けど、私も第一級冒険者なんだからそう簡単にやられる訳にはいかないよおー!」

テイオナのそのタフさに夏油は面倒だなどと呟き、追加の呪霊を呼び出す。呼び出された呪霊は口から黒煙を吐き出す。フィン達は辺りに立ち込める煙を毒かと警戒するが、夏油が自分の主神すら巻き込めかねない策を取る訳が無いと判断し、口を抑えていた手を外した

「……この煙は一体」

「私の風でも吹き飛ばせない」

「ただの煙という訳では無さそうだな」

フィンは夏油の出方を伺っていると、周辺が人為的に煙が濃くなり、魔力に似た別な力を感じた。

その瞬間、フィンの片手が本来手に触れる事の出来ない煙によって拘束された。それをフィンは直ぐ様に槍で煙を切り裂き、拘束を解く

「これは……煙を操作しているのか……？」

「ご名答。この呪霊は煙を吐き出し、その吐き出された煙を固形化、操作する事が出来る。だが、殺傷力は特別出せる訳では無いがね」

そう言うと、夏油の周りにある煙が固形化され、鞭のような形へと変化する。それにフィンはいち早く察知し、指示を出す

「回避！」

その声にアイズやティオナ達は上へと跳躍する

その瞬間に、煙によって作られた鞭は振り払われ、風を巻き起こした。鞭はその長さから周りに存在する遮蔽物へと激突するが、その悉くを粉碎した。

それにフィンは厄介だと言葉を零した

「殺傷力が無いなんてよく言えたね」

「まあ、強化縛りをしたからね」

夏油はニコリと意地の悪い笑みを浮かべた

「この煙は様々な形に変化する！だが、その直前に気配を察知することは出来る！全員、意識を研ぎ澄ませればどうということとは無い！恐れすぎるな！僕達ならいける！」

「うん」

「了解だ」

「は、はい！」

「はいっ！」

「オツケー！」

「了解じゃ」

各々がフィンの助言を胸に、闘志を滾らせた

「追加するか」

だが、夏油はフィンの鼓舞を押し潰すように追加の呪霊を呼び出した

それはオツタルとの戦いの際に呼び出した、地面を操る呪霊とそして、もう一体は夏油が度々使用している準一級呪霊であった。



フィン達はその追加の呪霊に驚きを隠せないが、夏油はそんなフィン達を待つことなく、呪霊に指示を出す

すると、地面に切り目のようなものが走り、地面が崩壊した。だが、地面が崩壊したにも関わらずにもその崩壊によって発せられる音は存在せず、それに気付いたフィンが周りに異変を伝えようとするが、口はパクパクと音を発さずに動くのみだった

(音を消された!?不味い……このままでは、連携が取れなく——)

フィンの背後から煙によって作られた数本の槍が穂をフィンへと向け、発射された。それをフィンは槍で弾いて直撃をすることを防ぐが、地面が崩壊した際に跳躍したことによって隙を晒す。

それを夏油が見逃す訳も無く、フィンへと接敵する

テイオネは魔法を発動し、夏油の動きを止めようとするが音が無くなったこの空間では詠唱が必要とする強力な魔法は発動することが出来なかった。

これに、テイオネは舌打ちを洩らし、レフィーヤは顔を青くし、リヴェリアはそう来たかと歯を噛み締めた

フィンは夏油が迎撃するが、体勢の悪さや、連携が取れないという心的な焦りから直

ぐ様に迎撃は突破され、游雲が腹部へと吸い込まれるように放たれた。

だが、游雲の一撃をアイズのデスペレードが下から弾くことによつて防ぎ、夏油の上半体が少しばかり上がり、今度は夏油が隙を晒す。それをアイズが見逃す訳が無く、追撃をしようとするがアイズの目の前にいる夏油はニヤリと厭らしい笑みを浮かべていた

「！」

グンとアイズの足が引つ張られる。アイズは自らの足を見るとそこには煙によつて作られた、細い糸のような物が足に巻きついており、自らの足を引つ張っていた。

自らが嵌められたと察すると同時に夏油の蹴りがアイズへと放たれる

「ッー」

それをアイズは反射的にデスペレードで防御するが、地面に叩き落とされる。土埃が舞い、アイズが地面へと沈む。それにレフィーヤとテイオナが心配からかアイズへと近寄ろうとするが、夏油はフィンも巻き込みその三人へと電撃を放つ

テイオナはいち早くそれを察知し、回避行動を取り、レフィーヤもそれを躲そうとするが、それよりも速くレフィーヤへと直撃し、レフィーヤはその場に崩れ落ちた

フィンに至近距離且つ、空中ということもあり、そのまま電撃へと直撃し、夏油の蹴りで地面へと沈んだ

テイオナがレフイーヤの方へと目を向け、口をパクパクと音は出ないがレフイーヤへと心配の声を叫ぶが、その明確な隙を夏油が見逃す訳も無く、再度テイオナを壁へと吹き飛ばした

地面へと着地した夏油を待つていたのかガレスが猪のように突撃する。その威力は彼が地を踏み締める度に罅割れる地面がその威力を物語っており、これをまとも喰らえば夏油であろうとも大ダメージは免れないだろう。

だからといって、下手な迎撃しようともそれを正面から突破されるのがオチだろうと夏油は考察し、呪霊へと指示を出して、自らの足元の地面を押し出させ、発射台の要領で空中へと飛んだ。これにはガレスというベテラン冒険者であっても想定外であり、夏油のいる空中へと視線を向け、驚きを隠せないでいた

そんなガレスへと夏油は凝縮させた電撃をまるでビームのように放った。それはガレスへと直撃するが、ガレスは持ち前の耐久力で堪える。だが、それでも痺れはあるのだろう、顔を歪めて、手足はプルプルと震えており、なんとも動きにくそうな様子であった

(あれでは、もう万全なパフォーマンスは発揮出来ないだろう。一旦、放置で良いか)

夏油はリヴェリアの方を見ると彼女は複数の呪霊に囲まれており、それに対応するのに精一杯であった。普段の彼女であれば振り切る事も出来なくはないだろうが、

呪力で出来た煙ということから慣れていない為、彼女のパフォーマンスはこの慣れない環境に低下し、それに加えて煙自身も重量を持つように手を加えている為、今の彼女では呪霊を振り切ることが出来なかった。

だからといって呪霊を倒そうとも、まともな魔法が使用出来ず、魔力と呪力とは似た力ながらも根本的には全く違う力なので呪霊を倒そうにもオツタルやガレスのような圧倒的な力がある訳では無いリヴェリアには無理な話であった

フィンが倒れたことよって怒り狂ったティオネが夏油へと襲い掛かる。どれだけ、怒り狂おうとも流石は第一級冒険者と言うべきか、そのナイフ捌きは鈍るところか、怒りよって更に鋭くなっていた。

しかし、夏油はそのナイフによる連撃を全て体術のみで防ぎ切り、ティオネの腹部へと拳をめり込ませた。だが、それを喰らっても尚、ティオネは倒れず、それどころか腹にめり込む夏油の腕を掴み、捕まえたと言わんばかりに苛烈な笑みを浮かべた。それと同時にガレスとアイズが夏油を挟み込むように攻撃を繰り出す

(もう動けるようになるとは、流石に驚いた。けれどこの程度の拘束で私を倒すことが

出来るとでも思っているのか?)

夏油はガレスの耐久力の高さに驚きつつも、動揺をすることは無かった。

自らの腕を掴むティオネの周りの煙を固形化し、ティオネに手を離すという選択を奪う。それと同時に、夏油は呪力を腕へと集中させ、筋力を一時的に強化することによってティオネをまるで鞭を扱うように振るい、ガレスとティオネを同時に壁へと叩き付けた。それにアイズは夏油の対応力の高さに驚かされるが、動きを止めることはなく、夏油へと剣を振るった

だが、アイズの剣を振るう手に銀色の光が突き刺さった

「！」

それはティオネのナイフであり、夏油がそれを並行且つ一瞬の間で緻密に操作をし、最高のタイミングでアイズのその白く美しい手に突き刺した。

これには流石に予想だにしていなかったのか、痛みで一瞬だけ動きが止まるが、その一瞬で夏油は充分であった

夏油の体から閃光が弾け、瞬く間にアイズの背後へと移動する

(速すぎて目ですら追えな——)

最早、その攻撃を阻む者は存在しなかった。いや、正確には一人いるが、夏油の頭がそれを出来る程のパフォーマンスを發揮出来ないかと判断したが故の考えだった。故に夏油は何も戸惑うことなく游雲を振るつた

だが、今宵は雲一つない満月。その者がそれを発動するにはこの上ない環境であった。アイズの横腹に游雲が直撃する寸前に、夏油へと銀色の輝きを放つ者が夏油へと激突した

「ッー」

（お前はッー！何だその姿は——

一瞬遅れて、夏油がそれに気付き、回避行動を取ろうとするがそれよりも速く夏油の脇腹を穿つように蹴りが炸裂した。

そのことにより、夏油はその体躯を蹴り飛ばされるが咄嗟に呪霊を自らの背後に呼び出し、クッション代わりにする。だが、ダメージは確実に夏油の体に響き、口から少ない量の血が吐き出されるがそれを気にすることなく、夏油は男を睨み付けた

夏油が先程まで立っていた場所には一人の男が立っていた

その男の名は――

「ベ<sup>凶</sup>ート・ロー<sup>狼</sup>ガ……！」

誇り高き狼が、本来の姿を取り戻し、そこに存在していた

## 決着

「ベート・ローガ……！」

夏油の鋭い視線の先には、月光を存分に浴び、本来の姿を取り戻した気高い狼がそこに立っていた。その姿にロキ・ファミア一同は動揺し、主神であるロキですら珍しく目を開いて驚いていた。

ベートは背後にいるアイズに一瞬だけ目を向け、退けるようにと手を振る

「これは俺とアイツの戦いだ。他の奴等は手を出すんじゃないやねエ」

「……でも、このままじゃ」

「でもじゃねえ。俺が始めたことだ、俺だけで終わらせるのが筋だろうが」

ベートのその言葉にアイズは黙り込むが、団長であるフィンには自殺とも言えるベートのその無謀な行動を咎める

「今の君では彼には勝てない。単独で挑むのは極めて危険な——」「分かってる、アイツが俺よりも強いなんてことわよ。けど、此処で逃げたら冒険者じゃねエ」

ベートのその言葉と決意の籠ったその瞳にフィンは、ロキ・ファミアの面々は息を



呑み、察した。ベートが己という殻を突き破らんとしていることを

殻を破る。即ち——レベルアップ

ベートは今正に、己を越えようとしている

「……分かった」

「フィン!？」

リヴェリアがフィンの判断に異議を唱えようとするが、フィンの視線により押し黙らせられる

「…… 本当に危険だと僕が判断した場合は止めに入る。これが妥協点だ」

「…… ああ、それで構わねえよ」

ベートがそうぶつきらぼうに言い放ち、フィンへと背を向ける

「やるからには全力で勝ちをもぎ取ってこい、これは団長命令だ」

背後からのフィンのその言葉にベートは笑った

「言われなくても、やってやるよ」

ベートは首の骨をコキリと鳴らし、夏油と向き直った。夏油は周りにいる呪霊達を仕舞い、ベートとの一対一という状況を作り出す

「おや、大丈夫かい？ 飼い主達と一緒に戦わなくて、自分の尻拭いすら出来ない負け犬」  
夏油はその優秀な頭を回転させ、ベートを煽るのに最適な言葉を選び抜く。そうすればベートのプライドが大いに刺激され、激昂することを知って

「返す言葉もねえよ」

だから、その返しに夏油は大いに困惑した

ベートはプライドが高く、自分を侮辱するような言葉を吐かれればその者を叩きのめす程に短気で喧嘩早い

そんな男が、先程の夏油の言葉を受け入れるなんてことはこの場にいる全員が予想だにしていなかった

「今の俺は負け犬だ。勝手に思い上がって、見たくねえもん現実から逃げて、周りの奴等に迷惑を掛けて、自分で自分の尻拭いも出来ねえ。そんなみつともねえ存在だ」

「けどよ、もし俺がここでお前が言う通りに逃げちまったら俺は本当の負け犬になっちゃう！ 逃げちまうこのクソみてえな現実から!! 無駄になっちゃう！ アイツ等の思いが!!」

「そんなこと俺は赦さねえ！ そんな腑抜けた自分を想像するだけで反吐が出そうだ!! 俺は前に進み続ける！ それが俺が俺たる証明だからだ!!」

「だから！俺は、お前に立ち向かう！全てを賭けてでも！！例え、それが自らの命だとしてもだツ！！」

ベートのその叫びに、夏油は少し目を瞑った後に開眼した。その瞬間、先程の夏油の重苦しい雰囲気ガラリと変わり、研ぎ澄まされた刀のような物へと

「そうか、ならば掛かってくるという。凶狼、いやベート・ローガ」

その言葉にベートは口角を裂かんばかりに笑った

「やってやるよ！夏油傑ウウウ！！」

二人は同時に駆け出した

（真正面だとステイタスの差で押し切られる！なら、俺のやれることは速さで勝負するしかねえ！）

「リアアアアア！！」

ベートが銀色の光と化し、夏油を振り切らんと疾走する。その勢いは突風を巻き起こし、轟音を鳴らした。

「リヴェリア！追加の魔法を頼む！」

「ああ、全く人使いが荒い！！」

「舞い踊れ大氣の精よ、光の主よ。森の守り手——

スピードに乗ったベートの拳が夏油の頬目掛けて放たれるが、夏油もそれを拳で応戦する。この程度は捌かれると察していたベートは、ラッシュを繰り出す。

だが、それも全て夏油に対応され、夏油が反撃の横蹴りを放つ。それをベートはギリギリで反応し、右手の籠手で防御をする。体は吹き飛ばされなかつたが、土煙と共に両足と地面の擦れる音が大きく響いた

我等を囲え大いなる森光の障壁となつて——

「ラアアアア!!」

ベートが地面を深く踏み込み、先程よりも速いスピードで夏油へと接敵する。それは今までよりも一段階速く、それはレベル5の域をとうに超えていた。

だが、それでも夏油には届かない。

光を纏った夏油は、攻撃を仕掛けるベートの背後へと立ち、ベートの無防備な背中へと拳を振るう。ヒヤリとベートの背筋に悪寒が走り、ベートのこれまでの戦いで築いた勘が夏油の攻撃を察知する。ベートは咄嗟にバク転をすることによって攻撃を躲す

我等を守れ

「夏油!!」

着地した瞬間にベートは夏油へと走り出し、自慢の蹴りを放ち、夏油は何時の間にか取り出したのか、特級呪具である游雲へと呪力を纏わせる。游雲は蒼色の呪力を纏い、ベートへと振るわれる

我が名は——アルーヴ」

リヴェリアが詠唱を唱え終わると同時に、二人の攻撃はぶつかり合った

その瞬間に、今までのものとは比べにもならないほどの衝撃が走り、金属音と共に激しい突風を巻き起こし、地面の一部にヒビ割れ、風で浮き上がらせられる

「ッ！」

(なんて、衝撃だ！ギリギリ間に合ったが、もしリヴェリアの詠唱が間に合わなければ……)

フィンとは想像しただけでゾツと背筋に冷たいものが走った

一級冒険者であるフィン達ですら驚く程の強風を恩恵を持たない住民やレベルの低い冒険者からすれば脅威でしかないの当たり前のことだった。

フィンはりヴェリアに深く感謝し、それを生み出した夏油とベートに驚愕する

(やはり、彼の戦闘能力は計り知れない。だが、ベートがアレを使用したとしても余りにも高すぎる。一体どういう事だ……)

「フツ！」

夏油が游雲を振り切るが、ベートは空中でフワリと一回転することで勢いを殺し、何事もなく着地をする。

だが、それを先読みしていた夏油はベートの着地をした瞬間を狙う。ベートもそのことを瞬時に察知し、体勢を変え、近くに形だけを保っていた木を踏み台として夏油へと蹴りを放つ。

それを夏油は游雲で難なくと瞬時に対応するが、ベートの蹴りの威力が思いの外強かったのか、グラリと体の重心が僅かに後ろへと傾く

それを見逃す程、ベートは甘くなかった

「ガラ空きだア!!」

ベートの蹴りが夏油の脇腹を捉え――

「それはどうかかな?」

るより前に夏油がベートの足をガシリと掴み、傾いた重心を利用し、後退した右足で地面へと思いつき踏み込み、背負い投げの要領でベートの攻撃を受け流すのと同時にベートを地面へと叩きつけるカウンターを放つ

(コイツツ!ワザと重心をズラしやがった!!俺の攻撃を誘う為に!!)

ドオン!という轟音と共に、ベートは地面へと叩き付けられ、ベートの口からは空気と共に血が吐き出される

「ア」

(まず、い。体勢、を整、え――)

「隙ありつてね」

そんな夏油の声と共に、夏油の蹴りがベートの腹を穿つ。ミシミシとベートの骨が悲鳴を上げ、ゴロゴロと地面を転がされた後にその勢いのまま壁へと叩き付けられ、ズルりと瓦礫と共に崩れ落ちた。

これにはベートの要望で様子を見ていたロキ・ファミリアの幹部等や主神であるロキ、ヘステイアも止めに入ろうとする

「これ以上は、流石にアカンちゃうか」

ロキの口からそんな言葉が漏れる

「フィン！これ以上はベート死んじやうよ！」

「団長！テイオナの言う通りです！止めに入るべきでは無いですか!？」

「フィン……」

団員達の声がフィンへと決断を迫る

「そうだね。これ以上は流石に不味い」

（幾らベート自身の要望と言えども、これで仮にベートが死んでしまつては戦力の大幅な低下、ファミリア全体の意識が下がる。それに、僕としてもこれ以上は看破出来ない）

「流石にベートも今の一撃を喰らつて戦闘不能に陥っている筈だ。ベートには悪いがこの戦いはやめに「邪魔、すんじゃ、ねえよ」ッ！ベート!？」

意識を失つたと思つていたベートの声にフィンは驚愕し、ベートの姿をまじまじと見せつけられる。体は傷がない場所が少ないと思えるほどにボロボロであり、口から流れ続ける血が地面を紅く濡らし続けていた

「ハア、ハア……」

「……ベート、流石にこれ以上は君の命が」



「分かつてるッ！そんなことはッ!!」

「君がここで命を落とすには惜しい。戦いの続きならまた今度の機会で良いんじゃないか？」

「……今じやなきや駄目なんだよ、今ここで超えなきやいけねえんだよ!!過去も！俺自身も!!」

フィンが違うとまた口を開こうとするが、それよりも早く、アイズが口を開いた

「どうして、そこまで戦うの……？ベートさんは何を成したいの？」

アイズは分からなかった。ベートがどうしてここまで実力差を見せつけられ、ボロボロになりながらも立ち上がり、夏油へと立ち向かおうとするのかを。

アイズは怪物を、自分の両親を殺した黒龍を憎悪している。故に、アイズは自身がどれだけ傷つこうとも前へと歩みを進め続ける。その果てが自身の死であったとしても、自らの悲願が達成されるならば喜んで命を捧げるだろう。だが、ベートにはモンスターに対する憎悪はあれどアイズのような悲願は無い、あるのは力に対する執着とその中にある僅かな自責。

アイズには分からなかった。どうしてそこまで力に対して執着するのか、第一級冒険者に至っても尚、止まることの無いその思いが

ハッとベートが笑って、口を大きく開けた

「そんなの決まってるだろ!!」

「俺の護りてえもん全部！護る為だ!!」

その答えにアイズが、ロキ・ファミリア等が目を驚愕に目を大きく見開いた

「今までの俺は護りてえもんを全てこの手から零し落とし続けてた!!それにヤケになって、色んな奴に噛み付いて！暴力を振るって、周囲に迷惑をかけ続けるゴミだ！」

「それでも……この零し続けたこの両手でも護りたいと、心から思えるもんを護れることが出来たのなら!!そんな力を手に入れられるのなら！俺は前に進み続ける！過去の愚かな自分すらも振り去って！」

「例え、この思いが俺の身勝手なエゴだったとしても!!俺のこの思いは、間違いだなんて誰にも言わせねえ!!」

ベートの心からの叫びに、ロキ・ファミリアは、ロキは、ヘスティアは、息を呑んだ。目の前にいる血に塗れている狼人の中に見た。その壮絶なまでの人生の一旦を、その英雄にも似たベートの本質の一端を

「だから！だから！！勝負だ、ゲトオオオオオ！！」

ベートが己自身すらも振るい去るように疾走する

（：：これ以上は、私としてもヘステシアとしてもメリットがない。増してや、死んだとすればペナルティは流石に免れ無い。）

夏油は手の平に光を顕現させ、それを地面へと弾けさせる。それは疾走するベート目掛けて奔り、ベートのその身を駆け——ることは無かった

ベートの体に駆け巡る筈であった、雷電はベートの靴に吸収され、ベートの足に光が灯った

「ッ！」

（私の攻撃が吸収されたッ！）

だが、ベートのフロスヴィルドは魔法を吸収する物であり、夏油が行使する術式は魔法と似て非なるものであるが故に、完全に吸収することは出来ず、フロスヴィルドから吸収しきれなかったものがベートの全身を駆け巡った

「——ッ！」

(体が痺れる。だが、我慢できねえ程じゃねえ!!)

「オオオオオオ!!」

ベートが夏油に接敵し、蹴りを放つ。それを夏油はギリギリ反応し游雲で防御をする  
が、その上で後ろへと飛ばされる。ベートは夏油に更なる追撃を放つが、寸での所で夏  
油は全てを対処する。それにベートは内心、舌打ちし、自らの能力不足を呪った

(足りねえ!!もつと、もつとはやく、疾く!!全てを置き去りにする程に!!逆境すらを踏破  
する程の!!)

その時、運命が祝福でもしているのか、ベートの背中に熱が灯った。次の瞬間、ベ  
ートは流星となった

「ラアアアアア!!」

ベートが游雲で防御する夏油を下から蹴り上げ隙を無理矢理作る

「ツ!」

(コイツ!先程よりも、攻撃が強くツ!?)

「オオオオオオ!!!」

夏油の顔へとベートの蹴りが放たれる。それは幾ら夏油と言えども最早、防御するに

は既に遅くかった。ゾクリと這い寄る敗北の気配に、夏油は無意識の内に切り札を切った。

足に収束する光と共に夏油はベートの背後へと移動していた。夏油はベートの後頭部へと拳を振るう

完全に意表を突いた夏油の攻撃。これを躲すのはオツタルと言えども困難であり、それよりもレベルが下であるベートなど以ての外だった。

だが、それを覆すようにベートは夏油の拳を回避した

「！」

（意表を突いた。目も私の動きに追いついていなかった。なのに何故——！まさか、勘で私の攻撃を!?!）

そう考えている内にベートの裏拳が放たれるが、夏油はそれを回避し、バックステップをすることで後ろへと大きく飛び、着地をする。

その際に、地面に赤い雫が滴り、自らの頬に血が流れていることを初めて認識をする。

夏油は頬に流れる血を親指で拭き取り、ベートへの認識を改めた

「往くぞ」

夏油がそう言うと、体から光が弾けさせた

「止めに入った方がええんちゃうか？フィン」

「そうだね……けど、今の僕じゃ彼どころかベートすらも止めることは出来ない」

フィンは己の無力さに唇噛み締め、血が滲み出る程に拳を握った。その様子をロキは見ないふりをしながら、心からの言葉を漏らした

「ほんま、ままならないもんやな此<sub>下</sub>処<sub>界</sub>は」

「ああ、全くだよ」

ロキとフィンは今の己の無力さを噛み締めた

そんな二人の様子を知らず、夏油とベートの戦いは続く

夏油が光を弾けさせ、ベートへと接近するがそれを当たり前のようにベートは反応する。だが、やはり実力の差はあるのか全てを完璧に対処出来る訳でもなく、体勢が崩される。

だが、それを埋め合わせるように夏油の隙を突いた一撃を勘か又は本能なのか、それを回避してみせる。

普段のベートならば勘で迎撃など出来る訳が無いが、今のベートは極度の覚醒状態であり、身体能力は普段のソレとは比べ物にはならない程向上している。それは、聴覚や

触覚もそうであった。彼の一般的な獣人よりも優秀な耳は更に強化され僅かな音すら聞き逃さず、触覚は空気の揺れすらも完治し、それ等を無意識の内に行使し、ある種の未来視、第六感に昇格させ、夏油の攻撃を尽くを対処してみせる

最も、それに体が追いつくかは別の話であった

「ツー」

夏油の攻撃を感知したは良いが、遂に体が限界を迎え始めたのか、体が動きに間に合わず、形だけの防御の上に強烈な蹴りが放たれる、それにベートは大きく後退し、膝を付いた

(ツー体中が痛てえ…これは、もう限界だな)

ベートは痛む体を無理矢理に立ち上がらせ、夏油へと向き直る。ベートのその様子に夏油は限界だと察した

「これで最後だ」

ベートは地面を大きく踏み込んだ

「行くぞ!!」

ベートが銀色の光となって夏油へと疾走する

夏油はそれを、游雲に大量の呪力を纏わせることによつて応えた

「喰らいやがれエエエ!!」

ベートの蹴りと夏油の游雲がぶつかり合い、轟音と共に突風を巻き起こし、更に結界へとヒビ入れた。それにフィンとリヴェリアは即座に気付く

「リヴェリア!!」

「もう準備している!」

リヴェリアは詠唱のみに集中し、その邪魔をさせまいとフィンはリヴェリアの前に立つ

ぶつかり合う二つの光は、徐々に游雲が纏う蒼色の光がベートの白銀の光を呑み込み始める

そして、次の瞬間にはその全てを呑み込んだ

(ああ、やつぱり、高えなそこ頭点は)

だが、ベートは笑った。まるで無邪気な子供のように

「次は、勝つ」



その言葉と共に、ベートの意識は闇に呑み込まれた

「なあ」

「何か用かい」

ヘスティアの説教も終わり、夏油はベートの怪我の処置をするフィン達を横目にそう答えた

「アンタは何しにオラリオ此処に来たんや？」

そう言い、ロキは夏油へと目を向けた。その目は、嘘をつくことは許さないと物語っていた

「ただ、最強を掴み取る為に」

「は？」

夏油のその答えにロキは素つ頓狂な声を出した後、声を上げて笑った

「そうか！最強か!!」

「…… 笑われると不愉快なのだが」

「いや、すまんすまん。何だか馬鹿らしくなってきた。そうか、最強かあ。お前もただの男の子やったってことやな」

「…… 私は別に男の子と呼ばれる歳ではないが」

「私等からしたら下界の子達は皆子供みたいなもんや！」

「…… 帰らせてもらう」

夏油はそれだけ言うへとヘスティアへと声を掛け、歩き出した

「夏油！次、アイズたん達の肌に傷付けたら容赦せんからな」

そんな呑気な声とは裏腹に次は許さないという副音を夏油は聞こえたような気がしたが、それを意図的に無視する

「ロキ、ベートの処置を終えた。取り敢えずは命に別状は無さそうだ」

「そうかいな！それなら安心したわあ」

だがとフィンは言葉を詰まらせる

「？どうしたんや」

「……この惨状はギルドにどう説明しようか」

「あ……」

ロキは顔を青くし、夏油とヘスティアが歩いて行った方向へと顔を向けるがそこには既に二人の姿を見当たらなかった

「あ、アイツら逃げたんか!?このことを知ってて!!」

「……多分ね」

ロキはワナワナと震え、青筋を額に浮かばせながら口を大きく開いた

「この恨み覚えとくで！どチビに前髪イイ!!」

ロキのそんな叫び声が夜空に響いた

## 閑話 美の女神の優雅な一日

フレイヤの朝は早い。ムクリと質のいいシルクのカバーに包まれた毛布から出たフレイヤは欠伸を一つ落とす

普段の妖艶な雰囲気より、可愛げのあるその行動は、見る者全てを魅了してしまいうなそんな魅力を含んでいた

鏡の前へと立ったフレイヤは机の上にある魔道具を使用すると、間もなくして使用人がフレイヤの部屋の中へと入る。使用人はペコリとフレイヤに対して一礼をし、おはようございますと美しい音のような声で挨拶をする。それにフレイヤは軽く微笑み、頼むわと慣れた様子で椅子へと座る。

使用人は、フレイヤの絹の糸のような髪に何十万はくだらない櫛で一つ一つ丁寧に整えていく。使用人は手を止めることなく、細心の注意を払いながら、内心ではフレイヤの髪に対して、恍惚の声を洩らしていた

「終了致しました」

「ありがとう。何時も助かってるわ」

フレイヤがそう言つて微笑む。すると使用人は僅かに頬を紅潮させながら、フレイヤ様の役に立つことこそが私の使命ですと声を少し震わせながら、そう告げた。

ドアが閉められるとフレイヤは再度、鏡へと向き合う  
映るのは、見る者全てを魅了する程の自分の顔である

(私は美しい)

これがフレイヤ以外であれば、眉唾ものであるが、正真正銘の美の女神であるフレイヤが言うならば、全ての人はそれに肯定の意を示すだろう。

だが、そんな彼女の脳裏に過ぎるのは、*“色気付くな、年増。気色悪い”* と言う夏油の  
声であつた

それにフレイヤは体を震わせ、夏油という男について考える

(最初は気に食わなかつた。まるで汚泥、いや、それよりも酷い色をしていた彼の魂が。だから、オツタルに殺すように指示を出した)

けれどその結果は、オツタルの完全敗北。レベル差、力の差もあつた。けれど負けた。戦闘の中での有り得ない程の成長と閃き、そしてそれを成せる才能に

フレイヤは震えた。見る価値もないガラクタの底から現れたのは、まるで太陽のよう

に光り輝く魂。仲間の為ならば、自身すら捧げてしまうような愚かで、何処までも純粹な心

まるで恋する乙女のようにフレイヤの心臓を鼓動した

(夏油：貴方は一体何者なのかしら？フッフ、本当に貴方は私を魅了して止まないわね)

はあとフレイヤから恍惚の溜め息が零れ、頬を紅潮させた

(それに、彼には感謝しなければいけないわ)

思い出すのは、ダンジョンへと潜りに行った愛しの眷属

(オツタルの魂が更に輝きを増した。フッフ、彼との戦いが響いたようね)

ダンジョンへの道のりを歩いているオツタルへとフレイヤは視線を向けると、オツタルはフレイヤの視線に気が付く。それにフレイヤは小さく手を振ると、ペコリと礼をした後にまた歩き始めた

オツタルの溢れ出る闘気からまるでモーセの波割りのように道が開かれ、それを堂々とオツタルは闊歩する

「本当に飽きないわね。此処は」下界

フレイヤは珍しく、純粹な笑みを浮かべた。それは、フレイヤを知っている者からす

れば有り得ない程に珍しいことだが、これを見ている人物は誰一人としていなかった

コンコンとドアを叩く音と共に、朝食の用意が出来ましたという声が扉の向こうから掛けられる。それにフレイヤは椅子から立ち上がり、扉を開けると一人の女性が立つており、ペコリと礼をする

「おはよう、ヘルン」

「おはようございますフレイヤ様」

ヘルンと呼ばれた女性は、侍女頭を務める女性団員であり、フレイヤの唐突な行動に頭を悩ませるフレイヤ・ファミリア内では珍しい苦勞人であった。

そんな彼女もフレイヤ程ではないが、顔は整っており、ミスティアスさが彼女の魅力を更に引き立てていた

「行きましようか」

「はい。フレイヤ様」



「綺麗ね」

フレイヤは朝食を食べ終わり、バベルの塔の最上階へと居た。フレイヤの視線の先は商店など、人の営みをその瞳に映していた。フレイヤが一番に美しいと思うのは、最上級の人の魂であるが、フレイヤは人の営みその物にも興味があつた

（人が汗を流し何かを作り、それを買う人々。それによつて暮らしが巡り、それは次代へと形を変えながらも、繋いでいく。ある意味、神秘的ね）

うつすらと微笑みを浮かべるフレイヤの視界の隅に、ある男が映つた。その瞬間、フレイヤはテーブルの上にある望遠鏡のような魔道具を即座に手に取り、その男を見た。フレイヤの視界の先にいるのは、現在、フレイヤがおアツである男、夏油傑がいた。フレイヤは顔を蕩けさせ、息を荒らげた

（ああ！なんて綺麗なのかしら!!）

フレイヤが熱の籠った視線を送り続けていると、夏油はその事に気が付いたのか、バベルの塔の最上階、フレイヤのいる部屋へと視線を向けた。

それに年甲斐もなく、心をときめかせるフレイヤであったが、次の瞬間、ピキリと氷のように動きを止めた

なんと、夏油はフレイヤに向かって中指を立てていた

『く・た・ば・れ・と・し・ま』

そんな口パクを添えて、固まったフレイヤの姿が目映ったのかは不明だが、夏油は満足そうな笑みを浮かべて、人混みの中へと紛れていった

フレイヤは夏油が姿を消すと同時に、意識を取り戻したように動き出す。フレイヤはプルプルと震え、何かを堪えていた。それは、美の女神としての矜持を傷付けられたことへの怒りかそれとも――

「ハッ」

「興奮しちゃうじゃないの◆?」

まるで何処かの戦闘狂のような台詞を吐き、フレイヤの局部に電撃が走った

「万人を魅了する私に魅了されないだけでなく、私にそんな態度を取れるなんて貴方ぐらいよー！」

「ああ、本当に、心の底から——

フレイヤはバツと手を広げる

貴方が欲しいわ、夏油！」

恋する乙女（年齢不詳）は無敵であった

## 邂逅

「おい！凶狼がランクアップだよ！」

「おいおい！一体どんな偉業を成したんだよ！」

オラリオはレベルアップを果たした、凶狼ことベート・ローガの話題で持ち切りであった。これがレベル2や3などであれば、ここまで話題にはならない。だが、ベートはレベル5という第一級冒険者であり、冒険者はレベルが高くなれば高くなる程にステータスの伸びは低くなり、成すべき偉業も困難なものとなる。

それ故に人々は心踊らせる。困難を乗り越えたその一人の英雄に、自分達もあなりたいと希望を抱いて、遙か高みに君臨する男のこれからの冒険譚を期待して

「……」

夏油はそんな沸き立つ有象無象を意識外へと排除し、今日も今日とてダンジョンへと潜る為に足を進める

チクチクとやけに熱の籠った気色の悪い視線がバベルの塔の最上階から向けられたので、中指と口パクでヘステイアには聞かせられない程の悪口を口にしながら。

そうすると、視線が固まったことにより相手が如何に動揺しているのかを察した夏油は、ニコリとひと仕事終えたように笑い、ダンジョンへ続く道へと歩みを進めた

ダンジョンは何時もよりも賑わっており、ベートのレベルアップに感化されたのだから。その冒険者達が賑わう様を夏油は鼻で笑いながら夏油は奥へと潜る

夏油の目的地は17階層

標的は——ゴライアス<sub>階層主</sub>

「オオオオオオ——！」

7メートル程もある灰褐色の巨人が叫び声を上げた

十七階層の嘆きの大壁と呼ばれる場所にて夏油は目の前で雄叫びを上げるゴライアスを見上げていた。ゴライアスとは、階層主とも呼ばれるモンスターであり、そこいらに現れるモンスター達とは格が違う存在である。

下級冒険者は勿論のこと、第二級冒険者すら萎縮させてしまうような存在感を放つゴライアスに夏油は特に気負った様子もなく、ただ興味深いモルモットを見るかのようにゴライアスを観察している

(デカいな……やはり、階層主とはそこら辺のモンスターとは比べ物にはならないか。通りでパーティーで討伐をする訳だ)

チラリと背後を見れば、十八階層にあるリヴィラの街から来たであろう冒険者達が空

に向かつて劍や、魔法を放っていた。

それに夏油は自分がそうなるように仕向けたのだが、あまりの無様さに嘲笑ってしまった。彼等が何も居ない空間に向かつて円形を組むようにしながら、劍や魔法を放っているのは彼等がそこにゴライアスが居ると認識しているからだ

「そこそこに使えば勝手に助かるよ、本当に」

夏油は彼等の上に浮かんでいる微かに甘い臭いを放っている呪霊を見つめ、満足そうに笑う。そう彼等は夏油が使役する呪霊の呪術によって幻覚を見せられているのだ。

その呪術は至ってシンプルであり、呪霊が吐き出した微かに甘い臭いのする無味無色の煙を吸い込むことによって幻覚を見せるといふものだ

それだけ聞けば強力な呪術なのだが、その効果が適用されるのは自分よりも弱い相手であり、呪力も自身よりも少ないことが条件である。それに、呪力が少なくとも、自身の周りを呪力で固めれば普通に防がれるというなんとも微妙なものである。

しかし、此処には呪術師は存在しない為に後者の条件は弾かれ、準一級の呪霊ならばレベル4程度の冒険者と同等であり、リヴィラには最高でレベル3しかない為に呪霊の呪術はその効果を遺憾無く発揮していた

「さて、そろそろ此方も始めるとしようか」

それを合図にゴライアスは夏油に向かってその巨大な拳を振るった

巨体に見合ったその鈍さではあるが、その攻撃範囲の大きさとパワーがそれをカバーしており、下級冒険者ではひとたまりもないだろう。だが、夏油はそれを呪力を纏い、真正面から受け止める

「——!?!」

それにゴライアスは衝撃を受ける。このゴライアスは生まれて間もないが、自身の戦い方を良く理解していた。小細工無しで、真正面からただ拳を振るうこと。これがゴライアスの戦い方であった。それはあまりにもシンプルであったが、ゴライアスの巨体や尋常ならざるパワーによってそれは戦い方として機能していた。

けれど、目の前の男は自身の拳をその小さな体で真正面から受け止めてみせ、微塵もダメージを受けた様子は無かった

「これが階層主か」

(中層で戦ったモンスターよりも当然だが強いな。それにパワーもある。まあ、オツタル程ではないが)

当然である。ゴライアスは推定レベルは4であり、オツタルはレベル7。比べること



すら烏滸がましい程の差である。だが、此処オラリオに来てからの夏油のまともな戦闘はオツタルとロキ・ファミリアとの戦闘のみであり、夏油の比較基準は狂っていた。

まあ、そんなことは露知らずに夏油は二級の呪霊を七体程呼び出し、ゴライアスへと攻撃させる。これに反応が遅れながらもゴライアスも呪霊達を殺さんと拳を振るうが、夏油の的確な指示と二級の中では動きの速い個体を選ばれたということもあり、拳を難なく回避をし、一撃を与える

動きの速さが重視されているこの呪霊達は攻撃力が低く、ゴライアスに傷を与えることは出来ない。だが、それはそのままの場合であり、夏油は中層で集めた魔石をその呪霊達に事前に与えてきた。

それにより全てにおいて呪霊達は強化され、浅くはあるがゴライアスに傷を付けることを可能にした

(やはり、モンスターの強さによって強化率も変わる訳か……)

夏油は自身の考察と二級の呪霊がレベル4相当のゴライアスに傷を与えたという成果に口角を上げる

その夏油の様子に気に食わなかったのか、ゴライアスは拳を夏油や呪霊に向けて何度

も、何度も、何度も叩き付けるが呪霊はそれを尽く回避し、夏油は攻撃を受けるのも面倒だと考えたらしく、御用達である防御特化型の呪霊に自らの呪力を流し込み、その堅牢さをより強固にし

た上で、呪霊に全てを受け止めさせる

(二級の呪霊が中層の魔石を2〜30個で準一級の一步手前……いや、二歩手前だとすると階層主一体の魔石はどれ程か気になるな)

「さて、知りたいことも知ること事が出来た。とつとと倒すとするか」

夏油は収納型の呪霊から一級呪具の刀を取り出し、蒼色の呪力を纏わせ、振り抜いた纏わせた呪力が斬撃となってゴライアスへと放たれ、それにゴライアスはギリギリで反応をし、右手でそれを遮るように防御をする

スパッと軽快な音と共にゴライアスの右腕は切り落とされ、貫通したその斬撃はゴライアスの片目を切り刻んだ

「——!!」

声にならない絶叫と共に、ゴライアスはジタバタと痛みに悶えるように暴れる

「そんなことしてて大丈夫かい？」

夏油はゴライアスの頭上へと姿を現す。それにゴライアスは驚愕し、反射的に夏油を左手で握り潰そうとするが、その左手すらもいと簡単に切り刻まれ、遂にゴライアスは反撃の手段を失う

「アアアアアアア!!」

来るなど言わんばかりのその咆哮に、夏油はユルリと口角を上げた

「生憎だけど、殺す機会なんて何回もあった。それこそ腐る程にね」

それじゃあと夏油はゴライアスの核へと刃を振るつた

パキンという硝子が割れるような音が鳴ると、ゴライアスの体が段々と崩れていく。後に残ったのは普通のそれよりも一回り以上も大きい魔石が1つだけであり、ついでの取っておきたかったゴライアスのドロップアイテムは見当たらず、それに少し落胆してしまうがお目当ての物は手に入ったので良しとした

「ドロップアイテムは無しか。：。まあ、別に良いか」

夏油は地面に転がっている魔石を手に取り、収納型の呪霊に仕舞わせ、夏油は上機嫌そうに地上に向かっての道へと歩みを進めようとしたが、ピタリと足を止める

「あ、幻覚を解いていなかったな」

どうしようかと夏油は考えていると、ふと閃いた

「記憶を消せば良いか」

「<sup>バク</sup>猿」

現れたのは般若の顔と動物の体を持った二メートル程もある呪霊だった。その呪霊は元々の姿は幻獣と呼ばれる存在であったが、人々が猿に抱いた異形なる姿への恐怖と、人によって捻じ曲げられていく真性によって誕生した呪霊である。

猿の階級は特級に格付けられている。その能力は相手の記憶を奪い取り、その記憶の中の人物に姿を化けることが可能というもので、その記憶の中の人物の能力を制限がある場合もあるが使用することの出来るという特級に相応しい能力の持ち主であった

「あの集団の記憶を吸ってくれ」

「……」

夏油がそう言うのと猿は集団へと無数の管のような物を突き刺し、ストローのように何かを吸っていく

そうするとバタリ、バタリと吸われた者達から気を失い倒れ、三十秒もすると夏油以外は倒れ伏しているという阿鼻叫喚の図が出来上がっていた

「さて、暫くすれば起きる筈だが……流石にそのまま放置する訳にはいかないか」

夏油は溜め息を吐き、幻覚を見せる呪霊を十八階層へと先行させ、運搬に適した呪霊を複数体を呼び出し、冒険者達を抱えさせた

「ゴライアスの魔石を手に入れる時に毎回これをしなければいけないのか……」

夏油は面倒くさいなど言葉を吐き、十八階層へと降りて行った

「ん?」

リヴィラの街の冒険者達を誰にも疑問を抱かせることなく、完璧に送り届けた後に地上へと戻って来た夏油の耳に路地裏で荒らげる男の声と悲痛な声を上げる女性の声が聞こえた。

それに夏油は只事ではないと確信し、必要であれば女性を助けようと路地裏へと足を進めた。決して暴力を振るっている冒険者にギルドの罰則をチラつかせ、金や情報などを搾取しようなどとは考えていないのだ。決して

夏油はルンルン気分で路地裏を進むと大きなカバンを背負っているサポーターであろう小人族の女性とそのサポーターの髪を挿んでいる男性とニヤニヤと周りを囲むように厳しい風貌の男達が立っていた。

小人族の女性はそれに酷く怯えた雰囲気と共に、何処か冷めたような雰囲気も感じ取られた。それに夏油は疑問を抱きつつ、助けに入ろうと路地裏の影から姿を現した

「やあ、こんな所で暴力なんて随分と小さいことをしているんだね」

「!誰だテメエ!!」

夏油のいきなりの登場に男達は驚き、腰に携えている剣に手を伸ばした

「なに、ただの通りすがりの冒険者さ。それよりも、そんな小さい女性に暴力なんて、ギルドに報告されたらただじゃ済まないんじゃないかい?」

「テメエ……!俺達を脅してんのか!」

「さあ?よく分からないな」

夏油がそうおちよくると男達は青筋を浮かばせ、腰から剣を抜いた

「おや?これ以上罪を重ねるのかい?」

「テメエをぶつ殺して有耶無耶にしてやるよ——!!」

リーダー格の男が夏油へと飛び掛るのと同時に、サポーターを囲んでいた男達もその男の後に続いて、夏油へと斬り掛かる

「逃げてくださいッ!」

サポーターの切迫した声に夏油は笑った

「大丈夫」

夏油が出来るだけの手加減を行い、リーダー格の腹に拳を突き刺した

パン!という風船でも割れたかのような強烈な衝撃音と共に、男は壁に叩き付けら

れていた

「は」

間抜けた声と共に、シンと静寂が走る

「お前達も、こうなりたいかい？」

ハイライトの消えた目を細め、夏油が残った男達を見つめれば、膝をガタガタ震わせてまるで極寒の地にいるかのように顔を青くした

それに夏油は小心者と内心で吐き捨てる

「さあ、どうする？」

夏油がニツコリと笑うと男達は更に膝を震わせた

「ひ、ヒイイイ!!」

「あ、アアアアアア!!」

リーダー格の男など気にせず男達は夏油に背を向けて、走り出した



「ふう。さて、大丈夫かい？」

「は、はいっ！」

夏油がサポーターの女性に手を伸ばし、女性は手を掴み立ち上がる

「あ、ありがとうございます。あのままだったらどうなってたか分かりませんでした」

「いや、気にしなくて良いよ。別に気になったから来ただけだしね」

夏油がそう言うのとサポーターはそうですかと平坦な声で返す。それに夏油は何かあるなど考えるが、それを相手に悟られることなく、会話を進める

「そう思えば、君の名前は？」

夏油がそう問い掛けると、少し間を置いた後にサポーターは口を開いた

「… 私の名前はリリ。ただのリリです」

そう言い、サポーター——リリはフードを深く被り直した

## 契約

「リリ、ただのリリです」

目の前の小さな少女はフードを深く被り直し、少し下へと俯いた。普通の人ならば男に襲われて恐怖に震えているのだらうと思うだろう。

だが、呪術師と教祖という人の感情に多く触れてきた夏油はリリと自称する少女が抱えているのは恐怖では無いことを見抜いた。

あるのは、目の前にいる夏油に対する嫉妬と憎悪、そして傍観の情であった。

普通に生きている人間ならばこれ程までもドロドロと混ざり合った感情など抱かないことを知っている夏油は、目の前の少女には何かがあると推測した

「へえ、リリ。良い名前じゃないか」

「……ありがとうございます」

リリから目の前にいる夏油ではない誰かに向けた憎悪の情を僅かに洩らしたことを夏油は直ぐ様に察知し、成程ねえと心の中で呟いた。

夏油は目の前の少女のその反応から、リリという名前は偽名ではなく、本名又は愛称

か何かだと確信する

「ああなつた経緯は話せるかい？」

「はい……リリはあの人達にサポーターとして雇われたんですが、道中で少しだけ遅れてしまつて。それに怒つて賃金は無しと言われて……それは可笑しいと反論をしたらああいう風に……」

ハアと溜め息を着いたリリの姿から嘘の気配は感じられず、ただただ憂鬱だという感情がヒシヒシと伝わり、それがリリという少女にとつて日常茶飯事であると察せた

実際、サポーターはダンジョンに潜る上で荷物運びや魔石の採取等の中々に重要な役割を熟すことを求められる役職であるが、その殆どが冒険者としての才能が無かつた者が大半である為に下に見られやすい。

それに加えて、小人族特有の身長の小ささと女性という比較的に非力な性別であることも相まつて、こういうことは嫌という程に体験してきたのだろう

「それは災難だったね」

「はい。だから、リリはとても感謝しています。本当にありがとうございました」

リリは慣れたように腰を九十度に折り曲げ、如何にも感謝していますと言わんばかりに深く頭を下げる。

しかし、夏油がリリから読み取っている感情には感謝など一欠片も含まれておらず、

ドロドロとした負の感情のみであった

特に目立った（表向き）動きをしていない夏油は、目の前にいるリリに対してそんな感情を抱かれる覚えは一切ない。

そのことからリリの負の感情の対象であるのは夏油という個人ではなく、冒険者そのものであると推測した

だが、リリが今まで会ってきた野蠻な冒険者と自分か同レベルに見られているという事実が癪に触った為、ここで夏油はちよつとした仕返しをすることにした

「所で、君は私に感謝をしているんだよね？」

「はあ」

夏油の言葉に裏があると直ぐ様に察知したりりだが、実力で劣っている上に助けもなかったという恩も一応はある為に、ただ夏油に用意された返事を返すことしかできない。

リリはこれから夏油の口から発せられるお願いという名の命令に、せめて性的なことでは無いようにと自らの裾を握り締めた

「私のサポーターになってくれないかな？」

「は？」

リリは想定だにしていなかった夏油のその言葉に呆気に取られ、間抜けな声と顔を晒す。その反応に溜飲が下がった夏油は人好きするような笑みを意図的に浮かべた。

それをリリは探るような目を夏油に向けるが、その瞳の奥には未だに予想外に対する混乱があった

「何が狙いですか」

「と言うと？」

「私から見たらサポーターなんて要らない程の力をお持ちなのに、どうして態々足手まといになるかもしれないリリなんですか」

「いや、サポーターというものが気になってね、一度雇ってみたいと思っていたんだ」

ニコニコと人好きする笑みを浮かべる夏油に、ジトリとした目付きで視線を送るが、笑みを浮かべるだけの夏油にリリは溜め息を吐いた

「勿論、働きに見合った報酬は出すから安心して」

そんなことを呑気に口にする夏油に、リリの中の夏油という人物像がグニヤリと霧のように掴めない人物となっていく。

最初の印象は、複数人の冒険者相手でも真つ向からそれを振り伏せることの出来る恐ろしい冒険者。

次の印象は何を考えているのか全く理解することの出来ない変わり者。

そして、今は何処にでもいる呑気で現実を知らないような好青年のような人物像へと印象を変えた

怪しいと思いつつも、恩や路地裏で夏油と対面しているという現在の状況もあるのでリリには、最早拒否権などは無いに等しかった

「分かりました。今日からリリは冒険者様のサポーターになります」

「ありがとうございます。それと冒険者様はやめてくれるかな」

「分かりました。では、お名前を伺っても？」

「夏油傑」

夏油がそう言うとりりは頭を傾げて、何かを考えるようにうくと悩ましがな声を洩らした

「ゲトウスグル。それでは、ゲトウ様ですね！」

「!」

リリのゲトウ様という慣れないイントネーションながらもそう呼ぶ声に、夏油は己が嘗て非術師瘡共から救った幼い双子の家族の姿を重ねた

『ゲトウ様!』

(ミミ、ナナ・君達は今、何をしているのかな)

夏油はそつと空を見上げ、この世界にはいない家族へと思いを馳せる。胸を占めるのは二人に対する罪悪感。

あの二人を逃がしたことに夏油は一切の後悔はない。だが、二人を救い、育てたが故に、無責任にも命を落としたことに後悔はある。

もし、二人があの場合にいたのなら死にゆく夏油の後追いをするということは簡単に想像できた。

それ程までも二人は夏油という救世主に依存し、敬愛を示し、信頼をしていた。そんな夏油の為ならば二人は命でさえ容易く棄てるだろう

だが、夏油はそれを良しとしなかった。手前に勝手に助けたのは自分であり、非術師の職責此方側に招いたのも自分である。二人の人生のルールを常に自分が敷いてきたという自覚はある。

しかし、最後まで自分と共にいて欲しくはなかった。二人を本当に愛しているが故に、夏油が死んだ後位は自らの人生を自分で歩んで欲しかった

(私は、幸せな日々を送っているよ。こんな私でも幸せを掴めることが出来た。二人も私のことなど忘れて、どうか自分だけの幸せを掴んでくれ)

「ゲトウ様！」

「ッ！濟まない、少し放心していた」

夏油がそう言うのと、リリは態とらしく頬を膨らませて如何にも怒っていますというアピールをしている。それに夏油は表面上申し訳なさそうな顔をしつつも、目の前の少女をどう扱うか思案する

「期間はどうしますか？」

「そうだね。約一ヶ月程かな。もし、不満等があれば直ぐに辞めてもらっても構わないよ」

「成程。ゲトウ様は優しいんですね、サポーター如きにそこまで気を配って下さるなんて」

「そんなことはないよ」

夏油はあくまでも自由意志ということを強調してリリへと伝える。それにリリは少しばかり安堵したようにホッと胸を撫で下ろす。



リリの中では自分が何時でも辞めることの出来るという環境は都合の良いことであり、少しばかり夏油への警戒心が薄れる

だが、夏油はリリに優位な契約をした訳でなく、これ迄の彼女の境遇を考えた上で敢えてそう感じれる契約にしたのだけであり、得るものは夏油の方が圧倒的に多い

「それじゃあ明日から宜しく頼むよ」

「はい・宜しくお願ひしますゲトウ様」

それじゃあ明日の八時に広場で集合ねと夏油はそう言うのと、リリへと背を向けて自らのホームへと向かつて歩き出した。それをリリは見えなくなる迄愛想良く笑いながら手を振った後に、路地裏の更に奥へと足を進めた

「取り敢えず、収入源はゲット出来ました。ゲトウ様もあまり此方側のことは知らないようでしたし、搾れるだけ搾ってやるとしまししょう」

リリから見た夏油の強さはレベル1の上位からレベル2の下位程であり、本来ならばサポーターをあまり必要としない強さである

だが、そんな夏油が態々サポーターとして自分を選んでくれたのは奇跡に近いことで

あり、何より夏油の腰には冒険者ではない自分でも業物だと分かる程の刀が腰に差してあつた

（あれを盗めれば、もしかしたらリリは自由になれるかもしれません。）  
「その為にも、まずはリリが信用に値する働きをしなければいけませんね」

明日から頑張りますしよう！とリリが気合いを入れるが、自らのホームにもう着いたことに気が付き、憂鬱そうな溜め息を吐いた

「只今戻りました。」

なるべく音を立てないようにしつつ、リリは自らのホームへの扉を開いた。そんなリリを出迎えたのは、三人程の厳つい風貌の男達がりりを出迎えた

「よお、待ってたぜリリイ」

「ツ、ゲド様。」

リリが震える口でゲドと呼ばれた男はニイと厭らしく口角を吊り上げ、リリが背負っている大きな鞆へと目を向ける。それにリリは何かを堪えるように口を強く噛み締め、タラリと口端からは血が流れる

「今日は何をくすねてきたんだア？」

「きよ、今日は冒険者様達から何も頂けなかったので、何も入って——」

「ゴン!という鈍い音と共に、リリは木造の床へと叩き付けられた。鼻が折れたのか木造の床に絵の具でもぶちまけたかのように紅が彩られていく。

リリは、声にならない悲鳴と吐き、遅れてやってきた痛みに悶えた

「バレバレの嘘つくくんじゃねえよ小人の餓鬼が」

「ツ〜!」

「おい、コイツの鞆取れ」

ゲドの取り巻きらしき男達がリリから無理矢理背負っていた大きな鞆を取り上げ、中身を漁り始める。

すると、鞆からはモンスターの核やドロップアイテム、多少傷は付いているが斬れ味の良さそうなナイフなどが出てくる

「良いもん持つてんじゃねえかよツ!」

ドゴオという鈍い音と共にリリの腹がゲドに蹴られ、リリは壁へと衝突をする。カハツとリリが体内を巡っていた空気が吐き出され、ズルズルと地面へと倒れ込んだ。

それを気にすることなく、ゲド達はリリの鞆の中を漁っては、売れそうな物を巡って言い争っている

(なんで、リリばかりこんな目に合わなきやいけないんですかッ・畜生、畜生！)

ポタポタと目から流れる涙が、木造に床にシミを作っていく。体は痛みでまともに動くことも出来ず、ただ痛みが全身を循環しているようで、リリは歯を噛み締めて、声が洩れないように我慢をする

「じゃあなあ、リリ。次も俺達の為にサポーター頑張ってくれよ〜?」

ギャハハハ！と下品な笑い声を零しながら、ゲド達は振り分けられた部屋へと悠々と戻っていく。それをリリは、鼻血を未だに垂れ流しながら、血走る程にゲド達の背中を睨み付ける

「この、神酒の奴隷共め！」

無力なりりはそんな悪態を着くことしか出来なかった

(噂には聞いていたがソーマ・ファミリアがここまで酷いとは)

夏油は目の前で蹲っているリリとゲドと呼ばれる目にする価値も無いゴミが言っていた言葉から、これらに似た行為が毎日のように続いていることを悟った

（外でも問題を沢山起こしているのだろう。もし、それがヘステイアにも及ぶ可能性はあるかもしれない）

実際、ソーマ・ファミリアが飲食店で金を奪おうとした事件や売り物の剣を盗んだという事件など様々な資料がギルドには保存されている。

中には神相手にも喧嘩を売ろうとした人物もいたらしく、これはかなり有名な話だった

（利用するか、それとも潰すか、だな）

夏油は潜り込ませた呪霊に帰還を命じ、ソーマ・ファミリアへの処遇について頭を回し始めた

## 表裏一体

リリが夏油様のサポーターとなつてから二週間程が経ちました

最初はどんな無茶な要求をされるのか、どんな狙いがあるのかと勘繰っていたリリですが、ダンジョンに潜り、食事を共にするなどの交流を何回も繰り返すと夏油様はただのお人好しだということが分かりました。

それに安堵なのか怒りなのかぐちゃぐちゃと混ざり合つたような感情を抱きました。が、それを何時もように自分の心の底に沈め、サポーターとしての職務を真つ当する。

夏油様にはその働きぶりをよく褒められるが、私は何時も心の中で毒を吐き続ける。だつてそうでしょう？何年も積み重ねてきた自分を今にでも追い越してしまいたい。そんな程に手際良く、それに加えて強い相手に褒められたつて心に潜んでいる劣等感が増すだけの筈です。

これを堂々と口に出来れば良いのだが、夏油様をそれを何の悪意も無く口にしてるのだからなんともやりにくかった。

少しでも悪意が含まれているならば目に付かない場所で愚痴を吐くことが出来た、け

れど純粹にそう言われてしまえばそれを悪く口にすることは気が引けた

そんな相手など長く付き合いたいとは思わないけれど、夏油様の普段の動きに不満は無いし、何よりも金の羽振りが良かった。今までの冒険者とは段違いでその割合は5:5という破格のものであった。

それに最初は困惑し、働きに見合っていないと思わず一部を返金しようとしたのですが、それを優しく却下されてしまえばサポーターであるリリは黙って受け取るだけでした

それが二週間も続けば少しは慣れてしまいましたが、夏油様のサポーターを辞めた後に少しの不安を抱いてしまうが、何とかなるでしょうと自分に言い聞かせて今日とて魔石の回収を行う。

夏油様の戦闘スタイルは腰に携えた業物の刀を使用した接近戦であり、その大きな凶体からは考えられない程の速度でモンスターに接近し、首を刎ねるといふパターンが多くを占めています

それに最初は度肝を抜かれながらも、まるで風のような速さだと褒め称えると彼は少し居心地の悪そうな顔をした後にこの刀のおかげだと言い、この刀について話しをしてくれました。

どうやら夏油様の持つ剣は家で代々受け継がれている業物であり、持つ者の能力を向

上させるというリリが思っていたよりもとんでもない業物らしく、それを聞いた時は信じられない位であったが、レベル1とは言い難い程のスピードとパワーを目の当たりにした私は無理矢理納得されたような形でそれを信じました

ですが、経験はまだまだ浅いようで、何回か危ない場面もありました。ほら、こんな風に

「夏油様！後ろです!!」

ズルリと壁から這い出て来るキラアアントに気が付いていない夏油様にリリは簡潔ながらも分かりやすいように指摘をすると夏油様は焦ったように後ろを振り返る

「ツー」

キラアアントの強靱な顎から放たれるその一撃必殺に遅れながらも反応し、刀でそれを受け止める。ギリギリと火花でも出そうな程のぶつかり合いだが、夏油様がキラアアントの腹部を強く蹴り上げ、宙を舞ったキラアアントの首に霞む程の速さで刀を振るってその首を刎ねた

「お見事です！流石夏油様です!!」

「いや、リリがいなかったらどうなっていたか分からないよ。ありがとうリリ」

夏油様が魔石を拾いながらリリにお礼を言うので少し心がポカポカとまるで雪解け



の春のように暖かいものが広がりましたが、それを意図的に無視する。

夏油様もどうせ冒険者なのだからと自分に言い聞かせ、それを表に出さずに照れるような演技をする

「さ、サポーターとして当然のことをしたまでですよ。それよりも！もうそろそろ良い時間だと思うので昼食にするとしませんか？」

「確かに、良い時間だろうし昼食にするとしようか」

夏油様がダンジョンの壁へと向かって大きく刀を振るうと裂け目のような傷が壁へと深く刻み込まれる。それを夏油様はしっかりと確認した後に懐に仕舞っていた皮袋からその中に入っているであろう保存食を取り出そうとするが、それを私は控え目に夏油様の裾を引く。

それに夏油様は何だい？と言わんばかりに此方へと向くと、私はリュックの中からランチバックを取り出し、夏油様へと手渡す

「これは。」

「リリが作ってきたサンドイッチです!!何時も干し肉などだけでは味気ないのと思ったので、迷惑でしたでしょうか？」

上目遣いで夏油様を見つめると、成程と呟くと夏油様はランチバックの中にあるサンドイッチをまじまじと見つめる。

その動作にドキマガシしていると、栄養バランスがちやんと考えられてとても良いねと夏油様は私に笑い掛け、私の頭をポンポンと撫でる

「うえ!？」

「ああ、済まない。つい撫でてしまった。気に触ったらのなら謝るよ」

「い、いえ！驚いただけなので気にしないで下さい!!」

そうリリは誤魔化すが、赤くなつた顔までは誤魔化すことが出来ないものでそれを隠す為にフードを深く被つてそれを見えないようにする。

だが、まるで微笑ましい物でも見るかのような夏油様の暖かい雰囲気に含まれて更に顔を赤くなるのを感じつつ、じんわりと凍つた氷が溶けるようなそんな暖かさを胸に流れていた

「それじゃあ戴くよ」

「は、はいッ！どうぞお召し上がり下さい!!」

夏油様はトマトとチーズ、レタスとハムを挟んだサンドイッチを手に取り、口にする。珍しく静かなダンジョンで夏油様のサンドイッチを咀嚼する微かな音がハッキリと聞こえる。

それを耳を傾け、じいと夏油様の反応を伺うという自分は何とも変態のような気がしたがそれよりも夏油様の反応の方が気になるのでドギドキしながら口を開くのを待

つ

「うん。トマトの酸味とチーズの特有の癖の強さ、ハムの旨味を損なうことなくマッチさせていてとても美味しいよ。それにレタスのシャキシャキ感もアクセントとなって飽きない工夫がされているね」

リリが作ったサンドイッチが思いの外夏油様に好評であることに安堵しつつ、サンドイッチ一つでここまで褒められると思っていなかったのでニヤケてしまう

「ありがとうございます!!まだまだあるので是非お食下下さい!!」

リリも自分の分のサンドイッチを取りつつ、自信作である特製のサンドイッチを夏油様に差し出すと夏油様も嬉しそうに口角を上げてありがたいと言い、サンドイッチを受け取ります。

誰かとうやうやって面を合わせて取る食事に自分らしくもなく心を浮かばせるが、これで良いなんて根拠の無い確信をリリは抱きながらリリもサンドイッチを頬張る

久しぶり食べたサンドイッチは今までの何よりも美味しいような気がした

「美味しいですね!」

「ああ、本当に美味しいよりリリ」

こんな穏やかな時間が永遠に続けば良いなんて、叶いもしないことを思いながらリリはサンドイッチを頬張った

「お疲れ様でした夏油様!!」

「ああ、お疲れ様リリ」

リリ達はダンジョン探索から切り上げ、時刻は夕方の五時を過ぎており、橙色の夕日  
がリリ達を優しく照らし、今日も頑張ったなんて達成感を抱いた

今日は魔石や不要なドロップアイテムが多かったことから何時もよりも多めの十四  
万ヴァリスでそれを半分に割った七万ヴァリスがリリの握っている皮袋に詰められて

いました。

その幸福な重みに頬を緩めながら、それをリュックに仕舞って、盗まれたりしないように嚴重にリュックの紐をきつく締めてホームへと帰る準備をする

「送ろうかい？」

「いえ！ 態々夏油様の手を煩わせる訳にはいきませんので!! それに近いので大丈夫です!!」

憂鬱な気持ちを隠しつつ、そう元氣一杯に答えると夏油様は眉を少し下げてそれなら良いんだけど、と心配そうな声で小さく呟く姿に暖かい気持ち溢れてしまう。

誰かに心配されるなんてここ数年で一度も無い上に、そこに今までの冒険者のような下卑た欲望なんて一つも無い、そこには純粹なただリりを氣遣う心しかなかった。だからこそこんなにも心を弾ませ、心を許してしまそうになる

それこそ、全てを委ねてしまうほどに

「では！ 失礼します夏油様！」

「ああ、また逢おう。」

私は路地裏へと入り、コソコソとなるべく氣配を殺しながらもホームへと戻ろうとする

広場とは違うジメジメとした嫌な雰囲気、嫌な予感を脳裏に過ぎらせるが気の所為だと自分自身を無理矢理納得させ、足を進める。

だが、曲がり角で体格の良い男と衝突し、バランスを取れずに尻餅を着いてしまう。ジンジンと痛む臀部に目の前の男を思わず睨み付けようとするが、その顔を認識した瞬間にヒュツと息を呑んだ

「よお、リリイ〜。今日の成果はどうだったんだよう?」

「ゲド、様」

今、一番会ってはいけない男に出会ってしまったことにリリの顔から血が引くのを感じ、全身が目の前の男の恐怖からガクガクと震える

「あ、あ」

「なあ、何とか言えよッ」

ガシリと髪を掴まれて無理矢理にリリの顔は上へと向けさせられると、目の前には下卑た笑みを浮かべる汚い顔がリリの目に映り、思わずえづきそうになる

「見た所、あの男は随分と金の羽振りが良さそうだなあ、それなら金もたんまり貰ってんじゃねえのか?」

「そ、そんなことありませんよ。」

漸く口に出来た言葉は随分と震え、自分で聞いていても今にも消えてしまいそうな程

に小さな声だった

「嘘は良くねえよ・俺はちゃあんと見てたんだからなあ!!」

そう言うとりりの腹に膝蹴りが叩き込まれる

「ツ!!」

痛みのあまりに声にならない声がハクハクと口から洩れ、バタリと床に腹を抑えて倒れ込む

リリの上からは下卑た笑みが響いており、それが憎くてどうしようもなかった

(クソ、クソツ!!なんで、どうしてツ)

先程までの夢のような時間から、どうしようもない理不尽な現実を目の前が真っ暗になるようなそんな絶望がジワジワとりりの体を包んでいくように感じた

「それじゃ、もう一発いっとくか!」

自身の上から振り上げられる拳をギユツと目を瞑った

「助けて、夏油様」

(来る訳無いですよね・こんな汚れたリリの元に)

「呼んだかい?リリ」

「え」

路地裏に響いたリリりでもゲド様でもない声に、リリは声の発生源へと顔を向ける。そこには、リリが助けを求めた主である夏油様が笑みを浮かべて立っていた。

「やあ、無事・ではないようだね」

心配そうに下げられた眉と目元にリリは思わず泣いてしまいそうになる。こんな汚れた自分でも、心配してくれているという事実に

「お前は、コイツとパーティを組んでる奴だな。そんな奴が何の用だ」

「何、嫌な予感がしたから急いで彼女を追い掛けただけだよ。それより、こんなことして大丈夫かい？」

「そんな夏油様の言葉にゲド様はピクリと眉を顰める

「ファミアリアの問題だ。部外者が口を出すことじゃねえ」

「確かにそうだが、それにも限度があるんじゃないか？これをギルドに報告したら懲罰は免れないだろうね」

夏油様がそう言うのとゲド様は舌打ちをして、リリに向かって振り下ろそうとしていた拳を下げ、怒りを隠せない様子でズンズンとホームのある方向へと足を進めていきました。



「大丈夫？骨は折れてないかい？」

「だ、大丈夫です。暫くすれば痛みも収まると思います」

そう言うのと夏油様がホツと息をつく

「あれはソーマ・ファミリアのゲド」ということは君はソーマ・ファミリア所属なのかい？」

「はい。リリはソーマ様の眷属です」

「一番知られたくない相手に、一番知られたくなかつた事実を知られてリリは罪を自白するように顔を下に向けた

「どうしてソーマ・ファミリアに？」

「それは、両親が元々ソーマ様の眷属だった、からです」

もうどうにでもなれと言わんばかり、リリの口からはペラペラと今までの人生と罪を夏油様に自白する。その度に、夏油様の反応が怖くなり見ないように顔を更に下に向ける。

もしこれでリリに失望したら、裏切り者だと糾弾されることが怖くて、怖くて、怖くて仕方がなかつた

「君はソーマ・ファミリア、自らを理不尽に虐げた者をどう思う？」

「へ？」

思いもしなかった言葉に、リリは思わず呆気に取られてしまう

「言い方を変えよう。君はこのままの現状を良しとするかい？ 変えようとは思わないのかい？」

「」

リリは思わず黙り込んでしまう。それでもしなければ目の前にいる夏油様に掴み掛つてしまいそうだったから

「良いのかい？ ただ、自由を望むまま沈んでいく自分に、変えたくないか己の現状を」

「——さい」

「惨めだと思わないのかい？ ただ夢を見上げるだけの自分を！」

「——うるさい!!」

感情が爆発した

「じゃあどうしろって言うんですか!?! 惨め？ そんなことリリが一番良く分かってますよッ!!」

「」

「冒険者としての才能も！ 誇れる程の才能も、精神も無いリリにどうしろって言うんですか!?!」

「変えられるならとつくに変わつてますよ!!どんなに足掻いても!どんなに努力しても変えられなかったからこんな吐き溜めにいるんですよ!!」

「自由なんて喉から手が出る程に欲しいですよ!!けれどリリでは届かなかつたツ!!手にすら掛けられなかったツ!!」

「腹立たしいですよ!ただリリを都合のいいサンドバックとしか見ていない冒険者も!リリを嘲笑っている奴等も!!」

「けどツ、リリには何かを変えられる力なんて無いんです!」

「そんなリリは、私はどうすれば良いんですかツ  
 ・  
 ・  
 ・」

「私が君を救おう」

その声にリリは思わず上を向くと、そこにはリリへと慈愛の視線を向ける夏油様がいた

「君を虐げた者に罪を与えよう」

「君をソーマ・ファミリア機から解き放とう」

「君を変えてあげよう」

「君に、自由を与えよう」

夏油様が美しく笑う

「あ、あ」

間拔けな声 that 上げるが、そんなことも気にならない程に夏油様に私は意識を注いでいた

「君は素晴らしい人間だ、困難な状況でも立ち上がれることの出来る勇気のある人間だ。」

「そんな君を、君だからこそ私は欲しい」

「だから、私と共に来てほしい」

そんな言葉と共に、夏油様がリリへと手を差し伸べた

その姿はまるで神のようであり、サラサラと心の奥底に凝り固まっていたドス黒い何かが消え、夏油様という希望がリリの胸に刻み込まれていく

「あ、ああ」

私は夏油様へと手を伸ばし——

「さあ、共に往こうリリ」

「はい、夏油様」

その日、リリは本当のカミサマを見つけた

## 冒険者

リリの証言やこれ迄にソーマ・ファミリアから被害を受けた人達の快い協力をしてもらったことによつて、ソーマ・ファミリアの大半数の団員はオラリオから追放され、財産も還元という形でほぼ全てを没収。

ソーマ・ファミリアはあらゆる活動を縮小することを与儀なくされ、実質的にソーマ・ファミリアは壊滅状態に陥つた

たまたまギルドもソーマ・ファミリアの動向に目を向けていたということもありリリのこれ迄の過去や犯してきた罪状も明らかにされた上でそうせざるを得ない状況もあつたことにより、罰金だけで罪は許され、リリはソーマ・ファミリアをギルドを介して無事退団することとなつた

そんなリリは無事に私の説得によりヘステイアに受け入れられ、ヘステイア・ファミリアの団員の一人となつた。まあ、団員と言つてもリリと私しかいないのだけれど、まあそこは気にしないでしょう

私は現在リリを連れてダンジョンの四階層に来ており、リリの手にはナイフが握られ

ており、背負っている鞆にはロングソードや弓、ハンマー等の様々な武器が仕舞ってある

何故、そんなにも武器を持っているのかと言われればリリのステータスを上げる為にも縁下力持アテル・アシストの効果範囲を調べる為である

リリのスキルである縁下力持アテル・アシストはリリにとって過負荷になるほどの重量を持つ物を身に付ける、又は手に持った場合にそれに比例した能力補正を発動するスキルであり、サポーターのリリにとってはうってつけのスキルだ

サポーターにとっては

冒険者となると話は違ってくる

冒険者にとってはまあなんとも扱いにくいスキルになってくる。スキルによって補正はされるが自分の本当の力で持っている訳もないので力も敏捷のステータスも大して上がる訳もなく、一から五階層迄ならばハンマーやら斧等の重たい武器を振っていれば何とかなりはするかもしれない。

だが、六階層からは話が違ってくる。六階層には初心者殺しと言われるウォーシャドウや仕留め損ねれば大勢の仲間を呼び寄せるキラアアントなどを筆頭とした厄介な敵が出現し始める。何処そのアマゾネスのように頑丈であれば大丈夫だが、リリにはそんな頑丈さは持ち合わせておらず、ステータスで敏捷も補正はされているが補正はその重

量に比例する為、動きはさほど変わらない

つまりリリ自体の過負荷にならない程度で尚且つ負担になるようなギリギリのライクの武器を敢えて使用させることによってステイタスの向上を図ろうという訳だ

荷物持ちをするだけならばステイタスなど上げなくても良いがここはダンジョン。何時、何処で何が起こるかも分からないブラックボックスだ。

その為、いざという時の為に足でまといにならないようにステイタスを上げておいて損はないだろうし、私がダンジョンにいる間にヘステイアを襲う輩もいるかもしれないのでリリを盾に出来れば良いと私は考えた

「リリ、どれが君のスキルの効果範囲外か分かったかい？」

「はいっ！どうやらこのロングソードがギリギリだと思えます」

そう言つてリリが地面に刺しておいたロングソードを握るが、手は若干プルプルと震えていてなんとも滑稽であったがそれもステイタスを上げる為なのでそのことは口にしないでおう。その方がリリの気持ち的にも良いだろう

「じゃあ今後はそのロングソードを使つて訓練、ダンジョンを潜るとしよう。これも君の為だからね、期待してるよ」

「！はい!!夏油様の期待に応えられるようリリは頑張ります」

「それじゃありりにはあそこにいるリザードを倒そうか。ピンチになったら私が助けに



入るから心配しなくても良いよ」

「お任せ下さい！夏油様の御手を煩わせずに倒してみせます！」

ふんす！と如何にもやる気十分といった感じでリリはロングソードを前方にいるリザードマンへと刃先を向けた

「ギエエエエ!!」

「!」

リザードマンがリリを中心として壁や天井など、縦横無尽に跳ね回る

「ッー!」

(目では追える。けど、ロングソードが重りになって体が追いつかない。このままじゃ不味い)

「シヤアー!」

リリの背後からリザードマンが自信に備わっている爪で切り裂かんと接近するが何とか体を動かしリリが体を翻すことになってローブのみが切り裂かれるという結果になったが、多少の防御力を持っているローブが難なく切り裂かれたこともありその鋭利さが伺える

「ギアアア!!」

リリが改めてリザードマンというモンスターの持つ爪の鋭利さに少し戦慄するが敵

が待ってくれる訳もなく、また縦横無尽に跳ね回り、ある種の本能なのかはたまた強化種のようなものなのかは分からないがリリの死角となる場所から攻撃を仕掛けてき、リリは回避に専念することによって何とか切り抜けている

「ッ」

（コイツ、リリの死角を的確にこのままじゃジリ貧です！）

リリはギリギリと歯を噛み締め、自らの非力さを悔いる

（考えろ、リリがコイツを倒す為の手を——そうだ！）

リリは正面にリザードマンが跳ねた瞬間に接敵し、リザードマンへとロングソードを振るう。だが、敏捷は彼処の方が勝っているのでそれは難なく躲かれてしまい、背後に回られてしまう

「ギイエエエ!!」

リザードマンが嬉々としてリリを切り裂かんとその無防備な背中へと近付き、その爪を振りかぶった

「これは勝負あつたね」

夏油がそう呟いた

「分かってましたよ、あなたがリリの背後から攻撃してくることを!!」

リリは態と後ろに残していた左足を軸として腰の捻りを利用することによってリリは地面に円を描きつつも、リザードマンへと斬撃を放つ

「!?」

リザードマンがリリに嵌められたことを察したが既に自らの地から足は離れ、ロングソード既にリザードマンの目前へ迫っていた

「ギイアアア・ア——」

ロングソードはリザードマンの顔を真つ二つに切り裂き、リザードマンは悲痛な声を上げた後に魔石へと姿を変えた

コツンと魔石がリリの足元へと転がり、一瞬の静寂の後にリリは吼えた

「や、やりましたああ!!」

リリはびよんびよんと小さな子供のように飛び上がり、破顔した。下級冒険者でも二、三ヶ月程あれば簡単に倒すことの出来るモンスターであるが、リリにとっては恐ろしいモンスターであることには変わりなかった。

だが、そんな恐ろしいモンスターをリリは初めて誰の手も借りることなく自分のその手で倒してみせたのだ。

それがどれだけの衝撃なのかはリリしか分かり得ぬことだろう

「見てましたか夏油様！リリがあのリザードマンを倒したんですよ!!」

リリのその言葉に夏油は笑い、頭をポンポンと撫でる  
「やるじゃないかりり」

(体は貧弱だが、頭は回る。案外、鍛えれば化けるかもしれないな)

夏油は良い拾い物をしたと心の中で呟いた

「えへへっ、そんなことないですよ」

そんなことを言っているがりりの顔はあからさまに嬉しさに顔を歪ませている。そんなりりに夏油は顔を覗き込むようにしやがみ込み、りりの両肩に手を置いた

「おめでどうりり。これで君も立派な冒険者だ」

夏油のその言葉にりりは目を見開いた後に、今日一番の笑顔を見せた

「はいっ！」

りりの笑顔に呼応するように夏油も穏やかな笑みを浮かべ、昼食でも取ろうかとりりへと声を掛ける。りりはそうしましょう！と夏油の後ろをついていく

今、この瞬間から無力なサポーターであったりりルカ・アーデは姿を消し、そこには冒険者のりりルカ・アーデ

がそこに立っていた

これより彼女の本当の冒険は始まりを告げた

彼女が何処まで冒険者として成長するのは夏油も、りり自身も、そして神すらも理

解し得ぬこと

だが、リリは確かに冒険者としての大いなる一步を踏み出したの確かだった

これより冒険譚の前日譚は終わりを告げた

「此処がオラリオ！大きいなあ！」

小さな少年がオラリオを見上げ、その声を上げた

これより始まるのは異分子が紛れた正史から外れた歪な英雄譚

その結末はまだ誰も知らない

## 原作開始

## 開幕

鐘が響く

愛する我が子の旅立ちを惜しむように

鐘が響く

英雄の旅路を祝福するかのように

鐘が響く

物語の幕開けを告げるように

荘厳な音を鳴らし、鐘が響き渡る――

「鐘の音？」

「夏油様？どうかしましたか？」

「いや、鐘の音が聞こえたのだが、」

夏油は辺りを見回しても鐘らしき物はなく、夏油以外の人々は何事もなくこのオラリ  
才を闊歩していた

「——いや、気の所為か」

「そうですか。それより、これからどうします?」

「そうだね。君のステータスも上がってきたようだし、武器や防具を見に行こうか」

「!はいっ!」

リリが嬉しさからか道を先行するのを夏油はゆったりとその後を着いて行く

(鐘の音、か)

夏油が後ろを向き、オラリオと外を繋ぐ唯一の門へと目を向けた

「夏油様!」

「ああ、今行くよ」

夏油が少し呆れたように返事をし、リリへと歩いて行く

鐘は未だに鳴り響いていた

「……がオラリオかあ。」

一人の少年が周りを物珍しそうに、興奮を隠せないようにキョロキョロと見回す。その姿はどう見ても初めて都会を知った少年そのものであり、周りのオラリオの住人達はクスクスと微笑ましそうに笑った

それに少年も気が付いたのか、顔を赤くした

（わ、笑われちゃった。恥ずかしい。）

少年はその視線から逃げるようにその場から早足で立ち去る

少年の名はベル・クラネル。迷宮都市オラリオへと希望を抱き、村から遙々遠くのオラリオの門を叩いた無垢な少年である

（やっぱり、世界の中心と言われるだけあって大きいなあ）

足早に道を歩きつつも、先程の恥ずかしい出来事を忘れたのかキョロキョロとまた周りを見回している。

ベルにとってはおラリオにある全てが自身の「初めて」であり、目をキラキラと輝かせている

（凄い！あんなに武器が置いてあるなんて、それに防具と一式揃ってる！かつこいい！！



僕も冒険者になつたらああいうのを着けたりするのかな。!

ベルは今よりも背が高くなり、筋肉の付いた己が目の前にある鉄の鎧をその身に纏つて恐ろしいモンスターをバツタバツタと倒す今とは違う雄々しい自らの姿を夢想し、頬を緩ませる

「欲しいなあ。けど、今はそれよりもファミリアを探さなきゃ」

ベルはポケツトから先程買ったオラリオの地図を両手で広げ、ロキ・ファミリアやフレイヤ・ファミリアなどとオラリオにいる誰もが知っているであろうダンジョン攻略の最前線を担うファミリアやそれには及ばないが名を馳せているファミリアへと指を滑らせ、わかりやすいようにペンで印を付ける

「取り敢えずは此処から近いロキ・ファミリアに行こう！」

ベルは地図を見ながら、ロキ・ファミリアがあるであろう道へと足を進めていく。曲がり角を一つ、二つ、三つ目を曲がろうとしたところでドンと自身の胸元辺りに何かがつつきり、トスンと尻もちを着く

「いててて。って、女の子?！」

どうやらベルがつきかかったのは背の小さい女の子であつたらしく、その女の子は背丈には合わない大きい鞆を背負っていた

「びっくりました」

「ごっつ、ごめんなさい!？」

ベルは地面に頭を擦り付ける勢いで頭を下げ、目の前の小さい女の子に謝罪をする。その姿は事情を知らない人から見ればアブナイ現場そのものであり、冷静さを失っているベルはそんなことを知る余地もなく、ただただ頭を下げる

「大丈夫です。それよりも、貴方も大丈夫でしたか?」

「は、はい。怪我もしてないので、大丈夫、です」

「そうですか。それより、いい加減頭を上げて欲しいのですが」

「あ、はい!」

ベルが顔を上げるとそこには小柄な女性が立っており、琥珀色の綺麗な目がベルを見つめていた。女性の顔が整っていたこともあり、恥ずかしそうに顔を背けるベルに目の前の小人族バルウムの女性は首を傾げる

（どっ、どうしよう!?! どうすればいいのか分からない!）

ベルは慣れない女性との会話にどうすればいいのか分からずに口どもってしまい、それを見ている小人族の女性は困惑するように眉を下げることしか出来なかった

そんな時だった

「リリ、どうしたんだい?」

そんな二人をに割り入るかのように女性の背後から大柄な男性がぬつと現れる

「夏油様！」

どうやら二人は知り合いであるらしく、リリと呼ばれた女性はゲトウサマという男性へとペアと明るい笑みを見せる

「遅いですよ！夏油様！」

「リリが早すぎるだけじゃないかな？それより、目の前のその子は？」

「あ、そうでした！ほら！いい加減立ち上がって下さい！！こんなところを見られて誤解でもされたら大変ですから！」

そう言うとりりはベルの手を引いて、立ち上がらせる

その時に感じた、その体からは出るとは思えない自らよりも強い力に呆気にとられながらも、目の前にいる女性が冒険者なのだと思いつた

「あ、ありがとうございます」

「いえ。此方こそ私の注意不足でぶつかってしまって申し訳ないです」

「全然大丈夫です！だから頭を上げて下さい！」

ベルが慌てたようにそう言い、あわあわと慌てる

「ふっ」

その忙しない様子に夏油は嘗ての後輩を思い出し、思わず小さく笑ってしまう。それに二人は反応し、困惑したように夏油を見つめている

「ああ、済まない。別に馬鹿にした訳ではないんだ。なんだか、懐かしくてね」

夏油がそう言い、懐かしそうに目を細め、口元をゆるりと綻ばせる。その様子に二人は声を掛けるのに戸惑い、三人に沈黙が走る

その沈黙を破ったのはその原因である夏油だった

「ところで、君はロキ・ファミアリアに何か用事があるのではないかい？」

「え、なんで。」

正確に言い当てた夏油にベルは呆気にとられたように声を出す。するとペラリとベルの目の前に見覚えのある地図が差し出された

「君が落とした地図だよ。特段見るつもりは無かったんだけど、広げられていたから自然と目に映ってしまったんだ」

はいと自らが落とした地図を手渡され、ベルはありがとうございますと少し顔を赤くして受け取る

「あの、リリさんとゲトウさんはロキ・ファミアリアの冒険者なんですか？」

「いえ。私たちはロキ・ファミアリアの冒険者ではないです。それに関わったこともありませんが。そうですね？夏油様」

「うん。私達はロキ・ファミアリアと違ってまだまだ小さいファミアリアだからね、ダンジョン攻略の最前線を駆け抜けるロキ・ファミアリアと接点なんてある筈がないよ。う

ん」

「そうですか・実は僕、これからロキ・ファミリアの入団テストを受けようと思つて  
います」

「そうだったんですか」

「・」

夏油は特段驚いたリアクションもなく、ただベルをじつと見つめている

（ロキ・ファミリアは今はおラリオの一二を争うダンジョン攻略最前線のファミリアだ。故に、選ばされるのは才能のある有望な人材のみだ。だが、目の前の少年から才能が全くと言っていい程に感じられない）

これは落ちるだろうなと夏油は確信した

だが、それを口にするのではないだろう。所詮、夏油とベルは会つてまだ間もない只の他人であり、他人にそんなことを言われれば精神的にも良い影響を及ぼすとは到底考えられないからだ

夏油は何処ぞの五条とは違つて気遣いが出来る男なのだ

「受かることを願つているよ」

「はい！ありがとうございます!!」

じゃあ、失礼します！と足を進めようとしたベルに夏油は待ったを掛ける

「どうかしました？」

「一つ、警告しておこうと思ってね」

「警告？」

「そう。悲惨な末路を辿りたくの無いならば今から言うことは守った方が良いでしょう」

「！それは、一体」

「拗らせババア  
神フレイヤと関わるな」

「へ？」

ベルが呆けたような声を上げるが、これ以上フレイヤの名前や話題に触れたくないのか夏油はリリを連れてヘファイトス・ファミアアへと足を進める

「それってどういう意味ですか？」

「そのままの意味だよ」

「夏油は振り向かずそう答え、やがてその姿はベルの目の前から完全に姿を消した」

「残されたベルはただ呆然としていた」

（フレイヤって、あの女神フレイヤだよ。この世で最も美しく、可憐って言われてる。そんな人が危険だったことでも、なんでゲトウさんがそんなことを？）

「取り敢えず、ロキ・ファミアアのホームに行こう」  
ベルは身を翻し、ロキ・ファミアアのホームへと向かった

「やッ!」

リリは新しく手にしたハルバードを目の前にいるキラアアントへと叩き付けた

しかし、キラアアントのその特徴的な鋼鉄のような外殻によりその一撃は外殻を凹ませる程度に収められた

「ギギッ!」

背後からの突然の不意打ちと、外殻から響く衝撃に衝撃にキラアアントは驚愕の鳴き声を上げるが、リリはそんなことをさほども気にせず何度か、何度かハルバードを外

殻へと打ち付ける。

キラアアントは何度も反撃に出ようとしますが、ハルバードを何度も打ち付けられることによって、その身は地面へとめり込み、立ち上がることは出来なかった

そこで初めて、自分が危機的状况に陥っていることに気が付いたキラアアントは仲間へと助けを求める為にフェロモンを放出させようとするが、ビキリとキラアアントの外殻に大きな罅が入る

「これでっ、終わりですッ!!」

リリが振り落としたハルバードが鋼鉄の如き外殻を砕き、キラアアントの魔石を粉碎した

だが、リリは直ぐ様に背後へとハルバードを振り抜いた

ガキン!と鋼鉄同士がぶつかり合う音と共に、リリを襲った主が壁へと吹き飛ばされる

壁にのめり込んでいたのはキラアアントであり、死ぬ直前にフェロモンを放出するこ

とに成功し、付近のエリアにいたキラアアントが此処へ駆け付けてきたのであった

「チッ」

リリは新たに呼び出されたキラアアントに苛立ちと自らの未熟さに思わず悪態を着いてしまうが、この事態をどうにか切り抜けるべくリリはハルバードを構え、頭を回す



(リリはまだキラーアントを一撃で殺す程の力を持っていません。首を正確に狙えたとしても三回程でしょうか。三回も振っていけば、他のキラーアントに邪魔されることは目に見えます。複数体での対処となれば、私のステイタスだと何れ綻びが出ます。ここは——)

「夏油様」

「これを使うんだね？」

はい、とリリがそう答えると夏油は片手に持つていたそれをリリの眼前へと投げ渡す。ドスンとまるで巨大な岩石が降り落ちたかのようなそんな重低音と共に、階層全体が揺れているのではないかと思ってしまう程の衝撃がビリビリと床を鳴らした。

リリの眼前にあったのは巨大なハンマーだった。

「出来れば、使いたくありませんでした。この武器は本来のリリのステイタスでは持つことすら出来ませんから」

リリは目の前の巨大なハンマーを両手で掴み取り、まるで旗を掲げるようにハンマーを振り翳した。

「けど、そんな悠長なこと言っていられる程今のリリは強くありません。故に、使わせてもらいます」

リリがハンマーを振り下ろし、地面とハンマーが激突した瞬間、リリを中心としてダ

ンジョンの地面に罅が入り、キラアアントはその衝撃によって宙へと飛んだ

「!?」

キラアアントは自身の体が宙を飛んでいることに驚愕するが、そんなキラアアントの眼前には巨大な鉄塊が迫っていた

「ふッー」

リリはハンマーを振り抜く

グシヤリと生々しい音、キラアアントの外殻ものともせず粉砕し、その魔石すらも正しく木っ端微塵に砕いた

「やあッ!!」

右足を軸にリリは回転をし、手首のスナップを効かせ、三匹のキラアアントを横薙ぎに振り抜き、その姿を魔石へと変えさせる

「キシヤア!!」

地へと戻ったキラアアントがリリへと胴体を両断せんとばかりにその巨大なアギトをキチキチと大きく開き、リリへと接近する

「ー!」

リリはハンマーを頭上へと投げ捨て、近くに刺しておいたハルバードを再び手にし、接近するキラアアントへと横薙ぎに打ち付ける。リリが横薙ぎに払った隙を狙ってリ

リへと接近したキラアアントにリリはハルバードの先の槍のような形状になっている部分でキラアアントの口を的確に狙い、串刺しにする

ドスンとリリの近くへと降り落ちたハンマーをリリは手にする。するとそれとほぼ同時に先程横薙ぎにしたキラアアントが再度リリへと迫る

「ギイアアア!!」

「これで、最後ですッ!!」

キラアアントのアギトが届く前に、リリのハンマーがキラアアントへと叩き付けられ、グシャリと砕かれた

ふう、とリリが一息つき、周りにモンスターがいないことを確認した後に戦闘の構えを解き、手に持っているハンマーを地面へと置いた

「疲れましたあ・」

「お疲れ様。中々動けていて良かったよ」

「ありがとうございます！けど、キラアアントに手こずっているようではまだまだです」「そうだね。君にはもつと高みへと至れる。故に、この程度で満足してもらっては困る」

夏油がそう言うと、リリは勿論です！夏油様！と嬉しそうに笑った

「さて、今日はここら辺にして、ホームへと帰るとしようか」

「そうですね。リリもかなり疲労してますし、ダンジョンは何が起こるか分かりません

から、ここら辺にした方が良さそうですね」

よいしよとりりは靴へとハンマーを仕舞い込み、ハルバードを手に持つ。それを確認した夏油はそれじゃあ帰ろうかと言って、ダンジョンから出るべく上の階層を目指して歩き始める

それにリリは縦に並ぶよに夏油の後ろへとちよこちよこと着いて行く。その姿は宛ら親鳥の後をつける小鳥であった

何事もなくダンジョンへと出ることが出来た二人は今日一日で集めた魔石を換金した後、ホームへと歩き始めた

何時もならば人並みも少なくなり、夕陽でも眺めながら穏やかに帰り道を歩いているところだが、今日はどうやら違うようであった

ガヤガヤと道通りに人々が溢れており、その口々には「オツタル」という名前がポツリポツリ聞こえてくる

「何でしようか？」

「オツタル？」

夏油とリリは首を傾げながらも、ホームへと帰ろうと足を進め、ざわめく人々の横際を過ぎ去ろうとするとこんな声が聞こえた

「オツタルがバロールを倒し、レベル8に至った」と

「は?」

ピタリと夏油はその場で足を止めた

「夏油様?」

リリが不思議そうに夏油へと問い掛けるが夏油は聞こえていないのか、ただ呆然とその場に棒立ちしていた?

(レベル8? 上を行かれた。オツタルに——)

「夏油様!」

「ッ!」

リリの声によって意識が現実へと再浮上した夏油はリリが此方を心配そうに見ている姿で自らが立ち尽くしていたことを察し、申し訳なさそうに済まないと少し頭を下げた?

「いえ、それよりどうしたんですか」

リリの素朴な疑問に夏油はなんでもないよとだけ返し、帰ろうかとまた歩き出した  
「ちよ、待つてください!」

リリが小走りに夏油の後ろを着いていき、心配そうに夏油の背中を見つめているがそんなことも気付かない程に夏油はオツタルのレベルアップの件で頭が一杯だった

(オツタルは更に上へと至った、私よりも先に)

ギリリと夏油は悔しさから奥歯を噛み締め、掌を痕がくつきり残るといふ程に強く握り締めた

オツタルとの戦いでレベル7に至った夏油と、元々ステイタスがほぼカンストし、レベルアップの為の偉業が足りなかったオツタルではオツタルの方がレベルアップするには有利な条件である。

流石の夏油といえどもこの一ヶ月程度でレベルアップをするには期間や、乗り越えるべく壁、そしてステイタスの向上が間に合わなかった

オツタルが先にレベルアップをする理由など幾らでもある

けれど、先へ行かれて良い理由など一つもなかった

（私は、此処に最強に至る為にやってきた。だが、なんだこの体たらくは。！）

夏油の掌からポタポタと血が流れる

（そうだ、私は悟の隣に立つ為にダンジョンへと潜っているのだ。故に、私は昇り続けなければいけないんだ、星星へと!!）

夏油の目に覚悟の炎が燃え上がった

（負けてたまるものか。この程度の通過点オラオラ最強で手間取っている暇などないのだから——

！）

ホームへと辿り着いた夏油とリリ。夏油は扉に手を掛けながら、明日に深層へと挑む

と決心をし、道具などの準備をしなければということを考えてつも扉を開く

「おかえり！夏油君とリリくん！」

「お、お邪魔してます」

そこにはヘステイアと白銀の髪と赤い眼を持つ少年、ベル・クラネルがそこにいた

「は」

「え？」

驚きを隠せないように固まる二人にヘステイアは気が付いていないのかベルを前へと押し出し、ニコリと笑った

「紹介しよう！彼はベルくん！僕達の新しい家族になった子さ！」

「よ、よろしくお願いします」

ベルはペコリと頭を下げた

そんなベルの様子とワクワクと褒めてほしそうに此方を見ているヘステイアの姿に夏油は顔を手で覆った

「そっかあ」

夏油の弱々しい声がホームに響いた